

---

**幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち？**

++

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち？

### 【Nコード】

N4206Z

### 【作者名】

十十

### 【あらすじ】

大切なモノを守るためなんだった犠牲にする　それが俺の生き方だ。殺し屋である少年の日常と非日常。大切なモノを守るためとは言え、人を殺してしまってもいいのだろうか？　ダメなんじゃないか？　日々そんな感じで葛藤し苦悩する少年の行く末は　。

## プロローグ（前書き）

駄文ですが、どうか最後までお付き合いいただければと思います。

## ブローグ

闇夜に浮かぶ幾多の摩天楼。

いま俺が視界に捉えているその光景は、夜空に瞬く星そのもののようだ。

逆に、夜空自体には星が一つたりとも存在していない。……温暖化とかフロンガスとかが関係してるのかもな。

結構どうでもいいことを考えながら、俺は腕時計を確認する。

午後一時二六分。

予定時刻まであと少しと迫り、俺の胸はだんだんと高鳴ってきた。時計の力チカチと動く針を見ていたらさらに緊張してきたため、俺は時計から摩天楼に目を戻す。

うん、やっぱりいい眺めだ。俺がいるのは地上一〇〇メートルに位置する屋上で、ここから見える景色は俗に言うあれだよ、あれ……そう！　一〇〇万ドルの夜景って奴だ。見るからに金かかってそうだもんな。……ってあれ？　一〇〇万ドルの夜景の意味って、金のかかった夜景ってことでいいのか？　……ま、どうでもいいや。

にしても寒っ！　Ｔシャツと短パンなんかでこんな場所に来るもんじゃないな。まだ九月の上旬だからって甘く見てたぜ……。うう……寒っ。

地上ゼロメートル地点とはまったく異なる突風吹きすさぶ中、俺はその場で駆け足をしなごらもう一度時計に目を向けた。

午後一時二九分。

「そろそろだな……」

俺がこんな寒空の下にいる理由は、一分後にやらなければならぬいことがあるからだ。

そのことを考えると、また緊張が湧き上がってくる。寒さと相まって、俺の体は小刻みに震えだした。あ……これはちょっとヤバイ。手元がブレるかも。

しかしそうも言ってられない。これは絶対にしくじれない仕事なんだ。もしも、もしもしくじれば、俺自身が危うくなるかもしれない仕事なんだよ……。くそつ、また震えがきつくなっただぜ……。

「……落ち着け、落ち着くんた、俺」

呟きながら、俺は仕事道具を掴む。三脚によって固定されている狙撃銃を。

「大丈夫、大丈夫だ……」

自分に言い聞かせるように言葉を発し続けながら、俺はすでに倍率も標準も合わせてあるスコープを覗く。

スコープが映しているのは、とあるビルの会議室のお偉いさんが座る席だ。

さみい……。くそつ、早く来いよ。これ以上体温が下がると精度が落ち 来た……。っ！

心で愚痴をこぼしていると、裕福そうな強面老人がスコープの中央に現れた。と同時に毎度のことながら、俺の中に残る僅かな良心が津波のように押し寄せてくる。

こんなことしていいのか？

こんなことしてなんになるんだ？

こんなことして正しいのか？

こんなことして誰か悲しまないか？

こんなことするのは間違ってると思わないのか？

こんなことこんなことこんなこと……。こんなこと……。こんな……

……いや違う！ これは何不自由なく暮らすためなんだ！ 生きるためなんだ！……。でもそんな自分勝手のために……。俺は人をころ

……。違う！ 違うんだ！ これは自分勝手じゃない！ こうしてくれって頼む人がいるから、俺はそうして欲しい人のためにやってるんだ！ 自分勝手じゃなくて誰かのためだ！

でも、それが自分勝手につながるんじゃないのか？

違う！ うるさい！ もう何回もやってることだろ！ いい加減にしないと……。こんな感情はもう失くさない……。非情になれ。

非情になるんだ！

何不自由なく暮らすために、それによりあいつのために、  
あいつのために、あいつのために、あいつのために、  
あいつのために、あいつのために、あいつのために、

俺は引き金を引いた。

乾いた破裂音が虚空にこだました。

「うおえ……」

スコープを覗いていた目が狙撃の結果をバツチりと捉え、結果、そのあまりの凄惨さに俺は思わず胃の中の物を逆流させた。

「うう、うえ、はあ……はあ、あ、ア……早く、逃げないと……」

ひとしきり吐き終えた俺は、すぐさま銃の収納に取りかかる。は、早く、早くここから逃げないと、立ち去らないと、消え去らないと！

ついさっきまで考えていたことなんてまるで忘れた。一刻も早くここから立ち去ることが、いまなによりも優先しなければいけない行動だから。

罪惡感に浸る暇さえない。

銃を収納し終えた俺は、勢いよく非常階段を駆け下りる。カンツカンツカンツと、俺の逃走ルートを向こうに誇示しているかのような金属音を、立てたくないのだが立ててしまう。実際はそんなに大きな音ではないんだろうが、俺には街中に響きまくっているんじゃないかと思うほどに大きく聞こえる。そして、それがまた俺の恐怖心をあおり、いつそう焦らせる。

俺は下りるスピードを上げた。当然、音はよりいっそう早く大きく聞こえるようになる。プロのドラマーのようなリズム。普段聞けば小気味よく聞こえるのかもしれないが、いまはこの音を聞いた者が報復にやってくるのではないかと思ってしまう。

俺は水浴び後の犬のように身震いをした。  
もちろん、言うまでもなく恐怖からだ。

「ハア、は、ハア、はあ、ハあ」

俺はとにかく走って走って駆け下りる。

そうして、途中何度かコケそうになりながらも無事に地上まで走りぬいた俺は、何事もなかったかのように街へ溶け込む。

ここは大都市。地上まで下りてしまえばこちらのものだ。もう次の日になるつかという時間帯だが、人はまったく減らない。むしろ増えているような気がしないでもない。ブロンド超絶美人にマッチョな黒人、俺と同じ年ぐらいの少女が男と歩いていたりと、紛れ込むにはもってこいだ。

ちなみに、銃はギターケースの中に入っているからバレはしない。俺はいま、どこからどう見てもバンドの練習帰りのガキだ。リズムでも刻むかのように頭を振りながら歩く。

しばらく進み非常階段から結構離れたところで、俺はギターケースの肩紐を気にかけるフリをしながらちよつとだけ振り返ってみて

「うわっ……」

顔をしかめにしかめた。

なんでかって言うと、さっきまで潜伏してたビルの下にどう見ても一般の方ではない黒服の男たちが数人いらっやって、獲物を探すハンターみたいに辺りをキョロキョロと見回していたからだ。直立不動で屋上の方を見上げている奴もいる。

ふう……危なかったあ、今回はマジでギリギリセーフだったぜ。あと何十秒と遅かったら俺はいまごろ……蜂の巣で作ったオブジェみたいになってただろうからな。

「はあ……」

俺は肺にためていた空気を全て押し出すように息をはいた。これはため息じゃない。心からの安堵を表現したんだ。

危険な仕事もこれでとりあえずは無事に終了ってわけだからな。

さてと、あとは帰るだけだ……。

愛しいあいつが待つてる家にな。

腕時計で時間を確かめると、すでに一時を過ぎていた。

俺は閑静な住宅街の中を歩いている。まあ、一時を過ぎればどこも大抵は閑静なんだろうけどな。

と、そんなバカな事を考えていると我が家が見えてきた。いや、正確には家っていうか道路に出てる看板が見えてるだけだ。

『ストルス雑務店』っていう看板。

俺の家は自宅を店舗に自営業をやってるんだ。

雑務店っていうのは、要するに何でも屋。

本当は父さんと母さんが営んでただけけど、その父さんと母さんは一年前に事故で死んでしまった。以来、俺が継いで営業している。

あ、そうそう。言っておくけど、殺し屋っていう仕事は俺が勝手にやり始めたことで、父さんと母さんは人殺しなんかじゃないからな。

父さんと母さんは、ただ近所の人たちの助けになりたいっていう志の下に何でも屋を始めただけなんだ。だから、父さんと母さんに変な思いを抱かないで欲しい。

蔑むなら俺だけを蔑んでくれ。父さんと母さんの店を汚してしまったのは、紛れもなく俺だから。

だから、父さんと母さんに対して、心の底から申し訳なく思ってる。悪いこととしてごめんなさい、人の道を踏み外してごめんなさい、店を汚してしまっでごめんなさいって。

悔いても悔いても悔やみきれないほどに申し訳なく思ってる。

だったら殺し屋なんかやるんじゃないやねえよって思うかもしれないけど……でも、そうしなければならなかった。……でないと生きられなかった。

父さんと母さんが生きている時、つまり、何でも屋を大人二人で切り盛りしている時ですら、家計がそれなりに厳しかったんだ。



なのに、父さんと母さん、大人二人が死んで、俺一人でやり始めたらどうなったと思う？

生活できなかったよ。

俺だけじゃできることも限られるし、そもそも当時中等部だった俺に依頼しようとする奴なんて一人もいなかった。

かなり苦しい日々が続いた。……それが俺一人ならよかったさ。でも、俺には妹のリールがいるんだ。だから、そのリールのためになんとかしないとして俺は考えて、それであちこちから色んな情報をかき集めた。なんでもいいから金になるようなことを必死に探したんだ。

そしたらあった。この時代にも殺し屋っていう仕事が。

最初はやるうかやらないかでもの凄く葛藤したことを覚えている。けど、いま現在の俺を見てもらえば分かる通り、俺はその殺し屋っていう仕事をやることにしたわけだ。

いまでも鮮明に思い出せる。

最初のターゲットをナイフで突き刺した時のことを。罪悪感で満ちたことを。でも、口座に結構な額が振り込まれているのを見て

思わず笑ったことを。

ハハッ、俺はもう堕ちてるんだ。

ダメ人間なんてもんじゃない。もう壊れに壊れて破綻しまくってる。

こんな奴、ホントならリールのそばに居ていい人間じゃない。

でも、俺がいないとあいつはどうなる？

きっと、いや絶対に一人では暮らせない。だってさ、リールはまだ小六なんだぞ？ 生活力なんていまはない。

だから俺は、自分が破綻していると分かりながらもあいつのそばにいる。あいつに何不自由ない生活をさせてやるために、俺はそばにいる。これからもそばに居続ける。

それにさ、リールは俺の原動力なんだ。リールがいるから、俺はなんだってできるんだ。逆にリールがいらないなら、俺は何もしない

かもしれない。

と、色々考えながら歩いていると、家の玄関前まで到着した。さあて、その原動力にもうすぐ会える。俺はほころぶ顔を抑えられない。

玄関の鍵を開けた俺は、もの凄い小声で「ただいま」と言いながら家に踏み込んだ。もちろん返事はない。というよりあつたら困るなるべく音を立てないようにしながら、俺は二階の自分の部屋へと向かう。

真っ暗な自室にたどり着いた俺は、ギターケースを隠し収納スペースにしまうべく棚をスライドさせる。……スライドって言ったけど、ホントは押してずらしただけだ。一冊の本をスイッチ代わりにしてウィーンって開くとかじゃないからな。

まあそれはさておき、俺は眼前にお目見えしている隠し収納スペースにギターケースを立てかける。ギターケースを収納できるぐらいには大きな空間だ。おおよそロッカー二つ分ぐらいだ。

ここには他にも殺しの道具が隠してあったりする。例えばスタンダードにサバイバルナイフとか、電圧を異常なまでに高めたスタンガンとか、あんまり使わないけど普通のハンドガンもある。武器だけじゃなくて睡眠薬なんかの薬物も揃えている。

俺も一応は殺し屋だからな。それなりに道具集めはしてるってわけさ。けど、今後は特に増やす予定もない。大体は狙撃銃でカタがつくからな。

「んぐっ……」

ズズズツと、用が済んだので棚を元の位置に押し戻す。

隠し場所がそんなところで大丈夫なのかと思うかもしれないけど、心配には及ばない。この家には俺とリールしか住んでないし、そもそもリールにはこの棚をずらす力はないだろうし　ってそうだ、その華奢な体を拝みにいかないと。

俺は抜き足でリールの部屋へ向かう。

あんな汚い仕事をしたんだ。可愛い妹の顔を見て色々相殺しない

とやってられないって話だ。

リールを起こさないようにと、俺は慎重にドアを開けて忍び足でベッドに近づき 目を見開く。

「……ああ、可愛い」

数時間ぶりに見たリールはとても、それはもう凄まじいほどに愛らしい。

金色の艶やかな長い髪。いまは閉じてるから分かんないけど、開くとめちやくちやくりつとして猫みたいに大きな愛おしい目。小柄な身体は白を基調としたパジャマに包み込まれている。

外見だけ見ると、天使みたいでどこか大人しそうに見えるんだけど、それはまったく違うんだなあ。実際は凄く天真爛漫で、この姿とのギャップが最高だ。タオルケットを蹴飛ばしてるのがまた可愛いらしいじゃないか。

俺はそのタオルケットを腹にかけてやり、「おやすみ」と呟いてからリールの部屋を出た。あんまり長居して起こしても悪いからな。それに長居なんてする必要ないんだ。俺はリールの顔をチラッと見るだけで、それだけで何もかも忘れられるんだ。嫌なことでもなんでもな。それに、俺はそれだけで活力がもらえる。さっきも言ったけど、リールは俺の原動力。いや、原動力なんて表現じゃ収まりきらない。もう端的に言っただけだ。

リールは俺の全てだ。

これは大げさでもなんでもなく、どうしようもないほどに本当のことだ。少し気持ち悪いかもしれないけど、俺としてはどこまでも大真面目な表現だ。

だって、俺はあいつのためならなんでもする。なんだってできる。それを証拠に、俺は人を殺してるだろ？ リールに不自由な思いをさせたくないから、頑張って人を殺してるだろ？ もちろん……これからも殺し続けるつもりだ。

俺は……俺はリールのためになるのなら、堕ちるところまで堕ちてやる。俺一人おかしくなるだけでリールが救えるのなら、俺はどこまでだって堕ちてやる。

「……あつ！」

そこまで思考したところで、俺はいまりールの部屋の前にいるということを思い出す。

くそっ！ バカか！ 何やってんだ俺は！ リールの部屋の前で汚いことを考えるなって言っただろうが！ リールを穢すな！ 自分に喝を入れながら、俺は急いでリールの部屋を離れる。

ふう……これでよし、と。

さて、俺は殺し屋である前に、ただの高校生でもある。当然ながら明日も学校だ。あーイヤだイヤだ。殺人休暇って制度を導入してくれないもんかねえ。……冗談だから気にしないでくれ。

それはそうと、早いとこシャワー浴びて寝るとするか……。

そのあと俺は、いま言った通りにシャワーを浴びてからベッドにもぐり、あっという間に夢の中へと落ちていった。

人を殺す、という行為をした日は、いつも大体こうして終わる。

## 1章 1

「ごぉ……っ！」

次の日の朝、俺は腹部にもの凄い衝撃を感じて眠りから覚める。だが、これがなんなのか分かっているので、俺は焦りもせず目を開けるよりも先に声を発した。

「おはよう……リール……」

「おはよう！ フィー兄ちゃん！」

リールの弾むような無邪気な声。俺は毎朝毎朝こうして起こされる。うらやましいだろ！

ちなみに、リールは俺のことをフィーと呼んでいるが、俺の名前はフィーニツだ。

「早く起きなきゃダメだよ。早く早くっ」

言いながら、リールは俺の腕を引っ張る。

……ああ、幸せだ。リールの力強い引っ張りのせいで俺はベッドから床に落ちたけど、そんなことは怒る材料にならない。むしろ微笑ましい限りで、俺の顔は自然とほころぶ。

と、なぜか分からないけど、リールが初等部の制服のスカートを急に押さえ始めた。

どうしたんだろう？ と思っていると、リールが顔を赤くしながら言葉を発してくる。

「ふい……フィー兄ちゃん……わ、私のスカートの中見て笑った……」

ああ、なるほど。俺の微笑みをパンツを見て笑ったと捉えたのか。まったく、俺はそんなに変態じゃないぞ。

「いいかリー」

「い、言い訳なんか聞かないもん！ えっちえっち変態！ フィー兄ちゃんのバカアホ間抜けっ！」

可愛らしくぶくうと頬を膨らませながら、リールが悪口の限りを

吐き出してきた。

くっ……反抗期か！　だがしかし、俺にそんな罵倒は効かない。  
怒ったリールすらも愛しく感じるんだからな。

俺はますます顔をほころばせた。

「わ、私のスカートの中を思い出して笑ってるんだね！　ふい、フ  
イー兄ちゃんなんかもう知らないもん！」

俺の笑顔は変態っぽいのだろうか。リールはそうはき捨てて、俺  
の部屋から出て行った。その後ろ姿も可愛いらしい。

「……見てないんだけどな」

リールの背を見送りながら、俺は苦笑いを浮かべて立ち上がる。  
そもそもリールのパンツなんて、俺は洗濯物として干してあるの  
を散々見てるんだけどな。……やっぱり穿いている物を見られるの  
は恥ずかしいのだろうか？　……そういえば、水着は見せるものだ  
から恥ずかしくないが、下着はあくまで下着だから恥ずかしいとか  
なんとか誰かが言ってたような……。

俺があごに手を当てながら考えていると、開けっ放しの部屋の入  
り口からいい匂いが漂ってきた。

どうやら、すでにスリイナが来ているようだ。　あ、スリイナ  
っていうのは、スリイナ・フォシルニクスって言う俺の幼なじみの  
ことだ。いいとこのお嬢さんで、俺の家のすぐ近くにある大きなお  
屋敷に住んでるんだ。

スリイナのお屋敷には、俺がまだ人殺しに手を出す前、父さんと  
母さんが死んだ直後に少しのあいだけ世話になったことがある。  
そうなった経緯としては、俺とスリイナが幼なじみだからというこ  
とも当然あったんだけど、もっと大きな理由として、俺の父さんと  
スリイナの親父さんが昔からの知り合いだったっていう要因もあっ  
たんだ。その頃は俺もリールも暗く沈んでた時でさ、正直な話、あ  
の時スリイナのお屋敷に呼ばれなかったら、俺たち兄妹はあと追い  
自殺でもしてたかもしれない。だって、父さんと母さんがいきなり  
この世からいなくなっただぞ？　そうなるのも無理はないって思

わないか？

……ま、そんな辛気臭いことはさておく。

とにかくだ、スリイナはいいとこのお嬢さんで、俺の幼なじみで、お嬢さんのくせに料理ができる、なんとも不思議なほんわか少女だ。で、そんなほんわか少女は今日も朝食を作りに来たらしい。別に頼んでるわけじゃないんだけど、やっぱり父さんと母さんがいないことを気遣ってくれてるらしいんだよ。まあ、俺としては作ってくれてもくれなくても、どっちでもいいんだけどな。……いや、あれだぞ？ 作ってくれることに关してはありがたいとは思ってるぞ？ 当たり前だけど。

それで話はちよつとばかり変わるんだけど……スリイナも当然、俺が人殺しだということは知らない。

つまり、俺は自分が殺し屋だつてことを誰にも言つてないってわけね。だからつて、理解者がいないから辛いとかつてわけではないけどな。どつちかつて言えば誰にもバレたくないし。……つてそりや当然か。

なんてことを考えたのち、俺は部屋を出た。

これはなんの匂いかな？ 階段を下りながら、俺は鼻をくんくんさせる。……分かん。

朝食の材料はスリイナが自宅から持つてくるんだ。だから、家の冷蔵庫の中身を把握していてもどんな朝食が出てくるかは分からない。でもま、それがまた面白いんだけどな。

だつて驚くなかれ、こないだは朝からキャビアさんが出てきたんだぞ。どこの高級ホテルだ！……って思わず突つ込んだものだ。

でさ、俺がそう突つ込んだら、スリイナの奴なんて言つたと思う？

『こんなの高級じゃないよ？』

だとさ！

生まれも育ちも違つていうのはまさにこれだ！……と痛感した出来事だつたぜ……っ！

ちよつと苛立ちながらリビングの手前までやつてきた俺は、さて

さて今日はどんな食材を持ってきやがったのかなあっと思いつながらリビングを覗いて

「……………は？」

俺はリビングに入ることをやめ、廊下で深呼吸を開始する。

あいつ……………またやってくれたよ……………。とんでもないもん持ってきたやがったよ。写真とかでしか見たことのないもん持ってきたよあつたよあ！

いやいやちよい待て……………あんなもん一体どこで作ったんだ？

スリイナはいつも我が家の狭苦しいキッチンで朝食を作るのだが、あれを作るほどの機能、うちのキッチンにはなかったと思う。

ということはだ、スリイナの奴……………あれを自宅から持ってきたってことか？ フォシルニクス邸から一〇〇メートル近く離れた俺の家まで、スリイナはあれを持って歩いてきたってことなのか。バカかあいつは！

それに俺ってば、朝はシンプルにいきたくないんだよね。パンでいいんだよ、パンで。なのに、なのに……………何あれ？ なんて朝っぱらから油で揚げたもんを食わなきゃいけないんだ。

イライラが増してきた。俺は文句を言うため、リビングに踏み込む。

「おい、スリイナ！」

「あ。フィー、おはよう」

穏やかな目を緩めに緩めて、スリイナが挨拶してきた。……………だがな、俺は挨拶どころじゃないんだぜえ！

「おはようじゃねえ！ なんじゃあこりゃあ！」

俺は例のモノを指差しながら声を荒げ、スリイナを見据える。

俺たち兄妹よりも色素の薄い金髪、それを肩の辺りで切り揃えてウェーブをかけた髪形。雪のように白い顔はおっとりとしていて、見る者に癒しを振りまく。いまの俺は癒えないけどな。身体は平均よりは少し上ぐらいだと思う。まあ、発展途上ってところだ。で、その発展途上の身体の上に高等部の制服を身に着けている。



そんなスリイナは俺の声にビクツとしながら、

「……何って、北京ダックだよ？」

例のモノの正体を口にした。

そう、そうなんだ！ こいつは北京ダックなるものを持ってきやがったのだ。おかしいだろ？ 朝食に北京ダックっておかしいだろ？ 本場中国の人でも食わないと思う！

「……何って、北京ダックだよ？」

俺が内なる世界で突っ込みを繰り返しているあいだだろうと、現実世界では時が流れ続ける。

スリイナは、俺のそんな心中突っ込みを沈黙として受け取ったらしい（まあ当然だけど）。大事なことなので二度言いました風にもう一度北京さんを紹介してきた。

「あのな、そんなのは見れば分かるわ。俺がなんじゃあこりゃあ！ って言った理由は、なぜにこれを朝食としてチョイスしたのかってことだよ」

そこはぜひともお答え願いたい。北京ダックはどういう経緯で朝食にセレクトされたのか。個人的にとても気になる。

俺に尋ねられたスリイナは、若干申し訳なさに言葉を紡ぎだす。

「あのね、昨日の余りなの……。ごめんなさい」

「な……っ！ あ、余りだとお……」

俺はそれ以上言葉を続けられない。

なんだって？ ペ、北京ダックが余るってなんだ？ どういうことだ？ 一体どんな食卓だったんだよ、昨日のフォシルニクス家。

……まあ、でも、余りなら仕方ないかもな。捨てるのはもったいないし。

貧乏気質な俺は、余りという言葉に弱い。もったいない精神が底から湧き上がってきた。

「スリイナ、謝るな。別にいいって。こんなもの食えるっていうのは逆にありがたい。高級なことに変わりはないんだからな。余りで結構コケコッコーってな」

そう、俺は最初ギヤーギヤーとわめいていたが、これは立派な高級料理。何を文句言う必要があるってんだって話だ。

「そう？　ならよかったあ……」

ライ麦畑のように穏やかな笑顔を浮かべるスリイナ。　さてと、スリイナの顔に笑顔が戻ったことだし、さっそくいただきますをしよう　と思つてやめる。

リールが食卓にいないじゃないか！　どこに行つたんだ……　って  
そういえばさつき、リールの部屋のドアが閉まつてたような気が……  
。　ってことはもしかして……　まだ俺にパンツを見られたって誤解してるのか？　それで恥ずかしくて部屋に閉じこもってるってことなのか……？

うん、まあ、多分そうだろうな。リールは大雑把に見えるけど、以外に繊細な子なんだ。……　たく、ホントにしょうがない奴だなけど、そういうところが可愛いんだよな。

「じゃあ俺、ちよつくらリールのこと呼んでくるからな」

「うん、分かった。でも冷めちゃうと美味しくなくなるからね」

あー……　確かに、冷えた鶏肉っていうのはあんまり美味くなさそうだな。

「よし、分かった。即行で戻ってくる」

俺は返事を返してリールの部屋へ向かう。

はてさて、どうやってリールを部屋の外に出そうか？　怒鳴って引きずり出すのは論外だし……　じゃあ謝るか？

……　んー、パンツを見ていないのに謝らなければならぬってことに対して少し不満を覚えないでもないけど……　でも、リールの顔をこのまま見られないのっていうのは、もっと問題だな。

「うん、謝ろう。そうすれば全てスムーズに済むはずだ」

方針を固めた俺は、目の前に迫つたリールの部屋のドアを見て、一度だけ深呼吸。

それから、俺はリールの部屋のドアを二回ノックした。

「おい、リール。出てきてくれないか？　俺が悪かったよ。ごめ

んな。兄ちゃんに顔を見せてくれないか？　ちゃんと謝りたいんだ」  
どこまでも優しいトーンで呼びかけると、

「……ほんと？」

ドアの向こうから、どんな楽器よりも素晴らしい音色が聞こえてきた。ああ、ウィーン少年合唱団よりも綺麗な声だ。俺は聞き惚れながら言葉を返す。

「……ホントだとも。大体、なんで俺がリールのパンツを見てニヤけなきゃいけないんだ？リールのパンツなんて洗濯物で見放題だぞ？　とつくの昔に耐性ついてるから、俺はいまさらニヤけたりしないぞ？」

「フイー兄ちゃんなんか死んじゃえばいいのに！」

「え？　いまなんて」

なんかリールの口から汚い言葉が出たような……。

「だーかーら！　フイー兄ちゃんなんか死・ん・じゃ・え・ば・い・い・の・に！」

「ぐうあ……し、し死んじゃえばいいのに、だと……？」

な、なんでリールは怒ってるんだ？　お、俺は何か間違ったことを言ったのか？

「り、リール？　俺はほんとにニヤけてないんだぞ？　というより実を言えば、さっき兄ちゃんはリールのパンツを見てないんだ。ホントなんだ信じてくれ！」

「そ、そういうことじゃないもん！　私の洗濯物のパンツ、その、見てるって……も、もうホントに知らないもん！　フイー兄ちゃんの色情狂！」

し、色情狂……。俺、いまリールに色情狂って言われた？　け、けどなんか、あんまりダメージを感じなかったぞ。……うん、リールにそういう扱いを受けるのも結構いいかも。あは、あははははって、いやいやいやいやいやちがつ　う！　早くリールの顔を見たいんだろ！　俺はいま、何に目覚めようとしていた？　あ、危なかった……。危うくダークサイドに堕ちるところだったぜ。

……いや……まあ……もう堕ちてるんだけどな。

でも、いまはそれをさておくことにして、そろそろ本気で謝らないとこれはマズイな。

俺はリールの部屋のドアに向かって誠意を込めて頭を下げる。

「リール。本当に悪かった。女の子なんだからパンツ見られるのはイヤに決まってるもんな。なのに、俺はなんにも分かってやれなくて、むしろ傷つけることばかり言っちゃって……まあ、その、とにかく謝るよ。ごめんな、ホントにごめんな。俺が全部悪かった!」

かなり真剣な調子で、俺は謝罪を述べた。

と、目の前のドアがギィ……と音を立ててほんの少しだけ開いた。俺は腰を直角に曲げる形となっているので、リールがどんな顔をしているのかは分からない。けど

「フイー兄ちゃん」

さっきまでの怒った口調じゃなかった。いつもの無垢で可愛いリールの声だった。俺はホッと一息ついてから、「なんだ?」と頭を下げたまま尋ね返した。

「あのね……」

言いながら、リールは部屋のドアを最大まで開く。

依然として俺は床を見たままだが、リールの足が俺に近づいてくるのが見える。……何されるんだろ? もしかして頭などで?

いやいや、なんでそんなことされるんだよ!

こんな状況にも拘わらず、セルフノリ突っ込みをしている俺。

対しリールは、そんな俺を戒めるかのように勢いよく部屋から飛び出してきて

「えいっ!」

なんとも可愛らしいかけ声とともに俺の両肩を押してきた。

押された俺は、唐突過ぎたために身構えることもできず、そのまま後ろにひっくり返ってしまう。まるで、凄腕の武術の使い手にわけも分らず倒されたかのような感覚に陥ってしまった。

「えへへっ、早く朝ご飯食べよ?」

リールは、それで許したからねと言わんばかりのしてやったり顔で俺を見下ろしてくる。

…… やっぱり、リールはそういう笑顔が一番だ　　って、あぁっ！  
「ん？　フィー兄ちゃんどうしたの？」

「い、いや！　なんでも！　それよりもあれだよあれ！　今日の朝食は冷めないうちに食べた方が美味いってスリイナが言ってたぞ？　だからほら、リールは早く行きなさい」

「…… 変なフィー兄ちゃん。でもいいや！　朝ご飯！　朝ご飯！」  
いつもの元気な声を発しながら、リールはスタスタと階段を下りていった。

「つたく、リールは最後の最後で甘いなあ……」  
俺はこらえていた苦笑を表に出した。

だってリールの奴、最後の最後、仰向け状態の俺の眼前に立ったんだぜ？　どうなったかは察しがつくだろう？

そう、今度こそ俺は、おもいきりリールのパンツを見てしまったわけだ。

ちなみに白でした。

というより白しか持ってません！

毎日洗濯機回して、毎日洗濯物干してる俺が言っただから間違いない！

## 1章 2

リールのパンツを目撃してから二分後、俺は食卓にいた。無論、朝食のためだ。

食卓は一度に四人までが使用可能な、まあ、つまりは至って普通の四角いテーブルだ。席は俺とリールが並んで座ってて、スリイナは俺の対面。

この通り、俺たちはもう完全に席へと着いている。けど、まだ北京ダックさんを口にしてはいない。

スリイナによる、北京ダックさんの正しい食い方講座が開かれているからだ。

なんでも、北京ダックさんは皮だけを食べるらしい。そいだ皮とネギとタレを薄い生地みたいな奴にくるんで食べるんだとさ。オサレだことオサレなこと。庶民には無縁の食べ方だな。

「説明はこんなところかな。さあ、もう食べてみていいよ」

北京ダックさん講座が終わったようなので、俺はさっそくいただいてみることに。

えーと、この薄皮の生地……ダックさんの皮と千切りされたネギ、それとタレを乗つけて……あーん。

俺は完成系を口の中へ運んでみた。

「……あ、美味い」

フイーニット・ストルス、一五歳。食の階段を一段上る。うむ、北京ダックさんとはこれからも末永くおつき合いたい！  
そう思えるほどに、北京ダックさんは美味かった。

リールも「おいしい！」と言っている。

俺たち兄妹の反応に、スリイナは胸を撫で下ろしていた。

そのあとも俺は三つ、北京ダックさんを口にした。そうして朝食が終了したわけだが、俺は食卓の中央に君臨する裸のダックさんを見つめていた。

「フイー、どうしたの？」

ダックさんを見据える俺に対して、スリイナが小首を傾げながら尋ねてきた。

「いやさ、この身包みをはがされたダックさんはどうなるのかなあ  
って思ってたな」

ダックさんには、まだ美味そうなお肉部分が残りに残っている。

「うーん、まあ……食べられるけど、普通は、もう食べない……かな。何かに加工しないと味ないしね。これは捨てようと思うんだけど……ダメかな？」

「え？ もつたいなっ！ 味なくったってタレにつければいいじゃんか！」

あまりにも悲惨過ぎるダックさんの末路に、俺のもつたいない精神が騒ぎ出した。

「じゃあいま食べる？」

「あ、いや、それは……」

俺のもつたいない精神はどこへやら。正直、もうダックさんいらない。俺って、朝はそんなに腹が減らない方だからな。これが夜なら喜んで食ったかもしれないけど。

でもだからといって、これを夜食うのかと聞かれると、それもちょつとあれだな……。

だってさ、この状態のまま保存してたら……なんとなくだけど、悪くなりそうじゃないか？ 冷蔵庫に入れてたとしても、ダックさんは身がむき出しだからさ。なんとなく食べる気が起きないっていうか……ね？ 分かるでしょ？

だから、ダックさんの末路は……

「……スリイナに託す」

「分かった。じゃあ私、一回家に戻るね」

スリイナはダックさんの皿を両手で持って、リビングを出て行った。

さよなら、ダックさん……っ！

ダックさんに哀悼の意を捧げ、それから俺は自分の部屋へ向かった。制服に着替えるためだ。

俺はマジシャンもびっくりするほどの速さで着替えをした。嘘だけど。本当は二、三分かけてゆっくりと着替えました。

そのあとは勉強道具をカバンに詰めて、あーあ学校やだめんどいつて思いながら再びリビングへ。

どうやら、まだスリイナは来ていないようだ。けど、もういつもの登校時間になったので、俺は毎朝の日課をしてから外へ出ることにした。そうすればスリイナもちょうどよく来るんじゃないかと思う。

で、その日課とはなんぞやと言えば、父さんと母さんの遺影に挨拶をすることだ。

「リール！」

父さんと母さんへの挨拶はリールと一緒にに行く。もう何ヶ月と続けている、俺たちの日課中の日課。欠かせない朝の行事といったところだ。

リールもこの時間になると呼ばれるってことが分かってるんだろ。うな。すぐに俺の下へと駆けてきた。

そうして、俺たち兄妹は並んで父さんと母さんに黙祷を捧げる。

俺は軽く目を閉じた。

……父さん、母さん。人殺しなんかしてしまってホントにごめんなさい。でも、リールのためなんだ。リールに何不自由ない生活をさせてやるためなんだ。……って言っても怒るよな……。いや、それはそうだよ。俺は人殺しなんだから。怒られない方がおかしいんだから。でも、でもさ……。罪なんかあとでいくらでも償うから……。だからいまだけは、いまだけはこのまま……。見守って欲しい。せめて、リールが大人になるまでは……。このままでいさせて欲しい。父さん、母さん……。毎回毎回こんなわがまま言ってホントにごめんでも絶対に、絶対にいつか償うから、だからいまだけは許してくれ……。



いつもと同じことを思ったのち、俺はゆつくりと目を開く。

「……行くか」

「……うん」

静かなやり取りを行ったのち、俺とリールは外に出た。

すると予想通り、ちょうどよくスリイナが俺の家の前に到着したところだった。

俺たち三人は、いつも通りに学校へと出発する。

今日はよく晴れた日だ。雲なんて一つたりともな　あつた。ごめんあつたわ。一つだけあつたわ。なんかダツクの形した雲あつたわ。

俺は何気なく、その雲に向かって十字を切る。……アーメン。

でもまあ、それでも快晴なことに変わりはない。

実にすがすがしい。

いつもと同じ通学路を歩きながら空を見上げていた俺は、そう思った。

それから、俺は空に向けていた顔を自分の左右へ向けた。

左にはリールがいて、右にはスリイナがいる。

なんで小学生のリールが俺たちと一緒に登校しているのかと言えば、通う学校が同じ敷地内に存在しているからだ。

リールは初等部六年生。俺とスリイナは高等部一年生だ。

まあ、いわゆるエスカレーター式って奴だ。生活が苦しかったっていうのは、このせいでもある。学費がバカみたいに高いんだよでも、人を殺すようになってからはだいぶん楽になった。というよりも、殺しに手を出していなかったら、俺たち兄妹はここに通えなくなっていたと思う。

だから俺は、人を殺したことを後悔してはいない。裏世界に手を出して良かったと、まだ慣れないところもあるけど、大方そう思えるようになってきている　っと、またリールの隣でこんな汚いことを考えてしまった。ダメだダメだ。別の話題に別の話題っと。えーと、何かないかな……　あつ！　これでええやん！

「なあ、スリイナ」

「ん、何？」

「前々から気になってただけだよ……」

俺は新たな話題として、いままでずーっと気になっていたことをスリイナに尋ねてみることにした。俺は何年ぐらいこのことを気にしていただろうか？ ……んー、かれこれ一〇年近くは気にしていたかもしれないな。

で、その質問っていうのは、

「……なんでお前、歩きで通ってんの？」

というものだ。これは当然の疑問って奴だ。だってそうだろう？

スリイナはいいとこのお嬢さんなんだ。ごく当たり前のように執事さんやらメイドさんやらがいるようなお屋敷に住んでいる、いいとこのお嬢さんなんだ。娘のためだけの送迎車なんてものがあつたとしてもまったくおかしくはないはずだ。スリイナの家には車がない、ってわけでもないんだ。むしろ逆で、スリイナの家には車がない、デューラーか！ と叫んで突っ込みを入れたくなるほど数多くの高級車がある。

それなのに、スリイナは車で通学しない。

俺はその理由を、前々から聞きたかった。

てなわけで、俺はスリイナの方に耳を傾けた。

「だ、だってそれは……車に送り迎え頼んじやったら……」

俺の問いに答えるスリイナは、どこか言いにくそうにモジモジとしている。顔もほのかに赤くなっている気がする。……なんだ？

恥ずかしい理由なのか？

「頼んじやったら、どうなるっていうんだ？」

気になった俺は、促しをかけてみる。

けど、スリイナはうつむくだけで、その続きを言わなかった。

隣でリールも話を聞いていたと思うので、俺はリールの方に顔を向けて「何でだと思う？」と聞いてみたのだが、「なんとなく分かるけど教えな〜い！」といたずらっ子のような表情で言われてしま

った。その表情が可愛かったのは言うまでもない。

ところで、送り迎えを頼んじやったら、それが一体なんだというのだろう？　そういう言い方をするってことは、こうして毎朝歩いていくことに何かしらのメリットがあるということなのか？　でも、そのメリットをスリイナは恥ずかしくて言えない。

……恥ずかしいメリット？　歩くことで得られるメリットで恥ずかしいもの？　それは一体なんだ？　……んー、全然分からん。

まずは、歩くことで得られるメリットだけを考えてみるか。それでそこから恥ずかしいメリットを抜き出してみれば、それがビンゴの可能性だつてある。

でもそれじゃあ、歩くことで得られるメリットってなんだ？　すがすがしさ？　健康？　体力作り？　って　あ！　分かった！

あるじゃん！　歩いて得られるメリットで、だけど人に知られるのは少しだけ恥ずかしいこと。あれだよ、あれ。もうお分かりだろ？

え？　お分かりじゃない？　なーに、簡単なことさ！　それは「ダイエット！　そうかそうか！　スリイナはダイエットのために歩いてたんだな！」

俺は上から目線にものを言い、勝手にダイエットだと決めつけた。てか、それしかないだろ！　人に言うのが恥ずかしいメリットって！

「ち、違うよ……私は……」

「何っ！　違うのかよ！　じゃあ一体なんだってんだ！」

「あ、それはね……その……」

スリイナは以前モジモジ状態。

「なんださつきから……もしかしてトイレか？」

もしそうだとしたら、そのモジモジを恥ずかしさとして捉えた俺の推理は根底からくつがえされることになるな。

「ち、違うよ！」

どうやら違うらしい。じゃあ俺の推理は正しいはずだ。何か恥ずかしいことがあるからこそ、スリイナはモジモジしているというわけだ。しかしながら、最有力候補のダイエット選手が即刻退場して

しまったからなあ……これは迷宮入りかねえ。スリイナはホントのことを話してくれそうにないしな。

それにかく言う俺も、これ以上追求する気がなくなってきたし、もう、この話はいいか。

「……まあ、違うくてもなんでもいいけどさ、スリイナにはダイエットなんかこれっぽちだっていらなからな？俺はそのままでもいいと思うからさ」

もしかしたら本当にダイエットのためなのかもしれないので、一応フォローを入れてみた。けど、いま言ったことは本心だ。スリイナはいまのままで十分に可愛い子だからな。

そもそも女子はみんなダイエット言っているが、俺はモデル体型が嫌いだ。普通でいいよ、普通で。なあ？みんなもそう思わない？

「このままで……いい？」

スリイナが、俺の言葉を確認するかのように尋ね返してきた。

それに対して、俺は一つ頷いてから返答する。

「ああ、そうともさ。スリイナはスリイナのままでいい。何も変わらないでいいんだ……」

俺は殺人鬼になってしまった。前とは比べ物にならないほどに変わってしまった。それはもう、普通には決して戻れないほど酷く変わってしまった。

だから、周りには何も変わらないで欲しい。俺を受け入れてくれるところだけは、何も変わらないで欲しい。

あくまで俺の、殺人鬼の願望だが、そんなクズの願いでも叶うというのならば、周りだけは何も変えなくてもいい。

そう考えると、さっきスリイナにした『……なんでお前、歩きで通ってんの？』っていう質問は……いらない質問だったのかもしれないな。

だってさ、俺は何も変わらないで欲しいんだ。それはつまり、一緒に登校するこの風景だって変わらないで欲しいってことなんだか

らな。

「まったく……数分前の俺め、何も考えずに余計な質問しやがって。

……ま、撤回すればいいんだよな、うん、さっきの質問は撤回するに限る。」

「あの、それでさスリイナ。さっきの質問だけど、あれはなかったことにしてくれ。俺はこのままがいいんだ。スリイナの一緒のこのままがな。だからさ……あの、これから一緒に……こうやって登校してくれ」

言いながら、俺はもの凄く恥ずかしい台詞だと気づいた。くそつ、絶対赤くなってるぞこれ……。ああもう、ホントに恨むぞ！ 数分前の俺め！

俺はスリイナから顔を逸らそうとしたが、自分から頼みごとをしておいて顔を逸らすっていうのは凄く失礼なことだろうなと考え、なんとか逸らさず現状維持を続けている。

そんな恥ずかしそうな俺を見たスリイナは、何やら嬉しそうに微笑んだ。

「うん、いいよ。私だってこのままがいいから……」

そう返答してくれたスリイナの顔は、心なしかまた赤くなっている気がする。

……きつと俺の恥ずかしい台詞のせいだ。こういうのって言われた方も恥ずかしいんだろうし……。あとさ、スリイナの台詞もちよっと恥ずかしい感じだったもんな。スリイナはいましたがたの俺みたいな感情を味わっているのかもしれない。

でも俺はさ、そう言われて正直嬉しかった。……けど、その言葉は殺人を犯してた俺にじゃなくて、幼なじみとしての俺に言ってるんだろうけどな。

したがって本来は、俺にその言葉を受け取る資格なんてないのかもしれない。

だけど、俺はこの場では……何気ない日常っていう一番大事な時だけは　ずっと前の自分で居るって決めている。殺人なんていう

非人間的な行いをしていない時の自分で居続けるって決めてるんだ。  
だから……凄い身勝手かもしれないけど、俺はスリイナの言葉を  
受け取る権利を行使させてもらう。

そして、俺なんかにはもったいない言葉を受け取ったのだから、  
俺はスリイナに言わなければならぬ台詞がある。

「ありがとな……」

「ううん。どういたしまして……」

うおお……照れくさいい……。俺は今度こそ我慢できず、スリイ  
ナから顔を逸らした。

そうして、明るくもそこはかとなく暗い雰囲気となってしまった  
ところで、

「ふんっ！」

リールが、面白くない！ といった感じの効果音を上げた。

おっと、そういえばリールが仲間外れになつていたじゃないか。  
これはいけない。

俺は急いでリールの方を向いて、

「リール。リールもずっとこのままでいてくれるか？ 特にリール  
は俺にとつてたった一人の家族だからな。もしリールがいなくなっ  
たら……その時は兄ちゃん、泣くからな？」

リールの顔を見据えながら俺が真剣に告げると、リールは不機嫌  
だった表情を一変させて満面の笑みを浮かべた。か、可愛い……。

「フィー兄ちゃんホント！ 私がいなくなったらフィー兄ちゃん泣  
いちゃうの？ そんなに私のこと大事？」

何を言ってるんだこの子は！ そんなことは……そんなことはあ

「当然だろ！ 当然過ぎるぞ！ 当たり前のようにとても大事だ！  
だからリール、俺の前からいなくならないでくれるか？」

「うん！」

リールはニイと嬉しそうに笑ってくれた。……これは、俺が必要  
とされている証として受け取ってもいいのだろうか？ どうなんだ

ろっ……？ さすがにそう受け取るのは調子に乗り過ぎってもんじゃないだろうか。

まあ、でもいいさ。リールが俺を必要だと思っていようが思っ  
てなからうが、そんなことはあまり関係ない。なぜなら、俺のするべ  
きことは何も変わらないからだ。

リールに何不自由ない生活を。  
これが俺の生きる理由だから。

## 1章 3

いつもとはだいぶ違った雰囲気での登校となってしまったが、何はともあれ、無事に学校へ到着した。

当たり前だが校舎が違うので、ここでリールとはお別れだ。

「いいか、リール。お前をイジメてくる奴とかがいたら、すぐ俺に言えよ。そいつをこらしめてやるからな。兄ちゃんはいつだってお前の味方だ」

幸い、いまのところリールにそんな兆候は見られない。けど、もしもリールがイジメなんてものに巻き込まれたら……俺は、そのいじめっ子をこらしめるどころじゃ済まさないことだろう。

といった具合に結構物騒なことを考えていると、リールはまぶしい限りの可愛らしい笑顔を振りまいてきた。

「大丈夫だよ！ もう、ファイ兄ちゃん心配性なんだから。イジメなんてものと私は無縁だよ、無縁！ それどころか、私モテモテだもん！」

言い終わると、リールは踊るように校舎へと走っていた。

「も、モテモテだとお……？」

そ、それはそれで許すまじだなあオイ！ ボウズどもめえ！ リールに変なことしたら俺が八つ裂きにしてやるからなあ！ ……いや……でもまあ、あれか？

「イジメられるよりは……マシ、なのか？」

俺がそう呟いた時には、もうリールの姿は初等部の生徒たちの中に紛れ込んでしまっていて、完全に見えなくなっていた。

俺はそのことに若干の寂しさを覚えた。なんかさ、リールがどこかに行ってしまったみたいだよ……。

しかしモテモテかあ……初耳だよあ……。

俺は今世紀最大のため息と言ってもいいくらいのため息をついた。「やっぱりお兄ちゃんとしてはつらいの？」



そのため息を見てか、スリイナが様子を窺うように尋ねてきた。  
俺はもう一度盛大にため息をついたのち、うめくように言葉を返す。

「……そりゃそうに決まってるだろうが。もうつらいなんてもんじやないな……。だってあれだぞ？ スリイナに好きな奴がいるかどうか知らないけどさ、もしいるなら、そいつがハーレム状態ってことだぞ？ つらいよりもつらくないか？」

そう告げみると、スリイナは悲しそうに顔をしかめる。

「……フィーがハーレム状態か……。確かに嫌だね、そんなの……」  
ん？

「な、なんで俺がハーレムなんだ？ 俺は、お前の好きな奴がって言っただんだぞ？」

「あ、その、えと、そ、そうだね。フィーじゃないね。ご、ごめん……」

スリイナは慌てたように前言撤回すると、顔を赤く染めてうつむいた。

……まったく、恥ずかしい間違い方すんなよな。にしてもびっくりしたあ……。スリイナが俺のこと好きなのかと思っただじゃんか……。  
ああ、なんかもう！ 俺も照れくさくなってきたぞ！

「さ、先行くからなっ！」

俺は足早にスリイナから離れる。振り返りもせず校舎にまっしぐら！

早くあいつとバカトークをして、この照れくさをなくさなければ！

一人の男を頭に思い浮かべながら、競歩のように歩くこと一分。  
俺は教室に到着した。自分の席へと向かい、机の横についているフックにカバンを下げた。

えーと、それであいつは……。何っ！ まだ来てないだと！

俺の探し人はまだ来ていないらしい。くそっ……。なんでこういう時に限っていないんだよ。来なくてもいいタイミングとかでは出て

くるくせに……。

ああこれじゃあスリイナが先に来ちゃうじゃんかあ　なんて思  
つてるとほら、来ちゃったよ……。

走って俺を追いかけてきたらしく、スリイナは少し息をあげてい  
た。ホントは席に着いて休みたいだろうに俺のところへ直進してき  
て、

「フイー、ごめんね。変なこと言っちゃって……」

だとさ。そう言われた俺は一体どうすりゃいいんだ？　別に俺、  
怒ってないのに。ただ単に照れくさくて逃げただけなのに。でも、  
そうやって説明すんのもまた恥ずかしいし。ああ、ホントにどうす  
りゃいいんだ……。

と考えてるあいだ、現実から見れば俺は沈黙しているわけだ。  
そしてスリイナは、どうやらその沈黙を無視だと受け取っただらし  
い。

「あの、ほ、ホントにごめんね……」

震えた声音で言い残して、スリイナは廊下へ走り去っていった。  
ドラマみたいだ……って客観的に見てる場合じゃないよな、これ。  
やっぱこれって追いかけるべきなのか？　……べきだよな。

追いかけてようと決意して俺は立ち上がる。足を廊下に向けて、教  
室の出口から駆け出そうとしたその時

「おいフイーニット！　スリイナさんが泣いてたぞ？　お前何しや  
がった！」

ああもう！　なんちゅうタイミングなんだ！　俺の言ってたこと  
が分かったか？　こいつは　マイケルはこういう奴なんだ。

もう知らん！　こんな奴の身体描写はしてやらん！　……でも、  
ちょっとだけかわいそうだから、一つ特徴を言っただけにすることする。  
えーと、こいつの特徴は……あー、特徴は……その、うん、エロ  
い。

身体描写じゃないじゃんって突っ込みは受けつけないぜ。マイケ  
ルは君たちの心でそれぞれの形に創造してくれ　ってこんなこと

言ってる場合じゃねえええええ！

スリイナだ！ 俺はスリイナを追いかけないといけないんだ！

「あ、分かったぞーっ！ お前、我慢できずにスリイナさんに手を

」

「出してないっ！」

俺がバスケット選手並みの追い抜きをかけようとするも、マイケルの素晴らしいディフェンスで廊下に抜けられない。

「じゃあ何したんだよ？ ま、まさか！ ここでスリイナさんを罵倒して泣かせて、それで快感を得ようとしたのかっ！」

「どんなサディストだ！ そもそも俺はニュートラルだ！」

「なんと！ フィーニツト君はニュートラルらしいですよっ！ なんて大胆なんでしょう！ よっ！ このニュートラルッ！」

マイケルは教室中に聞こえるようにわざと声を張り上げた。……

バカか？

「お前な……ニュートラルって中間って意味だからな？ そんな風に言いふらされても、俺はまったくダメージを受けないからな？」

「何！ じゃあお前マゾか！ こんな羞恥プレイにも耐えるとは……

…末恐ろしい奴だ！」

「だからニュートラルだって……」

もういいや……疲れた。

何この、廊下に行きたい奴とそれを必死に阻止しようとする変態の図。

それに俺、なんで廊下に行こうとしてたんだっけ？ ……ま、いか。忘れるってことは大したことじゃないんだろう。うん？ いや、大したことだった気が……ど忘れって奴かな？ いきなり考えてたことが消えてなくなったよ。

廊下に行こうとして老化って奴だね。

……ごめん、謝る。

にしても、なんで俺は廊下に行こうとしてたんだろうか？ ……いまのは狙ってないよ！

もういいやいいや！　なんで廊下に行こうとしたのか？　そんな理由は考えても出てこないな、うん。

それにあれだ、時計だってもうすぐHRって時間を指してるしな。これから教室の外に行っただって何もできやしない。だからスリイナも帰ってくるだろ　ってそう！　スリイナ！　スリイナじゃないか！　俺はスリイナを追いかけようとしてたんじゃないか！　いやあ、モヤモヤが一気にスーっとなくなったぜ！

お、噂をすればなんとやらだ。スリイナが帰ってきた。まあ、時間には厳しい奴だからな。……さてと、謝罪と弁解をしに行くか。あいつが廊下に飛び出していったのは、俺の沈黙のせいだったもんな。

俺はスリイナの席へ向かう。

机の真横に俺が立つと、スリイナはハツとした表情を浮かべながら俺の存在に気づいた。けど、顔をすぐに別方向へ逸らした。

……顔を逸らした行為には、どんな意味が込められていたんだろう……？

涙を流した目を見られなくなかったのか。それとも怒ってるのか。いや、どちらだろうと関係ないな。だって　俺が泣かせたことに変わりはないんだからさ。

「……スリイナ、その、ごめん」

俺が謝罪を述べると、スリイナは驚いたようにこちらを向いた。

スリイナの穏やかな瞳は若干ながら赤みがかっていて、まだうつすらと涙が残っていた。

顔を逸らした理由はどうかやら前者　泣き顔を見られたくない、の方だったようだ。

「……謝らないで。私がフィーに変なこと言っちゃったのが悪いんだから」

またスリイナは謝ってくる。いっつもだ。どっちが悪いとかあんまり考えずに、スリイナはいっつも勝手にとにかく謝ってくる。それが悪いとは言わないけど、たまには謝らせろ！

「何言つてんだよ。今のは誰がどう見ても俺が悪い。ちょっと考えごとしたとはいえ、俺はスリイナの言葉を無視したんだ。そのことに変わりはない。だから俺が悪い。ホントにごめんな」

「だ、だからフィーは謝らなくていいんだってば。私はもう気にしてないからあ」

俺が頭を下げると、スリイナは焦ったように言葉を発してきた。

どうやらホントに怒ってないらしい。なら、お言葉に甘えて謝罪はここまでにしとくか。

俺が頭を上げると、スリイナは安堵したかのように胸へ手を押し当てていた。

「そこまでのことかよ……」

「そこまでのことだよ。悪くない人に謝られても困るだけだもん」  
「だから悪いのは俺だっ……」

そこまで言いかけて、俺は折れることにした。このままだと水かけ論になりそうだからな。

「この話はここまで。埒が明かないったらありやしない。もう悪いのはどっちもってことでいいか？」

「まあ……それならいいよ。でも、ホントは全部私が悪いんだからね？」

「へいへい……もう勝手にそう思っればいいさ」

俺が呆れて呟くと、スリイナは「やったー」ともうわけの分からない反応を示していた。

けど、俺も俺で満足している。スリイナの笑顔を 癒しをくれる優しい微笑みを見ることができたんだからな。スリイナもリールと同じで、にこやかな方が似合ってるし……その方が可愛い。ま、口が裂けても言えないことだけど。

「じゃ、俺は席に戻るから」

「うん」

そう告げて、俺は自分の席に戻る。その途中、マイケルが下卑た笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「どうだった？ 怒ってたか？ フィーなんて死んじゃえって言われたか？」

「言われてない。マイケル、お前の目は節穴か？ 見ろよスリイナの顔を。あの顔で死んじゃえ、とか言うわけないだろ？」

ここからだ横顔しか見えないが、スリイナは確実に機嫌よさげだ。もの凄くニコニコしている。

「そうかそうか。それは変なことを言いちまったな。……いや、ただな、あの顔でフィーなんて死んじゃえって言うプレイでもしてたんじゃないかと思ってよお」

「どんなプレイだ！ あんなニコニコした顔で死んじゃえって言う奴があるか！ もしそうだとしたら、スリイナ生粋のサディスト過ぎるだろうっ！」

あははっ！ フィーなんか死んじゃえ！

と言うスリイナを想像してみた。

……怖っ！

「でもよお……あの顔でSだったら、それはそれでアリだよなあ……」

えへへへへ、と笑い始めるマイケル。……気色悪い奴。

一刻も早く関わりを絶とうと考えて、俺はマイケルの席から秒速一メートルの速度で離れていく。

そうして俺が自分の席に着いたところで、担任の先生がやってきた。

あーあ、また退屈な時間が始まるのか……。

## 1章 4

「死ぬうつつ……」

唸らせてくれ。今日の午前の授業は内容が濃すぎたんだ。どのくらい濃かったかと言うと、薄めないカルピスの原液ぐらい。これで理解してもらえると嬉しい限りだ。

「うう……ああ」

俺は机に突っ伏して唸り続ける。

と、そんな俺の隣に突如ふわつとした雰囲気を持つ何者かがやってきた。俺の知り合いにこんなオーラを発する者は一人しかいない。「フィー、お弁当食べよ?」

もう例のごとくスリイナである。俺は机とコンニチハしながら、「今日はなんですかあ?」

弁当の中身を聞く。俺の(リールのも)昼飯はスリイナが作ってくれているからな。

「今日はね、サンドイッチだよ」

……サンドイッチ選手、中四日のローテで回ってるなあ。サンドイッチはスリイナのレパトリーの中でエース格のようだ。

あ、これは別にサンドイッチに飽きたとかじゃないぞ? 美味しいからいいんだ。

「どれどれ、サンドイッチの献上を許可する」

「えっつ! ここで食べるの! ……屋上に行かない?」

来た来た……天気がいいとすぐどっか別のところで食いたがる。

「別にここでいいだろ? 机があるんだからさあ」

「そうそう。机があった方がスリイナさんを食いやすいよな。それに最高の羞恥プレイだ! なあ、フィーニット」

唐突に現れた変態の言葉。

「……マイケル、お前なあ……」

乱入してきた上に、その乱入方法がお下劣トークと来たもんだ。

俺は心底呆れる。

未だ机とコンニチハしたままの俺には見えないけど、きっとスリイナは顔を真っ赤にしていることだろう。お嬢様だからか知らないけど、スリイナはその手の話にまったく免疫がないんだよ。

「おいマイケル、お昼以降はお前と関わりたくないって、なんと言ったら分かるんだ？」

マイケルは昼から徐々にギアが切り替わっていくんだ。夜は大人もドン引きするほどの話をするともっぱらの噂だ。

「そんなひどいこと言っなよ。俺たち友達だろ？」

「朝だけな」

「あ、朝、だけ……？」

「ああそうとも。朝だけだ」

ホントなら朝だっけつき合いたくない、というのはさすがにかわいそうなので言わないでおく。

それよりも、いまはこのエロ魔人から早いとこ離れたいので、俺は机とサヨナラすることを決意。スリイナの言うとおりにしようと思う。

「よしスリイナ。屋上に行こう」

やっぱり顔を紅潮させていたスリイナの手を取り、俺は屋上へ向かう。

「お、屋上で食うつもりだな！」

「当たり前だろ！ お前のいるところでメシなんか食えるかつ！」

俺たちは手をつないだまま走り、そうして屋上にやってきた。おお、風が気持ちいい。

授業という呪術によってかけられた呪いが、新鮮な空気によって浄化されていくような感じた。日光が少々まぶしいが、それもまた心地よい。

まあ確かに、弁当を食うにはちょうどいいかもしれないな。

何より、誰もいないというのがいい。きょうび、屋上でランチ、なんて奴らはいないのさ。普通に教室とか食堂で食ってるよ。



「あ、あ、あの……ファイ？」

依然として赤い顔したスリイナが、恥ずかしそうにおどおどした口調で、俺に声をかけてきた。

……ああ。

俺はその問いかけだけで、スリイナが何を言いたかったのかをなんとなく察することができた。

「悪い悪い、手、握りっぱなしだったな」

俺はスリイナの手を放す。いくら幼なじみでも、やっぱり手を握るなんてことされたら恥ずかしいよな。いまそうやって意識したら、俺もちよつと恥ずかしくなってきたもん。

なんて考えていたのもつかの間。

どうやら手を握っていたことはあまり関係なかったらしく、スリイナはまだおどおどとしている。

「なあ、どうしたんだ？」

具合でも悪くなったのかと思いい心配して尋ねると、スリイナは真っ赤な顔をよりいっそう赤くさせて、

「た、食べるの？」

そう聞いてきた。え？　なんでそんな質問で顔を赤くする必要があるんだ？　昼飯食べるに決まってんじゃん。エロ野郎の前で昼飯なんか食えないからここまで来たつてのに。

「スリイナ、食べるに決まってんだろ。さあ、早くしろ。ここまで来ておいてお預けはナシだぞ」

早く昼飯を渡せ。その手に持っているものを渡すんだ。

「ほ、ほんとに食べるの？」

なんだ？　失敗でもしたのか？　でもさっきは自信満々にサンドイッチだって言ってたよなあ。そもそもサンドイッチを失敗ってなんだよ。どこぞの二次元のヒロインかって話だ。

「しつこいぞ。食うったら食う。だから早くしろ。お前から差し出さないって言うのなら、俺は力づくで奪うぞ」

サンドイッチをな！

「わ、分かったから、力づくはやめてね……」

「どうやらやっと分かってくれたようだ。スリイナは右手に持ったサンドイッチの入った弁当箱を地面に置いた。」

やつと昼飯だ。俺は地面に座る。しかし、なぜかスリイナが座らない。

「ん？ どうした って何してんだあ ああああつ！」

スリイナはなぜか制服を脱ぎ始めていた。まだ九月上旬で制服が夏使用なので、もうカッターシャツがはだけて、せ、成長途中であるう谷間がある……じゃないや！

俺は慌てて目を逸らし、

「な、なんで服脱ぐんだよっ！」

「だ、だって、フィーが私を食べるって……」

[illegible]

なんかおかしいと思ってたら、なんちゅう勘違いを！

「俺が食うのは昼飯だったの！ スリイナじゃねえよ！ それより早く着直せ！」

「い、いめん……」

「いやまあ……いいけどさ」

谷間を拝めましたから。

にしても…… たく、それもこれも全部マイケルのせいだ。あいつは学校に来ていい奴じゃないんだよ。

学校側、マイケルに永久謹慎の通達でも出してくれないかなあ……  
いや、それよりも俺に殺しの依頼さえ出してくれれば……マイ

ケルがいたという事実すら残さず消してやるってのに……。

でもま、それをやるにしたって（ま、やらないけどさ）まずは昼飯が先だ。俺は弁当の方、もといスリイナの方を向く。

スリイナの顔は、まだ茹でダコのように火照っていた。

「さ、メシメシ」

俺はあえて何もなかったかのようにふるまう。

スリイナはそんな俺に合わせるかのように、「う、うん」とちよつときこちなく頷いた。

そうしてやつとこさたどり着いた、スリイナ手製のサンドイッチ。ハムとレタスだけを挟んだシンプルなものから、茹でタマゴをほぐした感じの奴を挟んでいるちよつと手の込んだものまで、色々な種類のサンドイッチが目の前に存在している。

俺はシンプルなハムレタスからいただくことにした。「いただきまーす」と常套句を発したのち、俺はハムレタスにかぶりつく。

あ、やっぱ美味しいな……。

しみじみとそう思う中で、俺はある別のことも考えていた。

なぜスリイナは俺の前で服を脱いだのかってことだ。さっき俺は勘違いってことで納得したけど、やっぱおかしいよな。

だってスリイナは、その……お、俺に食われてもいいと思ったらいいんだぞ？ ど、どういうことなんだ？ 朝、リールと別れた直後のスリイナの反応だと……スリイナは俺のことを好きじゃないはずなんだ。

なのに……なんで好きでもない奴の目の前で服を脱いだ？

しばらく思考を働かせていると、俺の中に、ある一つの単語が浮かび上がってきた。しかもそれは、いまさっきのスリイナを表現するのに最適な言葉だった。てゆーかこれだ！ これしかないよ！

あまりにもジャストフィットするその言葉。心地いい感覚に襲われて心中で連呼しまくっていると俺は思わず口を滑らせて、その単語を現実世界に音として繰り出してしまった。

「痴女！」

「ひゃうー！」

可愛い擬音を発してスリイナが反応した。それからみるみる落ち込んでいくのが分かる。まるでアサガオが枯れていくさまを早回しで見ているようだ。ってそんなこと言ってる場合じゃないぞ。ふお、フオローしないと……。

「お、オープンなのは……悪いことじゃないと思うぞ？ 俺は」

「ひゃうう……」

どうやらフローを間違っただらしい。

スリイナは完全に枯れ果ててしまった。

## 1章 5

我らは若者。

枯れ果てようが朽ち果てようが、時間さえ経てば全てを忘れることができる。学生はやることが多いのだ。

そして、それはスリイナも例外ではなかったようだ。放課後のいま現在、スリイナは昼のことなどすっかり忘れているようだった。

立ち直ってくれて何よりだ。

帰り支度をしながらスリイナを見ていて、俺はそう思った。

さて、話は変わるんだが、放課後というのは一日の中で一番ハッピーなことが起こる時間帯なのだが、それを皆さんはご存知だろうか？ ご存知ない場合、それは人生の九割を無駄にしていること請け合いだ。

そのイベントが起こるのはもう少し先。それまで俺は、初めて球場でメジャーの試合を見た少年のようなわくわく感を抱いていようと思う。

帰り支度の済んだ俺は、スリイナのところへ向かう。

「さ、帰ろうぜ！」

「フイー、嬉しそうだね」

スリイナは少しバカにしたような笑みを浮かべて俺を見てくる。でもいいんだ。だって実際、スリイナの言うとおり俺は嬉しいんだからな。隠す必要なんてない。やっと拷問から開放されるような気分と言えは分かるだろうか。ま、拷問とか受けたことないんだけどな。いや、受けた受けてないなんてこの際関係ない。いまの例え方は間違っていないだろうからな。これほど俺の気持ちを反映した言葉もないと思う。いや、もう現実が拷問そのものだといっても過言ではない。

俺とスリイナは校舎を出る。そうして、学校の校門付近で立ち止まる。

ここまで来ればもう言わなくなつて分かるだろ？

一日で一番楽しいイベント。

拷問からの開放。

それらが意味することは、一人の少女との再会だ。

待つこと五分。俺にとってこの五分は、今日過ごした時間よりも長く感じられた。

「ああ、可愛い……」

俺は思わず呟く。でも本当なんだから仕方がない。

初等部の校舎から出てくるどの子よりも可愛い。ああ、輝いている。あんな子が妹でホントによかつた　と、ここまで言えばどんな奴でも、例えサルでも分かるだろう。

そう、俺が待っていたのはもちろん　リールだ。

と、リールが俺の存在に気づいたらしくブンブンと手を振ってくる。ああ、幸せだ。たつたこれだけで今日の疲労が全て吹っ飛ぶ。

リールがこちらに近づいてくるにつれて、俺の口元は緩んでいく。「フイー兄ちゃん！」

俺の下に駆け寄ってきたリール。そんなリールに、俺はちよつと早いかもしれないが、この言葉をかけた。

「リール、おかえり」

「ただいまっ！」

口をニイと横に開き、白い歯を見せてくる。

返事を返してもらっただけで俺は……俺は感動した！　これを言ってもらったために学校に通つてると言つてもいい！

俺は身を悶えさせる。周りから『あ、またあの人だ……』みたいな視線で捉えられている気がするけど、そんなの知ったことかつ！　可愛いものを見て悶えることの何が悪いってん………リールも引いていらっしやる？

ふと目に入つたリールの顔は、引きつった笑みを携えていた。

……言つまでもなく、俺は悶えることをやめた。気を引き締めるために咳払いを一つ。

「うおっほんつ。さ、帰ろうぜ……」

俺は勇気を振り絞ってリールに手を差し出してみた。すると、リールは嫌がる素振りを一つも見せずに俺の手を握り返してくれた。……おお、なんて優しいんだろう……っ！

リールの手は小さいが、生きていると感じさせる力強さがあり、しかしながら繊細さも兼ね備えている温かな手だ。

その温もりを感じ取りながら、俺は歩き出す。

「スリイナ姉ちゃんのサンドイッチ美味しかったよ！」

登校の時とまるつきり同じ道を通りながら帰る道中。リールの明るい声が話題を生み出した。

「ホントホント。いくらサンドイッチは作るのが簡単だっていってもさ、あの味を出せるスリイナの腕は本物だよな」

俺はリールの意見に乗っかる。

それを聞いたスリイナは嬉しそうな、けど自分を嘲るような笑みを浮かべながら、

「そう言ってもらえるのは嬉しいけど……でも、美味しいのはいい食材を使ってるからだと思うよ。同じ材料で作れば、フィーにもリールちゃんにだって作れると思うなあ」

「いや、それは絶対に違うぞスリイナ」

「そうだよ。違うんだよスリイナ姉ちゃん」

兄妹揃っての反論に、スリイナは首を傾げていた。……まあ、兄妹揃ってと言っても、たぶんリールは俺の言葉をマネしただけなんだろうけどな。

なので、当然俺が続きを連ねていく。

「スリイナ、よく考えてみる。一流の料理人だって食材は一流のものを使うだろ？ それと同じだ。いい食材使って美味しいもんが作れるんなら、それはスリイナの腕がいつてことだろ」

「んー、そうなのかな？」

スリイナはどこか否定的に視線をさまよわせていた。

素直に喜ばいいんだよ、ったく。……もう一押ししてところだ

な。

「そうなんだよ。そもそも、いい食材を使ったら必ず料理が美味くなる、なんて保障はどこにもないだろ？ 下手な奴は高級食材だろうとダメにするだろうしな。だから、スリイナは料理が上手だってことなんだよ」

俺がそう告げると、スリイナは気恥ずかしそうに笑った。

「そうだね。フィーがそう言うのなら、そうなんだろうね。でも私、それで満足はしない。もっともつと食材を上手に扱えるようになるなんて言うのかな……食材の味を引き出すみたい……ね？」

「おう、頑張ってくれ。お前なら引き出せるさ」

腕を上げてもらえるのは悪いことではないからな。

しかしまあ、このあとも出てくる話題は食い物ばかり。この年代なら恋愛の話なんかがあってもいいような気がするんだけどな。

まさに色気より食い気ってか。

ま、いいんだけどな。この二人の恋愛話とか聞きたくないし。特にリールのは絶対に聞きたくないぞ！ ……つと、つい熱くなってしまった。

でも、妹の恋愛に口を出したくなるのはどこの兄貴もそうだろう？

……あまり賛同を得られそうにないな。だが、それは俺も分かった上での所業だ。自分が気持ち悪いってことぐらいは分かっている。

けど、分かっているって、それでも守りたくなるんだ。リールにはそれほどの……。

俺はスリイナと食い物の話をしているリールを一瞥する。

……それほどの魅力があるんだからな。

はは……これがキモいってことなんだろうな。

なんて考えていると早いもので、もう我が家に到着した。

「じゃあスリイナ、また明日な」

「バイバイ！ スリイナ姉ちゃん！」

「うん。また明日ね」

スリイナは楚々と手を振り、俺たちの前から離れていく。



もう毎度のことなので、見えなくなるまで手を振り続けるなんてことはしない。ある程度離れたところでお互い切り上げる。

スリイナがこちらに背を向けたところで、俺たちは家に入った。

「ただいま」

「ただいま」

俺とリールは同時に声を発した。中から父さんや母さんの返事が返ってくるわけじゃないけど、挨拶はきちんとしなさいという家訓の下に育ってきたから、まあ、癖みたいなもんかな。

俺とリールはそれぞれ自分の部屋へ向かう。家に帰って最初にすることは着替えだ。脱いだ制服はきちんとハンガーにかけてしわにならないようにする。……こうしないと母さん、うるさかったなあ……。

普通に生活していると、そんな風に父さんや母さんの言動を思い出すことがある。親ってというのは、それだけ子供の生活に欠かすことのできない存在ってことなんだろうな。別にいなくなっただけから分かったってわけじゃないけど、いなくなられてしまっただけに沁みたっていうのかな……親の影響は大きいんだなって改めて認識した感じだ。

そして再認識した感想だけど、やっぱり親は居た方がいい。俺たち子供の面倒を見てくれるありがたい存在だし、それに何より、俺にしてみれば……父さんと母さんさえ生きていてくれれば……殺しなんかには手を出す必要もなかったっていうのにな。

けど、ここで父さんと母さんにそういう思いを抱くのはお門違いも甚だしい。殺しはあくまでも俺自身が決めた道だ。むしろ父さんと母さんは、俺がそんなことをしようとしていると知ったら、間違いなく止めてくれるだろう。無論、それは生きていければの話で、現実はそのじゃない。生きていないからこそ、俺は裏の世界に堕ちたわけだ。絶望がうごめく世界にな。でも、俺の世界は裏だけじゃない。輝かしい表もある。

表には父さんと母さんの残した形見がたくさんあって、その中で

も一番大きな形見は、自宅兼何でも屋である我が家だ。近所の人たちの役に立ちたいという志の下に始めた『ストルス雑務店』。

俺はその志を　父さんと母さんの思いを受け継いで、今日も『ストルス雑務店』を開業しようと思う。ホントは受け継ぐ資格なんてないんだろうけど……。

というより、正直な話、無理に受け継ぐ必要はないんだ。だって、殺しの報酬だけでも普通に生きていくことはできるからな。

……するとここで疑問が湧いてくるよな？

なんで俺は『ストルス雑務店』を受け継いでるのか。

なんでか分かるか？　結構ちゃんとした理由があるんだぞ。

はい、シンキングタイム終了ーっ！　　ってシンキングタイムなかったじゃん！　まあ別にいいよな？　答えを教えてやるんだからさ。

で、その答えてっていうのは、要するに隠れみのだ。

殺し屋で十分に儲かってるけど、かといって何もしないと怪しまれるかもしれないだろ？　俺が殺し屋をしていることは当たり前だけど誰も知らない。けど、父さんと母さんがいないことは知られている。それゆえに、『ストルスさん』この坊主は何もしないでどうやって生活費をまかなってるんだ？　ってご近所さんに怪しまれるかもしれないだろ？

だからこそ、俺は『ストルス雑務店』を営業するんだ。もちろん父さんと母さんに対する思いがないわけじゃないぞ？　さっきも言っただけど、志はきちんと受け継いでいるつもりだ。半端な仕事はしちゃいない。

それを証拠にっていうか、最近のご近所さんからの依頼がだいぶ増えてきているんだ。俺の健気さがご近所さんに伝わってきたんだろ？

でもあれだ、だからって殺しはやめない。依頼が増えてきたとい

つても、まだそこまで稼げてるわけじゃないからな。せいぜい、ジヤパニーズお父さんの毎月の小遣いぐらいだ。

「さーて、今日も頑張りますか……」

動きやすいようジャージに着替えた俺は、一階の仕事場へ向かう。仕事場には色々な道具が置いてあって、まるでホームセンターの一角のような場所だ。

「どれどれ、今日の依頼は………って今日はナシかよ」

留守中の依頼を承るために用意している、くじ引きに使うようなボックスを覗いて、俺は呟いた。……ま、こんな日もあるさね。

俺は売店風のカウンターに肘をつきながら、ぼけーっと依頼を待つことにした。

しかし、我が家の前を通る人々は、全員がただの通行人でしかない。

ああ、退屈だ……なんて思っていると

「フイー兄ちゃん!」

まるで計ったかのようなタイミングでリールがやってきた。す、

素晴らしい! さすがリール、ナイスだ!

「フイー兄ちゃん、今日は依頼ないの?」

「そうなんだよ。だからとてつもなく暇だ。リール、なんかないか?」

「なんかつて何? 遊び?」

「そう、遊びだ。……ここから離れるわけにはいかないから、ここのできる簡単な暇つぶしてみたいな奴とか、かな」

そう言う俺は実のところ、リールがいればそれでいい。見てろつていうなら何時間でも見ていられる。見るだけでも十分に暇が潰せるってもんだ。

けど、それじゃありールがかわいそうだ。ただ黙って見られてるだけなんて、天真爛漫のリールにはできないし、そもそもそんなのはリールじゃない。

「うーんとねえ……じゃあ、ハンプティ・ダンプティの早書き競争

なんてどうかな？」

「何それ！ 初等部で流行ってんのか！」

「そうだよ！ 私一番なんだよ！」

ほほう、さすがだ。そんなマニアックそうなゲームで一位を取れるとは……。

いや、でも待てよ……？

「それって絵のクオリティはどうなんだ？ 丸に手足つけただけ、みたいなのか？」

もしそうなら、運次第で誰でも一位なれそうだけど……。

「ううん。私はほんのちよつとだけ凝ってるよ。先生、私の絵を見て褒めてくれたもん。『うわ……っ！』って！」

引いてる？ 引いてるよな？ 先生明らかに引いてるよなっ！  
ってことはリール……早書きなのに凄い次元の絵を描いてるってこと？

……見たい。

「よし！ それでいいぜ！ 兄ちゃんと勝負だ！」

「負けないよっ！」

というわけで、第一回・ハンプティ・ダンプティ早書き王座決定戦が始まった。

カウンターに置いてあった紙とペンをリールに渡す。俺も同じものを用意し、さあ始めましようとしたところで

「じゃあ公式ルールの説明ね」

だとさ。俺は鼓膜が正常に機能してないんじゃないかと、我が耳を疑ったね。

だって、公式ルールって何？ 早く書くだけの遊びになんのルールがいるっていうんだ？ そもそも公式って……どこが認可したんだ？

さすがに突っ込もうかと思ったが 俺は我慢した。

そりゃそうだろう？ リールが一生懸命に説明をしてくれているんだ。これを邪魔しようなんて思う奴は鬼か悪魔だ。

で、一通りの説明が終わり、俺は聞いたルールを改めて反芻することにする。

まず いや、まずっていうか、これ一つしか公式ルールとやらはなかった。

「ハンプティ？」「ダンプティ！」のかけ合いでスタート。

どうだ？ 凄くシンプルだろ？

ではでは、早速始めたいと思う。ちなみに、最初の「ハンプティ？」は挑発の意が込められているらしく、チャンピオンが言う台詞らしい。なので、自称一番だというリールがそれを言うことになった。

それでは改めまして……

「ハンプティ？」

「ダンプティ！」

戦いの火蓋が切って落とされた。

カカカカカカカカカ と、ペンの走る音のみが空間を支配する。

俺はまずだ円を書いた。そこに手と足を書き足し、最後に少しリアルな顔を書こうとしたところで

「できたあ！」

リールがカチャリとペンを置いた。

……おいおい、嘘だろ？ リールの描くハンプティさんは、先生が思わず引くほどのでかい。俺のハンプティさんなんて、どこぞのエセピカソが書いたような酷い状態だぞ？ それを上回るスピードで引くほどの絵なんて書き上げられるはずがな

「うわ……っ！」

ごめん。前言撤回。書けてます。引くほどの絵が書けてます。劇画タッチのハンプティさんが紙の中で躍動しています。

これは……完敗だ。

「……リール、負けたよ……」

「ほんと？ えっへん！ 私、凄いでしょ！」

「ああ、凄いよ。もう凄すぎて神だよ」

そう言ってから、俺はもう一度リールの描いたハンプティさんを眺める。

……凄すぎる。リール、将来は画家かな？ もし画家になりたいって言ったら、俺は迷わず支援することだろう。

「ああ楽しかった！ ジュースジュース！」

しかし、秘められた才能を爆発させたリール本人は、絵に興味なんてないと言わんばかりに家の中へと戻ってしまった。きつと、俺を負かしたから満足したんだろうな。

とその時

「おーい、何でも屋の兄ちゃん！」

数人の子供の声がこだましてきた。ちえ、またあれかよ。いい加減にしるよな、まったく……。

俺はため息をつきながら、声のした方を向く。

すると、予想通りの面子がこちらに向かってきていた。全員がNとYの組み合わせだった野球帽を被っていて、手にはバッドとグローブ。まあ言うまでもなく、近くの空き地で草野球をしているガキ集団だ。

ここのところ、二日に一回くらいのペースでやってきてくれるお得意さんだ。しかし、ここのお得意さんには正直なりたくない。だつてさ、

「ボール取ってきて！」

こればかり。しかも報酬だって全然なんだぜ……。

「はい、A・ロッドのサイン入りボール」

「はいはい、こんなショボいのいらな　　つて、えっ！　何で？

いつもはアメ玉とかのくせに！」

俺は手渡されたサイン入りボールを食い入るように見つめる。

「サインは俺が書いたんだっ！」

「つぎけんなああああああああああああ　　っ！」

俺は思わずそのボールをはるか遠くへ投げてしまった。

それを見たガキどもが目を大きく見開いて、

「……今度、試合でライトやってよ」

などと抜かしてきた。俺は当然断った。……って、あれ？　こい

つら、いまのボールで野球すればよかったんじゃないの？　……バ

カ野郎っ、それを指摘するのは無粋ってもんだぜ……。

「それより、ほんとに依頼したいって言うなら、もっとちゃんとした報酬よこせつての。こっちは真面目な仕事でやってんだぞ？　これで食ってるんだからな？　お前らそこんとこ分かってんのか？」

「……分かったよ。兄ちゃんが絶対納得する報酬をあげるよ」

言いながら、リーダー格のガキはポケットから何かを取り出した。どうやら折りたたまれた紙のようだ。それをそのまま俺に渡してくる。

なんだ？　土地の権利書でも持ってきたか。それならなんでもしてやるぞ。

人殺しでもな。

なんて考えながら、俺はその紙を開く。

「うわ……っ！」

土地の権利書じゃなかったです。ハンプティさんでした。さっき  
リールが書いた奴と同じレベルのハンプティさんでした。　いや、

これはレベルが同じっていうよりも、

「……リールが書いた奴じゃないか？」

尋ねると、ガキどもが頷く。

「なんでそんなもん持ってたんだよ？」

「あれ？　リールちゃんから聞いてない？　ハンプティの早書きが  
初等部で流行ってるんだぜ？」

「あ、いや、それはさっき聞いたけど……そうじゃなくて、なんで  
このハンプティをお前が持ってたんだ？　って意味で俺は聞いたんだよ」

「ああそれはね、今日、リールちゃんからもらったんだ。それで、リールちゃんの兄ちゃんもリールちゃんのことが好きだってリールちゃんが言ってたからこれあげればきつと依頼を……って、に、兄ちゃん……？」

俺の放った殺気を感じたのだろうか。リーダー格のガキは言葉を途中でやめた。

実に賢明な判断だ。

何が……何がリールちゃんじゃボケエエ　ッ！　前々から気になつてたけど、今日は一段とリールちゃんリールちゃん連呼しすぎじゃアホがあつ！　しかもリールにもらつただとお？　こいつ何様だ？　リールにプレゼントをもらう？　笑わせるな！　一世紀早いわ！

……いやしかし、果たしてこのハンプティさんを、リールがコイツに渡したプレゼントだと解釈してもいいのだろうか？

俺は躍動するハンプティさんを眺める。

リールはこのハンプティさんを量産することができる。ということとはだ、『あー、このハンプティさん邪魔あ、チョー邪魔あ。でも私が書いた奴だしい、捨てんのもつたいたくない？　あー誰か処分してくれないかなあ？　あ、そうだあ。あの野球バカに渡しちやえばいいじゃん！　あいつなんてえ、私にとっては焼却炉みたいな存在だし。キャハハハハハッ！』てな具合で、リールがコイツに渡した可能性だつてあるよな？　いや、一〇〇パーそうに決まつてるっ！　ふひひっ！　リールの中でお前の存在は焼却炉にすぎないんだよ！　いい気味だなあ！

「ハハハハハハハハハハハハッ！」

「……に、兄ちゃん？」

くそっ！　心の声が漏れた……っ！

「な、な、に、ハハハハハッ、笑いでエクササイズって奴さ。ヒーハッ！」

「ふ、ふーん……」



ええいつ！ ハンプティさんを見るような目で俺を見るな！  
「ほ、ほら！ さつさとボール取りに行くぞ！ もうタダでいいから！」

ホントはタダなんてありえないんだが、この気まずい空間から脱出するにはこうするしかなかったんだ。

## 1章 6

ああ、怖かった……。

なんでいつもあの家にボール入るんだよ。なんだっけ？ 盆栽  
って奴を毎回毎回ものの見事に碎けさせてるもんなあ。てかさ、あ  
の人も盆栽の場所変えるとかさ、色々打つ手はあるじゃんか。学習  
しろよな、ったく。

と心で愚痴りながら、俺は家に帰ろうとしているわけだ。という  
より、もう家の前だ。でも家にはまだ入らない。

俺は『ストルス雑務店』のカウンターに腰かける。それから、夕  
闇が訪れた始めた空を見上げた。

また夜が来る。俺の本業の時間がまた近づいて来たんだ。

そう考えると、少しばかりの悲しさと寂しさが俺を包み込んだ。  
けど、こんな感覚にも慣れたもんだ。

さてと、やりますか。この静かな仕事場じゃないと安心してでき  
ないことを。

話を誰かに聞かれるわけにはいかないからな。

俺は携帯を取り出して、ボイスチェンジャーを取りつける。

何、仲介屋への電話って奴さ。

話は二、三分ほどで終わった。

ターゲットの再確認くらいだからな。

これで表でやることは終わった。あとは家に入って夕食だ。

夜はスリイナが作りに来てくれないから、夕食作りは必然的に俺  
がやることになる。別に面倒だとは思わない。たださ、俺のもの凄  
い下手くそな料理をリールに食わせるってのが、ねえ……？

けどさ、リールが料理を作るってわけでもないからな。

だから結局は、俺が作るしかないわけよ。

携帯からボイスチェンジャーを外したのち、俺は家に入った。  
リビングへ向かうと、テーブルに教科書ノートを広げてリールが

宿題をしていた。

「あ、フィー兄ちゃんおかえり！」

リールはくりつとした目を細めてそう言った。

俺は嬉しく感じる反面、悲しくも思えてきた。

いつもだ。リールはいつも、父さんも母さんもない家で一人きりで待つてくれている。

ホントなら俺がそう言うてやりたい。俺がリールを迎えてやりたい。

「フィー兄ちゃん？　どうかしたの？　ぼーっとしてるよ？」

「あ、いや……なんでも」

まあ結局、俺がリールを迎えてやるなんてことは、夢のまた夢だ。だってそうだろう？　俺がリールを迎えるってことは、端的に言うて俺はニートってことだろう？

それはちよつと好ましくない展開だ。俺の夢は、っていうより生きる理由は、リールに何不自由ない生活をさせ続けること。だからニートじゃいかんだ。

俺はただただひたすらに、馬車馬のように働けばいいんだ。

あ、そう考えると、やっぱりリールにはこの状態で居てもらうのが一番いいのかもしれない。何せ帰ってくるたびに、俺はこうして癒されるわけだからな。それにあれだ、家にいてもらうのが一番安心できるしな。

けれど、リールにしてみればやっぱり退屈なんだろうな。俺が雑務で外に出てる時はずっと一人なわけだし。……さっきのハンプティさん早書き対決の時とか、もの凄く楽しそうにしてたもんな……

……よし、笑わせよう！

迎えてやれない代わりというか、とにかくリールを楽しませてやるうという衝動に駆られた俺は、

「マンションも……ダイワハウチュ」

この前テレビでやってた世界の面白CM集の中で、特に印象に残ったCMの決め台詞を言ってみた。



俺はマツハに相当すると思われるスピードでキッチンに移動し冷蔵庫を覗く。ハンバーグでいいか。焼くだけだし。

というわけで一〇分後。

我が家の食卓にはハンバーグとつけ合せのコーンとポテト、それに加えてパンとコーンポタージュという、どこまでも普通の雰囲気を持つ料理たちが乗っかっていた。

ちなみに、コーンポタージュは粉末にお湯を注いだだけだ！

…別に威張って言うことじゃないな、ごめん。

俺の対面に座っているリールはこれらを見て、

「美味しそう！」

だってさ。こんな平凡な料理に対しても、リールは目を輝かせてくれる。

俺はホッとしたね。リールにそう言ってもらえれば、これ以上ない喜びだからな。

「よし、じゃあ食うか」

「うん！」

「いただきます」

「いただきます！」

俺はまず、メインであるハンバーグに手をつける。どうやらリールもハンバーグのようだ。俺たち兄妹はほぼ同じタイミングで、口にハンバーグを放り込んだ。

……んー、まあまあだね。もうちょっと焼いてよかったかもしれない。

そう思いながら、俺はリールの顔を窺う。俺の味覚なんかよりもリールに合ったかどうかが重要なんだ。

「まあまあだね。やっぱりスリイナ姉ちゃんの方が美味しいよ」

「さ、左様でござるか……」

うう……毎度のことながら、結構な毒舌だぜ。

「……ご、ごめんな。兄ちゃん、いつになっても料理上手くならなくて……」

「うつん、そんなのどうでもいいんだよ。私はフィー兄ちゃんと一緒に、こうやって食べられるだけで十分だもん」

「……り、リールう……」

俺は思わず感極まる。 やべ、涙出そう。

俺は必死に、必死にこらえてみた。……だが、残念ながらフィーニツトダムは決壊してしまった。

いま苦笑いした奴、あとで八つ裂きにしてやる。

「フィ、フィー兄ちゃん……？」

急いで涙を拭ってみたが、どうやら見られてしまったようだ。ああ、恥ずかしい……。でもさ、いまのはしょうがないかな？ 泣くなという方が無理って話だ。

だっていまの言葉は、俺を必要としてくれてるってことだろ？俺が一方的にリールを必要としてるってことじゃなくて、リールも俺を必要としてくれてるってことだろ？

それは俺にとって 何よりも嬉しい最高の言葉だ。

今後の人生において、これを上回る感動はないんじゃないかと思うほどにな。

「リール、ありがとな……」

堕ちて破綻している俺は、いまの言葉だけで十分すぎるほどに救われたよ。

## 1章 7

楽しい時間はすぐに終わる。

それは誰にとつても例外ではないだろう。だから俺にも当てはまるんだ。

今日も俺は、リールが寝静まったのを確認してから都会の方にやってきた。ターゲットというのは、どうしてもこっちにいるものなんだ。

来るのが面倒なんだよなあ。片道一時間近くかかるからさ。でも、それに見合った報酬があるし、何より住んでる場所から離れてるつてのは結構重要なことだ。捕まるわけにはいかないからな。

さて、今日はどこから狙おうか。といっても、やはり上からになるわけなんだけどな。

俺はターゲットが泊まっているホテルの反対側のビルの屋上へ向かった。

ああ、寒い。やっぱり屋上寒い。でも俺だって学習はしている。今日は長袖長ズボンで来たんだ。昨日よりはマシだ。でもまだ寒い。屋上は手ごわいなー。

とふざけてもいられない。今日は昨日のみたいに、決まった時間にターゲットが来るわけじゃない。ターゲットはもう反対側のホテルの一室にいるんだ。だからタイミングが命。窓の近くに来たところを一撃で仕留めなきゃいけない。

難易度は昨日より難しいと思う。

俺はギターケースを開けて、さっそく狙撃の用意を始める。

まず三脚を組み立てて、次に銃を組み立てて、この二つをドッキングさせて固定。それから、ターゲットの泊まっている部屋に銃口を向けて、最後にスコープの標準と倍率を合わせる。

これでとりあえずは準備完了。

あとはひたすらスコープを覗いて、ターゲットが窓際に来るのを

待つだけ。カーテンが閉まってるから、ホントにタイミング命だ。

……ああ、緊張してきた。

ターゲットが来る、来ない、来る、来ない、来る、来ないと引き金に指をかけてはやめ、かけてはやめを繰り返していると　スコ  
ープで捉えているカーテンに人影が映った。

が、俺は引き金を引けなかった。

……くっ、タイミングを取り損ねた。……けど、ターゲットの部屋の構造を思い返す限り、ターゲットはいま、ベッドからどこかに移動したみたいなんだ。つまり、ターゲットはもう一度絶対に、カーテンの前を通るはずだ。じゃないとベッドに戻れないからな。

だから、まだ大丈夫。次こそは　狙い撃つ。

神経を研ぎ澄ましてタイミングを計っていると、こんな時に限ってアイツが、毎度毎度俺を混乱させるアイツがやってきやがった……。

こんなことしていいのか？

こんなことしてなんになるんだ？

こんなことして正しいのか？

こんなことして誰か悲しまないか？

こんなことするのは間違ってると思わないのか？

こんなこと　うるさい！　邪魔すんな！　このタイミングで出てくるな！

……うるさい、か？　この声をうるさい呼ばわりするのか？　お前を止めようとしているこの声をつるさい呼ばわりするのか？

俺もだいたい堕ちたなあ。いいのか？　……父さんと母さんが悲しむぞ？

……うるさい。リールのためだ……。

そのリールはどうだ？　俺がこんなことをしていると知ったら……

……どうなるかな？　どう思っかな？　きつと嫌われるぞ？

そんなの知られなきゃいい。巻き込まなければいい。俺はそんなへまはしない！



そうか、さすがは俺。でもこの世の中そう上手いこ　黙れ消えろ！

瞬間　大気を切り裂く破裂音。

銃口からのろしのような煙が上がり、スコープを覗いていた俺の視界が真っ赤になった。

先ほどまでベージュっぽい色合いだったホテルのカーテンは、最初から真紅だったのではと思うほどに、それほどまでに鮮やかな赤に染まった。

……俺はまた、人を殺した。あの出血量なら確実に。もしかしたら首から上が消し飛んでるかもしれない。

今回はカーテンのおかげで、吐き気は襲ってこなかった。

だから早々に立ち去ろうと思う。俺にはうるたえてる暇なんてないんだ。

俺は銃を、三脚を、たったいま人を殺した奴とは思えない手際によさで片付ける。

一分も経たずに片付け終わると、俺は非常階段を駆け下りる。

難易度が高かった分、逃げるのは昨日よりもずいぶん楽だ。相手は一般人だったからな。黒服も何もいない。

そうして、何ごともなく地上にたどり着いた俺は昨日と　いつもと同じように都会の風景へと溶け込んだ。

もちろん、バンドの練習帰りのガキとして。

我が家に無事到着。

時間は昨日より早い。けど、高校生が帰ってくる時間とは思えないわけなんだがな。

玄関から静かに足を踏み入れると、我が家の落ち着いた匂い。これほど安心するものもない。

昨日と同じようにまず自分の部屋へ行き、ギターケースを隠す。

それから、リールの顔を拝みに行く。どれどれ、癒しをもらおうかねえ。

ホップ抜き足、ステップ差し足、ジャンプ忍び足を駆使して俺はリールの部屋に近づく。ドアの前に到達し、俺は「さてさて、うへ」と開けようとして　ドアがちょっとだけ開いていることに気づく。

「ん？」

怪訝に思っていると、部屋の中から泣き声が聞こえてきた。

うわーんっていう大泣きじゃなくて、すすり泣くような、深夜に聞くにはちよつと怖い声が聞こえてきた。

しかしそれは当然、幽霊なんていう存在し得ないものの声じゃない。

紛れもなく、リールの声だ。

俺は部屋に入るべきかどうか悩んで　入ることにした。ちよつとだけ開いているドアを二回ノックして、

「……リール、どうした？」

しかし、その声をかけても返事はなく、俺は勝手ながらドアを大きく開けて部屋の中へ。

すると、リールはベッドに座りながら泣いていた。

「どうした？　何かあったのか？」

俺はリールのすぐ近くまで寄ったのち、しゃがみながら優しくそう尋ねた。

「うう……えぐっ……ふい、フィー兄ちゃん……っ！」

ドサツと、リールが俺に抱きついてきた。

いつもの俺なら嬉しいなあと顔がほころぶのだろうが、いまはまったくほころばなかった。俺にだってそういう心ぐらいいは残ってる。「ホントに、どうした……？」

そう尋ねるしかなかった。赤ちゃんでもあやすかのようにリールの背中をぽんぽんと優しく叩きながら、俺はそう尋ねるしかなかった。

「……あのね、さつきトイレに起きて……戻ってくる途中に、フィー兄ちゃん寝てるかなって思っ、部屋を覗いたらね、フィー兄ちゃんが居なくて……それから家の中全部探したけど居なかったの……それで……」

やっと紡いでくれた言葉を聞いて、俺は顔をしかめた。

俺のせいじゃないか……リールが泣いてるの、俺のせいじゃないかよ……。何やってんだ、俺は……。リールを悲しませるのは、絶対のタブーなのに……。

早く安心させてやらないと……でもどうやって？

人を殺しに行ってたんだ、ごめんな。

なんて正直に言えるわけがない。そうなれば当然、嘘をつくしかない。リールに嘘をつくのは……嫌だけど、でも……そうするしかない。

「……ごめんな。目が覚めたから、ちよつと散歩に行っただけだから心配すんな。もう絶対に居なくならないからな」

言いながら、俺はリールの小さな背中をさする。

体の震えが弱くなったことから察するに、リールはだいぶ落ち着きを取り戻してきたみたいだ。

「……ほんと？」

「ホントにホント、絶対居なくならない。だから今日はもう寝ような？」

「うん……」

満足したように頷くと、リールは自分でベッドに横たわった。

俺はリールの足元にあるタオルケットをかけてやった。

「じゃあリール、おやすみ」

「あ、フィー兄ちゃん、待って……」

部屋から出ようとした俺に、リールが声をかけてきた。

「ん、なんだ？」

「……あのねフィー兄ちゃん、今日……一緒に寝て……」  
「えっ？」

いきなり言われてびつくりした。と同時に、飛び跳ねたいほどの嬉しさを覚えた。

で、でもなあ、嬉しいんだけど、ホントにもの淒く嬉しいんだけど……い、一緒はちよつとなあ……さすがに恥ずかしいなあ。

「フィー兄ちゃん……ダメ？」

上目遣いはダメーッ！ 断れなくなっちゃうよお！ って絶対ダメだぞ俺！ 耐えろ！ 耐え抜くんだーっ！

「あ、あのさリール。俺ってば汗掻いたから、これからちよつとシヤワー浴びてくるんだけど、だからそのあれだ……どうせ、俺が来る前に寝てるだろ？」

リールの顔を見ると、いつでも寝れそうな目をしていた。まぶたを必死に開けて抵抗している感じた。

「ま、待ってるもん……」

はつきりいつてもう寝そうだ。……きつと、俺が目の前に現れて安心したんだろうな。

「リール、無理しちゃダメだぞ？ 寝れる時に寝ないと美人になれないぞ？」

「いいもん。美人になれなくても……フィー兄ちゃんのこと、ずっと待ってる、もん……」

だとさ。しぶといですこと。まあ、リールの場合、いま寝なくたって美人ルートは確定なんだけどな。

しっかし、これはどうしたもんか。ちよつとまいっ……あっ！ ひらめいたっ！

「リール！ 俺はここに自分のベッドを持つてくる のは無理だから、まあ……床で寝るから、それならどうだ？ リールが明日の朝目覚めた時に俺がここにいればいいだろ？ それとも、やっぱ一緒じゃなきゃダメか？」

「……じゃ……それで、いい……」

お眠りになりました。

さてと、じゃあまずはシャワーを浴びてきますか。んで、そのあ

とに俺はかけ布団だけ持ってリールの部屋へ。

と、このあと俺は、その通りに動いたのち眠りについた。

なんか、最近では一番にぎやかな日だったかもしれないな、今日。

## 2章 1

「ぐぬう……！」

わたくしめことフィーニットの朝は、奇声を上げることから始まる。

奇声の理由は腹部の圧迫。

目を開けるまでもない。みなさんだってお分かりでしょう？

だってわたくしめは昨日、いや、寝たのは一時過ぎでしたから今日ですね。というわけで今日、わたくしめは自分の妹の部屋で寝たのですよ。　　ということは間違いようがないでしょう？

わたくしめのお腹の上にいる可愛い人物の名前。

それをみんなで一緒に呼びましょう。せーのっ！

「リールう……」

寝起きだからでしょうか、心の中のようなテンションで声を張り上げることはできませんでした。

わたくしめは確かめるまでもない答えを確かめるために目を開けようと思います。

さてさて、今日はどんな白いパンツを穿いているので………え？　えっ？　ええ！

わたくしめの　　なんだこの口調！　もういい疲れた！

俺の腹部にいる人物はリールじゃなかった……

「……スリイナ、お前何してんの？」

えへへ、と笑う制服姿のスリイナ。

「えへへ、じゃねえよ。一回どいてくれ。というより、なんでお前なんだ？」

「リールちゃんが一回やってみればって言うから、つい……」

「ついじゃねえよ、ったく……。どうりでいつもより重いなあって

思っただよ」

そう言うと、スリイナは傷ついたような顔になり、俺からさっさと離れていった。

「お、重かった……？」

スリイナが泣きそうな顔で問いかけてくる。

ああ……めんどい。なんで自業自得の奴を俺が慰めなければならんだ。……でも確かに、重いつていうのはちよつとストレート過ぎて酷かったか？ ……しゃーねえな、それなりの撤回しますよ、すればいいんでしょ。

「いや、重いつていうのはな、あくまでリールと比べての話だ。お前とリールじゃ背丈が違うんだからお前の方が重くて当たり前だろ？ それにあれた、俺にしてみたらお前なんかまだまだ軽い方だったよ」

はっ！ どうだこのフォロー、完璧だぜ！

それを証拠に、スリイナは顔を素晴らしくにこやかに、それはもう美人の極みといっても差し支えないほどの笑顔を浮かべていた。がしかし

「ほんと？ 軽い？ それってどのくらい？ キャビア何缶分？」  
褒められたせいで調子に乗ったらしく、半ば暴走気味に質問してくるスリイナ。キャビア何缶分なんぞ知るか！

俺はうざいと思ったが、無視するとヒートアップすること請け合いなので、超面倒だと思いながらもそれらの質問に答えてやることにした。ただし、一気にな。

俺は立ち上がり、スリイナに近寄っていく。

スリイナは俺のそんな行動を怒ったと判断したらしく、急に「ごめんねごめんね」と謝り始めてきた。

けど俺はそれを見無視！ お前が二度とそんな馬鹿げた質問をしてこないようにするために、俺は心を鬼にするぜ！

俺は一步一步、スリイナへ近づいていく。

スリイナが自分から壁際まで下がっていったので、簡単に追い詰

めることができた。

俺はスリイナの体に手を伸ばす。

スリイナが顔を真つ赤にしているが俺は気にしない。

俺は左手でスリイナの太ももの裏を持つ。あ、柔らかい。右手は背中に戻す。

あ、これはブラのヒモですか？　そしてそのまま持ち上げる。あれだ、いわゆるゆお姫様抱っこって奴だ。

「いいか？　これがお前が軽いっていう証拠だ！　分かったら、もう二度と軽いかどうかなんてこと、俺に聞くなよ？」

「う、うん……」

うむうむ、分かったのなら降ろそう。

「それよりさ、朝食はできてるんだろうな？　できてるからこそ、俺の上に乗っちゃってたんだろうな？」

もしできてないのにこんな遊びをしてたっていうのなら、俺はそのスカートをめくってやる。

「できてるよ。じゃあ下いこっか」

スリイナはそう言つて、機嫌よさげに部屋から出て行った。

……まったく、空気を読めない子は嫌われるぞスリイナ。そこは『あ、ごめん。まだできてないの……』だろ。そしたら俺が『んだと！　覚悟はできてんだろうな！　それい！』と手を振り上げて、最後にスリイナが『きゃっ！』だろうがよ……。

ま、別にいいんだけどな。スリイナの下着の色は大方予想がつく。ズバリ白だ。

なぜかつて？　あんな純朴お嬢様が黒とかなわけないだろ？　それにさ、昨日スリイナの谷間を拝見した時、下着の色は白だったんだ。だから白だーっ！

つて、俺は朝からなんちゅうことを考えてるんだ！

んー、これはもしかすると、マイケル症候群を発症したのかもしれない……。末期になると自らの服を引き裂いて全裸で街を闊歩し始めるという恐ろしい病気だ。……ごめんなさい、こんな病気ありません。



なんて冗談はさておく。

リビングに向かうと、スリイナの言うとおり、きちんと朝食が用意されていた。しかも驚くなかれ、今日の朝食はなんと

フレンチトーストだった。

拍子抜けだ。

昨日よりもだいぶあっさりとした朝食は優雅に終了。

色々準備したのち、父さんと母さんの遺影にいつてきますの挨拶をして、俺たちは学校に出発した。

そして学校に到着すると、俺とリールは引き離される。

運命とは残酷なものだ。

## 2章 2

迎えた放課後である。

たいぶ時間飛んだなあとか、できれば思わないで欲しい。一年は三六五日もあるのだ。その中に何も無い平穏な日がどれだけあると思ってるんだ？ 恐らく九割はそんな日だぞ。

で、今日はそういう日だったんだ。お伝えすることなど何も無い、平々凡々な日だったんだよ。もつと言え、今日は『ストルス雑務店』も定休日。ホントに何も無い、のんびりとした日なのだ。

あつさりと残酷な運命から解き放たれた俺は、スリイナと一緒に校門の前でリールを待っていた。

「フイー、あのさあ……」

そんな中、スリイナが口を開いた。

「何だ？」

「明日は土曜日でしょ？」

「そうだな」

「だからね……その、今日、うちに来ない？」

「いいぞ。何もないしな」

「ほんとっ？」

「ああ、今日はホントに何も無い日だからな。それにここんところ忙しくてお前の家に全然行けてなかったし。久々にお前の家が見たいつてもんだ」

心からそう思う。なんとも言っているが、スリイナはお嬢様である。家だってバカみたいにでかいんだ。確実に俺の家の一〇倍はあるだろうな。ちなみに、俺の家は可もなく不可もない普通の大きさの家だ。でもその一〇倍って普通に凄いだろう？ んでもって、そんな家に行きたくないわけがないだろう？

だから俺はあつさりオーケーしたんだ。きつとリールも行きたいと思うだろうしな。

「じゃあ私、迎えを呼ぶね」

スリイナは携帯を取り出して電話をかけ始めた。

これで歩かずに済む。別に家までそんなに離れてないけど、一〇分近く歩きたいか歩きたくないかでいったら、そりゃ歩きたくないよな？

なんて考えていると、初等部の子供たちが校舎から出てきた。

実にいいタイミングだな。さてさて、リールはどこだっ！

あ、いたーっ！

俺は恥ずかしげもなく手を振る。

リールも気づいて手を振り返してくれ……ん？ あれ？ 手を振り返してくる人数が明らかに多いんだけど？ 一、二、三、四……九人多い。九人……？

ああ、きつとあいつらだ。全員リールと比べて特徴が乏しいから分かりにくかったが 野球ボーイどもだ。

「よ。ここで一緒になるのは珍しいな」

近づいてきたガキどもに、俺は声をかけた。

「今日もボール入ったら取ってくださいよ？」

「はい残念でしたあ！ 今日は何でも屋がお休みの日でーすっ！俺はしたり顔で事実を告げた。…… 大人気ないな、俺。

「え？ そうなの？」

「そうなんだよ。お前らが利用し始めたのは三週間ぐらい前からだっけか？ ま、知らなくて無理ないかもな。今日は一ヶ月に一度の定休日だ」

休み少なっ！ って思っただろ？ でも、学校に行きながら、俺たち兄妹が生活をやっているくらい『ストルス雑務店』は稼いでると、スリイナを含めた近所の人たちに思わせるためには、このくらい働かないとダメなんだよ。

なんでそんなことを思わせる必要があるのかって言えば、前も言っただよな？ 殺し屋をやっているってことを隠すためだ。

大変って言えば大変だけど、つらいってわけでもないし、哀れみ

はやめてくれよ？

「あーあ、今日は野球できないな……」

「玉拾いがいないと野球できないって、お前らただけボールなくす気なんだよっ！」

ガキどもは俺のそんな突っ込みを華麗にスルー。哀愁を漂わせながらトボトボと立ち去っていった。……そんなに野球したいなら部活入れよ。そうすればボールとか盆栽とか気にする必要もなくなつて存分にプレーできるだろうによ。　　って、そういえばそうだ、お前らなんで草野球で満足してんだよ！

声を大にして尋ねてみたかったが、そこまであいつらに興味があるわけでもない。だから心中のみでの疑問とさせてもらった。あしからずご了承してくれ。

まあ、そんなことより、

「リール、スリイナの家に行くか？　スリイナが誘ってくれたんだけど？」

このことをリールに教えていなかったじゃないか。ま、返事は聞くまでもないけどな。

「うん！　行く行く！」

な？　行きたいに決まってるんだよ。逆に行きたくない奴なんているのかね？

と考えていたその時

黒塗りの高級車　　リムジンって奴が校門前に止まった。フォシ  
ルニクス家のお迎えが来たようだ。

運転席のドアが開き、紳士という言葉が似合うおじいさん執事登場。執事さんは俺たちの方まで回ってきて、わざわざドアを開けてくれた。凄いだろ？

「さ、スリイナお嬢様、お友達もどうぞ」

「フィーとリールちゃんからお先にどうぞ」

「いいのか？」

「いいからいいから！」

楽しそうに言うスリイナに背中を押されて、俺とリールはリムジンの中へ。

「広ーいっ！」

はしゃぐリール。別に俺もリールも乗ったのはこれが初めてじゃない。数回乗ったことがある。でも、それでもはしゃぐってこれだつて、俺もはしゃぎそうだもん。

もうそこら辺の車と全然違う。リールの言うとおり広い。これに尽きる。普通に寝れるもんな。暮らそうと思えば余裕で暮らせると思う。

そして、そんなミニキャンピングカーがついに発進した。目的地はフォシルニクス邸。車だったら二、三分で着くだろう。

だから別にやることはない。のんびりと、このつかの間の贅沢を味わうことにする。

むむ！ 残念ながら俺にはやることができた。この座席の感覚はまたいつかしっかりと味わえればそれでいい。いまは いまはやらなければならぬことがあるっ！

それが何かと言えば、ズバリ！ パンツを見ることだ。

俺の対面に座っているスリイナ。それを見て、朝の答え合わせをしなければならぬという使命感に襲われた。みなもの者、期待に応えようぞ！

ちなみにいま、スリイナの足はしっかりと閉じられている。無意識下での自動防御といったところだろうか。さすがはお嬢様だ。

だが だがあかしい！ こいつはお嬢様である前にちよつとアホなのだ。勉学の部分ではない。いわゆる天然って奴だ。

なので、こう言えば恐らく……

「スリイナ！ 足を開けっ！」

「え？ こ、こう？」

ほほーい！ やっぱ予想通りだ。早口の命令口調で言えば開くと思っただぜ！

ちなみに色の方も予想通りでした。え？ 何かって？ だから白

だよ白っ！

「うう、酷いよフィー……」

スリイナは足を内股にしてスカートを押さえつけるように手を置いていた。

こうされてしまつては打つ手なし。完全防御状態だ。ま、もう意味ないけどな。

「何が酷いんだよ。あんな命令で足開くスリイナだつてある意味酷いだろ」

まあ、それを狙つたわけなんだけどな。

「だつてえ……あんなの卑怯だよお……」

……な、なんか、スリイナが可愛いぞ。なんだこの気持ちは……。ゾクゾクというか、胸の奥深くで何かが高ぶっている。ハッ！

まさかSへの覚醒か！ この状況を楽しく感じるのは、そういうことなのかあ！……で、でも俺は！俺は自称ニュートラルなんですこんとこよろしくうーっ！

「じゃあお前も俺にやり返せばいいだろ？確かにいまのは俺も悪かったかもしれないからな」

ほらな？俺ってニュートラルだから、今度はマゾになつただろ？

「やり返す？それってどういう形でもいいの……？」

「いや、そりゃ限度つてもんをちゃんと設けてくれよ？あと、痛いのはヤダぞ？」

あら、これはマゾあるまじき発言だな。でもいいんだ。だつて俺はニュートラル。

「そんなことしないよ。でもそれ以外ならなんでもいい？」

「まあな……とりあえず体に害がなきゃなんだつていいよ。ほら、今日は休みだけど、明日からは仕事を再開するんだからな」

怪我して働けなくなるとホントに困るからな。

「そうだよな……じゃあ、害はないけど、でも強烈な仕返しを考えしておくからね」

「へいへい、せいぜい楽しみにしておきますよ」

吐き捨てるように言ったのち、俺はリールを見た。

リールは縦長の座席に横たわってゴロゴロとしていた。なんて愛らしいんだ！　そして白のパンツが見えているじゃないか！　なんたる幸運だ！　ありがたやぁありがたやぁ！

「フイー……」

横から死んだ魚を見るような視線が突き刺さってきた。

「な、何ドン引きしてんだよ！　いいだろ別に！　スリイナだって目の前にパンツがあつたら見るだろ？　そうだ、俺のを見せてやるよ。さっきのお返しだ」

「み、見せなくていいよお！　フイーのバカッ！」

怒っているからなのか、それとも恥ずかしいからなのか、とにかくスリイナは顔を真っ赤にしていた。

これ以上からかうのはちょっと危険と判断し、俺はお口にチャックを施した。

さあ、どうでしたでしょうか！　リムジンという限られた空間をどれだけ愉快的なステージへ変えられるかにチャレンジした今回！

スカートの中身当て！

座席のふかふかを存分に堪能！

リムジンの楽しみ方は　人それぞれさっ！

とまあ、急にまとめに入った理由は、リムジンがフォシルニクス邸に着いたからである。

## 2章 3

リムジンがフォシルニクス邸に到着した。

やっぱり車はいいな。早いし便利だ。父さんが死んでからは車に乗れなくなったからさ、痛いほど分かるよ。この時代は車がないとダメだってことがな。

とか思っていると、執事さんがドアを開けてくれた。スリイナが最初に降りて、俺、リールの順だ。

降りればそこは、まるでホテルの入り口。しかも、スリイナが帰ってきたからだろうが、出迎えが結構いる。まさにVIPがホテルにやってきた時のようだ。

中に入ればエントランスホール。てか、受付がないだけでホテルだね、ここ。

ホント久々に来たので、俺は首を右往左往させてお屋敷の中を見回す。鹿の首のはく製とか、それっぽいモノがたくさん飾られている。

「やっぱ凄いなスリイナの家は……ってあれ？」

スリイナに声をかけようとして、スリイナがいなくなっていることに気づく。

「スリイナ姉ちゃんはお着替えだって」

どうやら、俺が色んなモノに目を奪われているうちに、現実では状況が変化していたらしい。

「じゃあ、俺たちはどうすれば……」

精神と時の部屋から出た時に近い感覚に襲われた俺は、別の意味で右往左往。

「こちらへどうぞ」

そんな俺に助け舟の如く、メイドさんが素晴らしい笑顔とともに声をかけてくれた。

この家のメイドさんの格好は、紺と白を基調とした、いわゆるク



ラシックスタイル。しかしながら、それを着ているメイドさんが中々に可愛いお人だ。……俺のメイドさんになつてはくれないだろうか？

妄想にふける俺と兄のそんな妄想を知る由もないリールは、清楚で可憐なメイドさんのあとに続いて奥へと進んでいく。

そうして案内された場所は、前にも通されたことがある客間だった。客間なのにうちのリビングよりもはるかに広いという、庶民にとっては存在するだけで嫌味を覚えさせられる空間だ。

俺とリールは、その空間の中央付近に鎮座する高級そうなソファに腰かけるよう促される。お言葉に甘えてリールと一緒に座ると、計ったようなタイミングで紅茶が出てきた。

味はなんだろうかと考えながら、俺は一口飲む。

「な……っ！」

俺は雷に打たれた避雷針の気分になった。

……れ、レモンティーだと！ なぜ俺の好みを知っている？

だ、だとすれば、リールのはミルクティーか！

俺はリールの持つティーカップを覗き込む。

レモンティーやん。……くそっ、サイコメトラーがいるんじゃないかという妙な深読みしてしまった俺がちよつと恥ずかしいじゃないか……。

一人で頬を染めながら、俺は新たな疑問を抱き始める。

……そういえば、これはインスタントなのか？ いや、この家はインスタントなんてもの自体が存在しないだろ。いや、もしかしたらその思い込みを利用して、実はインスタントを……いや、逆にそこまでの深読みをさらに読んで、あえて高級なものを出しているのではないか？ けどその逆も……。

と思考がカオスしかけたところに、

「フイー、どうしたの？」

スリイナの声が届いた。　　ちょうどいい。インスタントなのかそうでないのか、この際スリイナに聞いてしまえ。

「あのさこの……………」

連ねていくはずだった俺の言葉は、序盤も序盤で止まってしまった。なんでかって？ 端的に言う……………思わず目を奪われたんだ。制服じゃないスリイナを見たのがかなり久々ということもあったからか……………いや、例え毎日私服姿を見ていたとしても、これには目を奪われたことだろう。

スリイナの格好は白の長袖Ｔシャツに黒のベスト、下はデニムのホットパンツ。ニーソとかは穿いてなくて、生足が全開である。

俺がじーっと見ていたせいか、スリイナの顔が赤くなる。

「へ、変かな？」

もじもじとした態度でそう聞かれたので、俺は考えてみる。

変かどうか……………。別に变ではない。でもスリイナっぽくないと言えばスリイナっぽくない。スリイナは大人しいから、こういう服のイメージがまるでなかった。だって最後に見たスリイナの私服って、白のワンピースだぞ？ それは遠い記憶でもない。ほんの二、三週間前のことだ。

イメージとかけ離れた姿を見せられてどう答えればいいか迷った俺は、思わず最初に見た時の印象を口走ってしまった。

「エロい」

そう言った瞬間、俺のつま先に激痛が走る。リールによるゼロ距離かかと落としを食らったからだ。俺はあまりの痛さに悶える……………

…ごめん、リール。でもこればかりはそう思っちゃうって。

悶えながらも、俺はしっかりとスリイナを捉え続ける。

エロい発言のせいか、スリイナの顔は赤に支配されていた。けど着替え直しに行くでもなく、隠すでもなく、ただその場に立っている。顔をよく見れば、恥ずかしさの中に嬉しさが混じってるように見えなくもない。

……………やはりスリイナは痴女なのだろうか？ その悩ましい太ももを俺に見せつけ、自分は密かに高揚感を抱いているということなのだろうか？

そこまで考えて、俺は頭を振る。

ないない、ありえない。長年見てきたけど、スリイナはそんな奴じゃない。嬉しさが混じってるように見えたのは俺の見間違いだろうな。

それよりもまず、エロい発言を撤回しないと。何しろリールが大陸で立腹みたいだし。

あとはまあ、スリイナの服装に対するちゃんとした感想も入れてやらないとな。せっかくオシャレしたみたいだしさ。

「ごめんな。エロいは違うよな。エロいじゃなくて、意外だったよ。俺はもつと地味めの服で来るのかと思ってたからさ……でもそれが、その、いきなり大胆なので来たもんだから正直びっくりして……けど別に变ではないし、俺はその格好のお前……好きだけど」

「……好き？」

言葉のチヨイスを誤ってしまった！ 最後は『いいと思うけど』でシメるべきだった！ は、早く好き発言を取り消さないと！

「す、好きっていうのはさ、その格好が似合ってるって意味だ！へ、変な勘違いすんなよなっ！」

あれ？ こんな感じの台詞って、普通、女の方が使うんじゃないか？ ……ま、いいか。

「……フイーったら、照れちゃってて可愛い……」

「う、うつせえ！ 照れてなんてねえよ！ スリイナこそ、自分の照れを棚に上げて何言ってやがる！ 照れたお前だって可愛いぞ！」  
「えっ」

ぎゃああああああああああああああああああ！ 俺いまもの凄い変なこと言ったよなあ！ 勢いに任せ過ぎて、もの凄い変なこと言っちゃったよなあーっ！

……ああ、隠れる場所があるのなら、例えば肥溜めの中でも構わないぜ……。心底そんな気分だ……。

その後、場は雑談タイムとなったのだが、俺とスリイナは初めて

のお見合いみたいな雰囲気になってしまって、ほとんど会話ができなかった。

リールがいなかったら気まずさで死んでいたかもしれない。

もしかして……あの気まずい空間こそが、スリイナの言ってた仕返しだったのか？

いや、まあ、そう考えるにはあまりにもできすぎだとは思っけど……。

でも仮に……もしそうだったのならば、確かにこれ以上ない強烈な仕返しだったぜ。

## 2章 4

あ、そういえばレモンティーの正体聞いてない！

フォシルニクス邸からの帰り道、俺はそのことを思い出したなんてな、嘘だ。

……回りくどいこととしてごめんなさい。ちなみにレモンティーは絞ったりして作ったそうです。インスタントじゃなかったです。うおっほん。では気を取り直して。

俺たち兄妹はまだスリイナの家だ。まだっていうか、今日は家に帰らない。

泊まってけだそうだ。

さっきまでの妙な雰囲気はなくなったし、明日の仕事は午後からだからということもあって、俺は了承した。リールもその方がよさそうだったからな。

それでいまは夕食中なんだが、やっぱり凄いね。何がって料理に決まってるんだけど、もうあれだね、レストラン、最高級のレストラン。夕食がコースで出てくるって凄くない？

まあ……だからって、雰囲気まで最高級レストランってわけじゃないんだけどな。

「あはははははっ！ フィーニツト君！ 婿に入りなさい、婿に！」  
こう言ったのは、縦長テーブルの先端 お誕生日席って言うのかな？ そこに座っているスリイナの親父さんだ。

親父といってもまだ若い。四〇手前ぐらいだった気がする。交友のあった父さんの話によれば、一代でこの家を築き上げた凄い人らしい。でも性格がちよっとおかしい。

ホント、親父さんは久々に会っても変わらないな……。ま、気にしない気にしない。

「も、もう、お父さんったら……」

と、いまの親父さんの発言を受けて頬を染める、俺の右隣のスリ

イナ。なんかお前、最近頬染めっぱなしだな。      てか、もうちょっと強く否定しろよ。

「でもスリイナはフィーニット君のことが好きなんだろう？    んー？  
ほら言ってみなさい、ほら！」

なんだこいつ、最低だな。スリイナは俺のことなんて好きじゃないに決まってるんだろ。

「……………」

スリイナ！    なんか言え！    勝手に肯定されるぞ！

「そうかそうか！    やっぱりな！」

ほら見たことか！    ここは俺がビシツと言ってやらないと！

「親父さん、俺は婿になんか入りませんからね！」

「ん？    そうか……………じゃあしょうがないな……………」

なんだ、意外とあっさり…………

「うん、しょうがない。スリイナ、お嫁に行きなさい」

んでだよっ！    なぜそうなるっ！

「親父さん、俺は婿には行かないし、お嫁も要りません！    大体なんでそんなに俺とスリイナをくつつけたがるんですか！」

「親として当然だろ？」

当然じゃないだろ！    そこは普通、手放したくない！    だろ！

俺だってリールをお嫁になんてやりたくないし。

……………やっぱおかしいや、この人。新しいタイプの親バカとでもいうのか…………。

で、スリイナはスリイナでまだ赤くなってるってうつむいてるし。…………

いや、もしかしたら落ち込んでいるのかもしれないな。俺と結婚とか言われてるんだし。幼なじみと結婚なんて冗談じゃないもんな。

「スリイナ、気にすんな。俺と結婚なんかしないでいいんだから」

冗談でも言うように明るく、けど親父さんに聞かれると面倒そうだから小さく声をかけた。

スリイナが慌ててなんか言おうとしてたけど、別にどうでもいい。たぶん、いや絶対に俺を氣遣う言葉が、例えば『私は嫌じゃないよ』

とかいう言葉が飛んでくるはずだからな。もう聞かなくなっただけで分かる。

「ん？ フィーニツト君、スリイナになんて声をかけたんだい？ もしや、『あんな親父から言われなくても俺たち結婚するもんなん』って」

「違う！」

「じゃあなんだろうな？ そのあとのスリイナの慌てぶりからすると……『子供は一〇人がいいな』っ」とか」

「ちげえよ！」

「一〇人は大変だ。スリイナ、頑張りなさい！」

無視！ 無視ですか！ 片手で小さくガッツポーズ作んなっ！

「……はい」

はいじゃねえええええ！ 親父さんが何言ってるか分かってんのか！ ああもう限界だ！ キレていいはず！ 俺はキレていいはずだ！

「いいに加減しろよ、アンタ」

「こら！ 言葉遣いがだんだんひどくなってきたよ。もっと年上を敬いなさい。まったく、これだから最近の若者は……」

「す、すいません……」

出鼻をくじかれてしまった。なんだよ急に……。てか、敬われたいのならもっとしっかりしてくれよ……。

「うんうん、分かればいいんだ。それより、一〇人はちょっと多いんじゃないかな？ 五人じゃダメかな？ まあ、孫がいつぱいっていうのは悪くはないんだけどね」

……もういい。もう無視無視。相手にしちゃダメだ。

俺は心を晴らすため、リールと会話することにした。首を左に向ける。

まあ可愛い！ でも心なしか不機嫌な気がする。……いままで相手をしていたなかったからかな？ それなら、いまからたっぴり相手をしてやるからな。

「リール、この」

「ふんっ！」

いつかみたいに効果音つきでそっぱを向かれた。ど、どど、どど  
うしよう……。

「あははは、リールちゃんに嫌われたね。スリイナに浮気するから  
だぞ？」

こ、こんの親父いいいい！ いや、ダメダメだ！ これを相  
手にしちやダメなんだ。また親父ペースになる。いまはとにかく、  
リールの機嫌をどうにかしないと……。

「リール。俺はどこにも行かないで、ずっとリールのそばにいるか  
らな。結婚だつてしないし、お前を一人になんかしないからな」

そう言つと、リールはこちらに顔を向けてくれた。といつても、  
様子を窺つような感じで、ちゃんと見てくれてるわけじゃないけど。  
でも、これはあと一押しで機嫌を取り戻してくれるはずだ。さて、  
どんな言葉をかけようか。俺がそう模索していると、

「そうかそうか、やっぱリールちゃんもフィーニット君のことが  
好きなのか。あははははっ、モテモテだね？ フィーニツ」

「そ、そんなんじゃないもん！」

リールが親父さんの台詞を遮る。そして、こちらにチラッとだけ  
向けていた顔を薄く染めたのち、さっきよりもひねりにひねつてそ  
っぱを向いた。一周回つて俺の方を向きそうなレベルの逸らし具合  
だ。

……ああ……せつかくこつち向かせたのに……お、親父の野郎が  
いらんこと言うから、リールの奴、恥ずかしがつちやったじゃんよ  
お……。

はあ……なんで俺ばかりこんな気まずい目に遭わなきゃいけな  
いんだよ……。神様、ちよつとばかり理不尽だぞ……。

……まあ、俺なんかにはこのくらいの罰を与えてこそ、イーブン  
ってことなんだろうけどな。



## 2章 5

騒がしい食事を終えて、リールがどうにか機嫌を取り戻してくれたところで、俺たちは風呂に入ることにした。

もちろん混浴などではない。そもそも、この家には広い風呂が数ヶ所あるんだ。そんな狭苦しいことをする必要はない。……そりゃ、女の子と狭苦しいことするのは大歓迎だけど、それは倫理に反するってもんだ。って、人殺しの俺が何言ってんだか。

まあいいや。それで、俺はそのうちの一ヶ所の風呂に一人で来ている。

脱衣所がもの凄く広い。それはもうスパリゾートかってぐらいにな。ロッカーもあるし。まあ、使用人さんたちが多いからなんだろうけどさ。

そんな広い空間で服を脱ぐ。フルになったところで、俺は風呂場へ続く扉を開ける。

お！ そうそう！ この家の風呂はこういうのだったっけな！

眼前に広がる光景を見て、俺のテンションは上がり上がる。

大浴場と呼んでもいいほどの広さ。そこに低い堀みたいなモノが存在している。

その低い堀みたいなモノには、シャワーがついている。堀の左側に五個、右側にも五個、両側合わせて一〇個という配置。

それとまったく同じ堀がもう一列あるから、シャワーは合計二〇個。つまり、ここで二〇人が体を洗えるってことだよな……。

啞然としながら奥に目を向けると、その二〇人が余裕で入れそうなほどにでかい湯船があった。

この浴場は確か……日本の銭湯というものをモチーフにしていると言っていた。日本すげえ。いや、これを作るほどの財力を持つあの親父が凄いのか？

ま、どうでもいいや。しかし、ここを貸しきり状態で使えるっ

て凄いことだよな。

俺は早速、体を洗う。　　お、このボディシャンプーいい匂い。やっぱこういうのも高いのかな？　……って、男のこんなシーン見せられてもねえ？

快く割愛させていただきます。俺も分かってるさ！

というわけで、頭も体も洗い終えた俺は、広い湯船に浸かることに。

「ういゝ……」

こんな声も出るさ。だってホモサピエンスだもの。

さてと……風呂から出たら何をしようか？

リールとしゃべって、リールと戯れて、リールと寝るか。いや、寝るのはダメか。

なんて考えていた時だった。

ガララッ！　と脱衣所と風呂場を隔てている引き戸が開く音。

……だ、誰が入ってきた？　……でも一体誰が？　もしや使用人さん？　いや、使用人さんには連絡とか入ってそうだよな。お嬢様たちがお風呂に入りますよって感じにな。それに例えそんな連絡がなかったとしてもだ、俺は脱衣所の入り口に使用中の札を置いておいたし……まあ、仮に札の存在に気づかずとも、脱衣所には俺の脱い服がある。誰かが入ってるっていうのは分かるはずだ……。

だからというかなんというか……使用人さんたちの可能性は限りなくゼロだと思う。だって、そんなおつちよこちよいな使用人さんなんて、この現実世界にはいないと思うし。そもそも使用人さんだとしたら、一人で入ってくるのはおかしいだろ。使用人さんの身分っていうのはさ、風呂に一人きりで入れるほど高いもんじゃないだろうし。まとめていうか、複数人で入るもんだと思う。

でだ、それじゃあいま入ってきたのは一体誰なんだって話ね。

使用人さんを除くと、その数は限られてくる。さらにその中でも、人が風呂に入っているのにも気づかずに入ってくるアホと言えば……

……スリイナ？

あ、ありえる……。奴の天然ぶりならば、俺がどこの風呂に入つたかを把握していない恐れがある。さらにあの天然ならば、札を置こうがそれに気づかない可能性が十分にある。さらにさらにあの天然ならば、俺の服を見たところで『ここで洗濯するのかな?』としか思わないかもしれない。ちなみにその服というのは制服だが、ここには制服を洗うことができるクリーニングルームがあつたはずだ。つまり、あらゆる天然が重なり合い、奴は、スリイナはここにいるということになる。

といつても、まだ仮説だ。

ここからはその人物が見えない。入ってきた時は塀が邪魔で見えなかったし、ソイツはそのあとすぐに体を洗い始めたからな。俺はまだ目視できていないわけなんだ。

なので、俺はソイツが誰なのかを確かめるべく、音もなく湯船から出る。俺はすぐさま身をかがめ、それからほふく前進の体勢になつて少しだけ進み、ソイツが体を洗っている列を覗き見た。

「ぶっ！」

思わず噴き出す。やっべ！ 俺は急いで顔を引つ込める。

……ふう、どうやらバレなかつたようだ。      てかそれより

……あの、ホントにスリイナだつただけだ。……ヤバかつたよ。

無防備だつたよ、うへへ      じゃないじゃない！

俺はブンブンと頭を振つて煩惱を追い払う。

一刻も早くここを出よう。じゃないと俺の理性がなくなりそうだ。別にそれは、スリイナに興味がある、とかじゃないんだからな！ 目の前に、健全な男子の目の前にあんなものがあつたらダメなんだよっ！ もう見るからに柔肌でございましたーっ！ あくまで横からのアングルだったので何も見る事ができなかったのが悔しいよおーっ！

ってああもう！ 思い出しちゃダメえーっ！

ここからはダビデ像でも考えながら行動することにする。

……ああ、冷静になれてきた。ダビデを考えることによって、

萎えに萎えてきたぞ。

そうして、なんとか沈静化に成功したところで、脱出ミッションを開始する。

俺はいま、奥の湯船の前にほく前進の状態で待機している。

一方のスリイナは、俺に近い方の塀の内側で体を洗っている。

つまり、スリイナがいる列の外側をほくで移動すれば、入り口の近くまでは行くことが可能というわけだ。しかし、スリイナの座っている位置が入り口側のため、そこから先に進むのは行くことは不可能。強行突破なんてしようもんなら、全裸と全裸でこんにちはすること請け合いだ。

ということでもず、塀の外側を通って入り口付近まで移動しようと思う。

……風呂場の床を這うっていうのは、あまり気持ちいいもんじゃないな……。

なんてことを考えながらも、俺はなんとか移動完了。

しかし、問題はここからだ。

体を洗い終えたスリイナはどうする？ もちろん立ち上がることだろう。

それが大問題だ。なぜなら、立ち上がられてしまうと塀なんてあってないようなモノへと変貌してしまうからだ。

くそっ！ ヤバイぞ、これはピンチだ……っていうのは冗談だ。

一応乗り切る方法はある。スリイナが湯船に向かって歩き始めるまで、塀にぴったりとくっついていればいいんだ。日本の言葉で言う、灯台デモクラシーって奴だ。身近なことには気づきにくいって意味だよな。

と、スリイナの使用しているシャワーの音が止まった。……よし、決行だ。

いま考えたとおり、俺は塀にぴったりと張りつく。

「っ！」

冷たっ！ 大理石ってことを忘れてたぜ……っ！

危つく声を発しそうになったが、俺はグツとこらえた。

冷たさが体になじんでいく中、ピチャピチャという足音が俺の耳に入る。どうやら灯台デモクラシーは成功のようだ。

さて、ここからはもたもたしてられない。スリイナが湯船に向かって歩いているいまこそが、脱出するための最大のチャンスだ。

俺は扉への張りつきを解除し、クラウチングスタートのような状態になる。

そして、そのまま四つんばいで歩いていく。なんで立ち上がらないのかって言えば、まあ……気分だ！

入り口まであと五メートル。

よし、スリイナも気づいていない。いいぞいいぞ。

この時、俺はスリイナの綺麗な後ろ姿を見ていたが、ダビデ像と相殺しあった結果、普通に見ることができていた。うむ、いい尻だ。あと四メートル。

ここは、ついさっきまでスリイナが体を洗っていた辺りだ。シャンプーの残りに気をつけない　うわーっ！

バチン！　と体を打ちつけた音が浴場中に響き渡った。

俺は玉を強打してしまい、ただただ悶える。

そうしながら思う。

夢、ここに潰える。

俺は入り口の方に向けている顔を、恐る恐るスリイナの方へと向けた。

玉を打ちつけた痛さによって出てきた涙で、俺の視界はほとんど何も見えない。それでも、スリイナがあわあわしていることだけは分かった。

そこで、俺の意識は急激に落ちていく。

これ、ヤバイんじゃないかな　玉が……………。

## 2章 6

「……んあ……」

どうやら、意識が戻ったらしいな。

お、玉が痛くない。俺は安堵に包まれる。

それから、意識を体全体に移動させて、俺は自分が横になっていることに気づく。ベッドがふかふかだから、ここはまだスリイナの家ようだ。

ってことは、そんなに時間は経ってないわけだ。せいぜい夜が更けたぐらいか？

どれ、目を開けるとしますか。

「あ、フィー兄ちゃん起きた！」

リールが起きてる……？　じゃあ朝か？　次の日になっちまったのか？

「……フィー、大丈夫？」

俺と目を合わせないようにしながら、スリイナが聞いてきた。：

「なんで目を合わせてくれないんだよ。あれは俺じゃなくてスリイナが悪い　って、ああ……そうか。あれってスリイナは、俺が風呂に入ってるってことをまったく知らなかったわけだもんな。」

だからスリイナは、俺のことを『覗き』とでも思ってるのかもしれない。

ちゃんと弁解しないと。

でもまず、弁解するよりも先に聞きたいことがある。

「いまはいつだ？」

これが凄く気になる。自分の中の時間は完全に狂ってしまったかな。

「……フィーが倒れてから、一時間くらい経ったかな？」

依然として目を合わせてくれないまま、スリイナが告げた。……

あ、そんなもんなの？

気になることがなくなつてスツキリした俺は、今度こそ弁解を始める。

「あのさ、スリイナ。……俺はあれ、別に覗きをしたわけじゃないんだぞ……？」

「分かつてるよ。あそこはフィーに割り当てられてたお風呂場で、あれは間違つて入つた私が悪いんでしょ？」

えっ、知つてんの？

「じゃ、じゃあなんで目を合わせてくれないのでしょうか？」

「それは、だつて……」

「だつて？」

俺が促すと、スリイナは俺からもつと顔を背けた。なんだなんだ？

「服、着てないから……」

「え？ 誰が？」

「……フィーが」

俺は慌てて自分の体を見やる。

「ちょ！ なんだこれえ！」

俺はどこぞの部族よろしく全裸だった。もちろん、あそこはきちんと隠してあつた。ただし、タオルが乗っかっているだけという、なんとも危険な状態だった。

風呂あがりの俺など珍しくもないリールならば普通の態度でいられるだろう。しかし、スリイナはこんなもの見ていられるわけがない。目を逸らしていたのはこれが原因で間違いないだろう。と考えたところで、俺はふと思う。

確かに、起きている本人の前でなら、こんなもんはまともに見られない。

けれどどうだろう？

裸同然で寝ている美少女が目の前に居たとして、それから目を背けるなんてことができるだろうか？ たぶん、いや絶対にできないよな？

起きてるのなら背けるだろうけど、寝てたらガン見だよな。

俺は、それをいまの状況に当てはめてみる。勘違いして欲しくないのは、俺は別に自分のことを美少年とか言ってるわけじゃないぞ？

裸の女がいれば、例え美少女じゃなくなつて、なんだかんだで見ちゃうだろ？ それと同じさ。

だから、俺はリアルに聞いてみた。

「なあ、俺が気絶してる時、スリイナはどうしてた？」

「フィー兄ちゃんのことをね、じーっと見てたよ」

「ほほ〜う」

俺は下卑た笑顔でスリイナを見る。

スリイナは「見てないよ見てないよ」と言いながらもみるみる赤くなつていく。

ホントにからかいがいのある奴だ。へへへ、もつとからかつてやる。

俺の中のサドの血が目覚め始める。

「そういえばあ、俺って風呂場で倒れたよな？ その時、俺とスリイナは二人きりだったわけだよなあ。お前どうした？」

「す、すぐに人を呼びに行ったよ」

「ほんとか？ お前、俺を仰向けにしたりしてないよな？」

「し、してないよ！」

「ほんとにいい？」

「ほんとだよ！」

俺の目を見据えて言ってくるスリイナ。その目にはうつすら涙が浮かんでいた。

……やれやれ、ここまでだな。

「ごめんごめん、悪かったよ」

言いながら、俺はスリイナの頭をポンポンと二回叩く。

スリイナはそれに対して、「えへへ……」と照れたような、それでいて嬉しそうに笑ってくれた。と同時に、

「ふんっ！」



つまんない！　とでも言うかのように可愛い鳴き声が聞こえたきたので、俺はリールの方を向く。

「リールにも心配かけたな。ごめんごめん」

スリイナにしたこととまったく同じことを、俺はリールにしてやった。

リールもこれだけで「えへへ」と楽しげに笑ってくれて、この場は和やかな雰囲気に着いた。

それはそれで大変よろしい。大変よろしいのだけれど、

「そろそろ服をくれよ……」

ボソツと呟くと、スリイナがスタスタと部屋の外へ駆けていった。一分ほどして戻ってくると、その手に握られていたのは学校の制服

ではなく、執事さんの制服だった。

クリーニングしてくれているらしく、その代わりだそうだ。スリイナは一人っ子だから、男モノの服なんて持っていないだろうしな。

俺は二人をいったん部屋の外へ追い出し、執事さんの制服を着用してみた。

うん、似合わない。とっても似合わないよね。五〇年後も似合わないと思う。

「フィー、まだあ？」

スリイナのおっとりとした呼びかけ。リールの「早く早くう」という催促も聞こえてくる。

……正直あんまり見せたくないけど、二人を呼び戻さないわけにもいかないしな。

「いいぞ……」

告げた瞬間に扉が開き、まず入ってきたリールが、  
「わあー！　フィー兄ちゃんかっこいい！」

だそうだ。リールにそう言われるのは素直に嬉しい。けど、リールの目が節穴になってしまったではないかと、俺は心配してしまう。一方、続けて入ってきたスリイナは、俺をジーツと観察していた。見方によっては呆然とも受け取れる。

ほら見たことか。やつば変なんだよ。きつとリールの言葉は、お世辞なんだろう。

「ねえ、フィー……」

ほら来るぜ……。毎日毎日本物の執事を見続けているお嬢様直々の辛口チエックがな。

「私の専属として雇ってもいいかな？」

なんでやねん。甘口過ぎるやろ。

冗談はそれぐらいにしとけよ、と言葉を返そうと思ったが、スリイナの目は本気だった。俺は言葉を発する前に口を閉ざした。

……一体どういうことだ？ この似合わない格好がスリイナのお眼鏡にかなったのだろうか？ それともこの格好、実はイケてるのだろうか？ 節穴はリールじゃなくて俺なのか？

「ねえフィー、ダメ？」

色々思考していると、スリイナが再度尋ねてくる。……まずはそれに對しての返事をしておくか。

「はつきりいつてダメだ」

「なんで？」

「だってそれってさ、ようはスリイナの面倒を見るってことだろ？」

「簡単に言えばそうだけど……イヤ？ お給料は高くするけど？」

「やだよ、めんどいし」

給料の問題じゃないな。ホントに面倒そうだし、何より幼なじみと主従関係とかちょっと冗談じゃない。……俺はこのままがいいんだ。上も下もない、このままがな。

「め、めんどい……」

スリイナは俺の言葉にショックを受けたらしく、その場にへなへなぐとしゃがみ込んでしまった。

それを見て、ちよつとかわいそうかな……と思った俺は、今日の夜限定でスリイナの執事もどきになってやった。

## 2章 7

「ぐふっ！」

一つ目機体の名前のような奇声を上げて、俺は意識を覚醒させた。ホント、俺は朝、普通には起きれないようだ。

さてさて、今日は一体誰が俺の腹部を圧迫しているんだろうか？ ここんところ、このことを考えるのが朝の初めになることになってきているな。ま、いいんだけどな。そこそこ楽しいから。

どれ、推理の時間だ。

まず、ここはスリイナの家だ。なら、考えられる選択肢は三つだ。

一、普通にリール。

二、スリイナの家なんだからスリイナ。

三、ここでしか会えない迷惑親父。

さあ、どれだろう。

ま、重さから考えてリールの線は消滅だな。この重さだと……スリイナか？ でもスリイナよりも少し重いような気も……よし、スリイナは消そう。

じゃあ親父さん？ いや、疑問符はいらないはずだ。だって、もう親父さんしかないじゃん！

そう結論づけた俺は、静かに肺を膨らませていき

「どけ親父いっ！」

腹部を圧迫されながらも力強く叫んだ。

するとびっくりしたようで、親父さんと思われる人物は俺の上からすぐさま除いた。

さあ、するまでもないけど答え合わせだ。俺は目を開ける。

「……は？」

俺は思わず、意味が分からないときに使う常套句を口にした。

答えがおもいつきり違ったからだ。親父さんでないのはもちろんのこと、リールでもスリイナでもなかった。

じゃあ誰だと思う？

俺は目を開けた時、やられた！　って思った。まさかこんなパターンもあるとはなあって関心した。ま、もったいぶらずに答えを發表します。

答え

「おはようございます、フィーニツト様」

メイドさん、でした。

「こんなお遊びに付き合ってもらってすいません」

他の仕事だってあるだろうにこんなくだらないことにつき合ってくれたメイドさんに対して、俺はお詫びを申し上げた。

「いえいえ、謝らないでください。楽しかったですよ」

どんな人にも不快感を与えないだろう完璧な笑みを浮かべながら、メイドさんは丁寧言葉紡いでくれた。

「ホントにそうですか？」

「はい、とても。童心を思い出しました」

「でも、メイドさんの童心って最近ことですよね？」

まだ確実に若い人だ。俺たちの何個か上ぐらいにしか見えない。

「まあ、お上手ですね」

「いや、それほどでも……」

後頭部を掻き掻きする俺を見て、メイドさんはクスツと笑った。

「それでは仕事がありますので、私はこれで」

そう言ったのち、メイドさんは部屋を出て行った。すると入れ違うように、リールとスリイナと親父さんが部屋へと入ってきた。

「まったくなんなんだフィーニツト君は？　うちのメイドにまで手を出して。スリイナとリールちゃんは大切じゃないのかい？」

「何言ってるんですか……。仕組んだのは三人でしょ？」

「ちえ、バレてた……」

リールが悔しそうにしていた。でもねえ、さすがにこれはねえ？　「まあまあリールちゃん、悔しがらないで。スリイナ、リールちゃんを朝食の席まで連れてってあげなさい。食べれば悔しさなんてな

くなるさ」

親父さんの言葉に、リールは「朝食食べるー！」と悔しさはどこへやら。ほんと色気より食い気だな。ま、そこがいいんだが。あれなら当分、彼氏とかの心配はいらないだろうからな。

リールは上機嫌になったご様子で、スリイナに連れられていった。どれどれ、俺も朝食を食べに行こう。そう思いながらベッドから降りて立ち上がると、

「ホントに……スリイナと結婚しないのかい？」

親父さんがいささか真剣に訊ねてきた。けど、真剣だからって返事は変わらない。

またか……と思いながら、俺は返答する。

「しません。大体なんで俺なんですか？」

昨日から気になっていたことをぶつけてみた。さて、どんな返事が返ってくるだろうか。

親父さんは散々「うーん……」と唸ったのち、

「そうだね……生き様が気に入ったから、かな。それにスリイナは君のこと……いやなんでもない。……これは本人が言わないとね」

なんだ？ 最後がごによごによとしてて聞こえなかったぞ。

ま、いいか。親父さんの理由は聞けたんだし。

でも、俺の生き様って……。

父さんと母さんが死んで、妹を養うために殺しに手を……。いや、親父さんがこのことを知ってるわけがない。てか、知ってたら娘をやるうなんて考えるわけがない。通報してるはずだ。

俺は表向きには、何でも屋を営んで必死に頑張ってる少年で通ってる。

ま、こっちの生き様になら……そんな健気な少年にだったら、娘をやるうつて考えるかもしれないな。

……でもな親父さん。俺は全然健気なんかじゃないんだ。

ただの人殺しなんだ。

## 2章 8

朝食を食べ終わったあと、気がつく俺たちは昼近くまで雑談してしまっていた。

なんて現代っ子らしくない過ごし方なんだ。俺たちは別にゲームをするわけでもなく、ただただしゃべっていた。

俺たちは、保育園に子供を送っていった際にたまたま仲のいい母親と出会ってしまったそのままファミレスとかに寄って昼近くまでついしゃべってしまった主婦か！

あらあらもうこんな時間〜。

この台詞を現実を使うタイミングが来るとは思わなかったぜ。てなわけで、

「あらあらもうこんな時間〜」

気持ちワル！　せめて自分風にアレンジすればよかった！

しかし、リールもスリイナもその気持ち悪さよりも、自分たちがこんなに話していたことに対する驚きの方が強いようだ。

なので、俺の台詞には誰も突っ込みを入れなかった。ふう、助かった。

「じゃ、スリイナ。俺ら帰るわ」

「え？　お昼食べていかないの？」

「ああ、いらん。いま思い出したんだけど、消費期限が迫ってきてる奴があつた気がするんだ。捨てるのもつたないしな。それを昼飯にしようと思う」

確かひき肉だった気がする。野菜と一緒に炒めようかな……。

「そっか。確かに無駄にするのはちょっとね。それにそういうのって、全部ファイが働いて得たお金で買ってるんだよね？」

「当たり前だろ」

他に誰がいるか？　もしそんな慈悲深い方がおられたのなら、俺は人殺しにはなっていなかっただろうよ。

「じゃあそれを無駄にしないためにも帰った方がいいかもね」

「そうだ。だから今日は帰るよ。またなスリイナ」

「うん。またね」

こうして、俺とリールはスリイナの家をあとにした。

スリイナの家から俺の家までは、ほんの一〇〇メートル程度。

徒歩にして一分から二分。

もう我が家に到着。

俺は家に入る前に、今日の依頼を確認するためにボックスの中身を確かめる。　お、結構入ってんな。

俺はガサゴソと、それこそホントにくじ引きを引くかのように依頼の書かれた用紙を中から取り出していく。……えーと何々、ボール取り。……あいつら、野球できないとか言ってたけど結局やったんだな。そんで毎度の如く、あの家にボールを入れたわけだ。ま、気が向いたら取ってやるよ。

……次は、えーと、蜂の巣駆除。　うわ来た！　父さんが一番イヤだって言ってた仕事だ！　俺って初めてだけど大丈夫なのかな？　……いや、でもあれだ、結局はなんでも初めてから始まるわけだからな。殺しだつてそうだった。これを礎にしないとな。

んで、次はーつと……宛名のない茶封筒？　なんだこれ？

俺は接着部分をビリリと破り、中を覗き見る。

三つ折りになった普通の便箋が入っていたので、俺は取り出し広げて読んでみて

「……………」

ただただ絶句した。

手紙の内容を紹介したいと思う。

敬愛なるフィーニット・ストルス様へ

あなたのご活躍はお聞きしていますよ。なんでも、いままでに殺した人数は一七人だぞ

うで。いやはや、その若さでそれだけの人を殺しているのというのは大した精神力だ。

私には人を殺す度胸なんてものはないですからね。感服しますよ。そして、こうしてお手紙を書かせてもらった理由は、その度胸を私のために使っていただきたいからです。

つまりは殺しの依頼をしたいのです。

その実力をぜひともお借りしたい。

早速ですが、このあとにお書きする人物を殺していただきたい。

スリイナ・フォシルニクス

報酬などに関しましては、ターゲットを殺したことを確認したのち、改めてこちらより連絡させていただきます。

俺の頭はひたすらに真っ白だった。



## 2章 9

敬愛なるフィーニット・ストルス様へ

あなたのご活躍はお聞きしていますよ。なんでも、いままでに殺した人数は一七人だそ

うで。いやはや、その若さでそれだけの人を殺しているのというのは大した精神力だ。

私には人を殺す度胸なんてものはないですからね。感服しますよ。そして、こうしてお手紙を書かせてもらった理由は、その度胸を私のために使っていただきたいからです。

つまりは殺しの依頼をしたいのです。

その実力をぜひともお借りしたい。

早速ですが、このあとにお書きする人物を殺していただきたい。

スリイナ・フォシルニクス

報酬などに関しましては、ターゲットを殺したことを確認したのち、改めてこちらより連絡させていただきます。

そんな内容の手紙を見て絶句していた俺は、考える。

どういうことだ……？ スリイナを殺せ？ は？ なんでそんなことを……。てか、なんだこいつは……。俺は殺しの依頼を仲介人から紹介してもらってるんだぞ。なのになんでここの住所がバレてる？ 住所だけじゃない。名前も、殺した人数まで。しかもスリイナがターゲットってなんだよ！ 報酬は殺したあとに連絡？ ふざけんな！ 普通、殺す前に話し合うだろうが！ なんだこの手紙は！ 無視だ！ 連絡先もないなんてふざけすぎだ！

そうか、これはイタズラだ。

それなら合点がい　かないか……。なんでイタズラなのにこんな詳しい情報知ってんだよって話だな。

……じゃあホントなのか……。？　スリイナを殺すのも？　全部？　ホント？　いやホントなわけがない。無視だ無視。でも、無視したらどうなるんだ？　この手紙の主に通報されるかもしれない。したらリールとはお別れ……。いや、でも……。無視だ。いやでも……。ダメだ……。一回考えんのやめよ……。頭いてえ。

いまのいままで一緒だった奴のことを殺せとかいわれても、そんなの無理に決まってる。

俺はそんなに強くない。

ゾンビのような遅い足取りで、俺は家へ入った。

「フイー兄ちゃん、大丈夫……」

俺はそれほど顔色が悪かったのか、リールが心配そうな表情で近寄ってきた。

ダメだ。リールを心配させるようじゃダメだ。俺は表情を無理やり笑顔に変えて、

「大丈夫だから心配すんな。待ってる。いまメシ作るからな」

けど、その笑顔があまりに無理やりすぎたのか、リールはかえって心配そうになり、

「……フイー兄ちゃんは寝てて。私、自分でできることは自分でするから」

「でも……」

俺は言葉を発しようとしたが、「いいからいいから」とリールに遮られる。おまけに力いっぱい背中を押され、俺は部屋まで強制連行された。

「寝てないとダメだからね」

リールは俺をベッドに押し倒したのち、部屋から出て行った。

ああ……。これはちよっと、ホントにヤバイのかもな、俺。だって、リールを見てもまったく癒されなかったんだ。そんなの俺じゃない。

なんだこの脱力感。いつもは依頼を頼まれたりしてもこんな風にはならない。むしろやる気があったりするぐらいだ。

……思うに、名前がバレてる、住所もバレてる、殺した人数まで知られてる……そして　ターゲットがスリイナ。

これらの要因にだいぶこたえたんだろうな、俺。

けど、なんかだいぶ客観的に見れるようになってきたんじゃないか？　俺。

よし、だったらもう少し考えてみよう。

連絡先がないのはどうということだ？　やっぱり単純に知られたくないからか。

それに報酬の話し合いが後日つてのはどういづつもりだ？　まだ金がないのか。だったら依頼してくんなくて話だ。そんな報酬の折り目もつけられない奴に構ってる暇はないんだ。

依頼の仕方が下手くそっていうか、意味が分からん。

……もしかして俺を脅してるのか？　スリイナを殺したくなくればいうこと聞け！　みたいな？　いや、でもだったらこんなことしなくても十分だよな。住所まで分かってて、おまけに殺し屋やつてゐるってことも分かってるんなら、通報するぞ、とか言って俺を直接脅せばいい。脅す材料が大量にあるんだから、わざわざスリイナを巻き込む意味はない。

……ってことは、どういうこと？　ああ分からん！　目的が分からん！　分からんっていうより、考えられる目的の数が多すぎて見当がつけられん！　ああ、どうすればいい？　ああっ！　さっきからこればかりだな俺は！　でもしょうがないよな。どうすればいい、って言いたいもんは言いたいんだ。

……ああ、どうすればいい？

いっそのこと無視するつてのはどうだろう？　そうすればあつちからもう一回ぐらい接触があるかもしれない。

うん、そうだ、そうしよう！　おお、なんかそう考えたら急に気が楽になってきたな！　よし起きるか！

リールに復活をアピールしないとな。

超短時間で復活を果たした俺は、階段をドタバタと駆け下りてリビングへ向かう。

「よっ！ もう大丈夫だ！」

俺は、さっきの俺より一〇〇倍は生気があると思う表情で声を発した。

「あ、ほんとだ！ いつものフィー兄ちゃんだ！ よかったあ！」  
リールの顔を見て、さらに元気が出てきた。

あんなことを忘れるためにはメシだメシ！ メシを作るぞ！  
そうして張り切って作ったひき肉と野菜の炒め物は、大変に美味であつた。

## 2章 10

昼食ののち、時間は少し進んで夕暮れ。

素晴らしい色合いの空の下、俺はただただ謝っていた。

「ほんとすいませんでした！」

俺は頭を下げまくる。

「なんと言えれば分かるんだ！　ここで野球するなって言っておるだろ！」

浴衣という日本の衣服を着ているハゲ散らかしたおじさんが怒鳴ってくる。近所のガキどものあいだでは、サンダーさんというあだ名で呼ばれている。

「すいませんすいません！」

とにかく謝るしかない。だって何でも屋だもの。いまは謝り倒すのが仕事だもの。それに今日の仕事はこれで終わりだし。グツと我慢だ。

はあ、今日やったことといえば、まず蜂の巣駆除。大変だったんだぞ。もうブンブンブン出てきやがってさ。あの真っ白な防御スーツなかったら死んでたね。だって、相手の蜂っていうのがスズメバチだったんだぞ？　傑作だろ？　ま、最後は殺虫剤っていう聖なる力でそいつらを皆殺しにしたんだけどな。巣の入り口にスプレーを当てて、こう、プシューってね！

「おい！　人の話を聞いておるのか！」

「ちゃんと聞いてました！　蜂のこと考えててすいません！」

「どっちだ！　いまワシがなんて言っていたかを言ってみろ！」

マジっすか？　やべえよ。なんて言ってたんだ？　えーと……

「今年のメジャーは熱いよなあ！　ですか？」

「なんで野球するなって怒ってる時にメジャーの話が出てくるんじやボケエエエ！」

「すいませんすいません！」

違ったようだ。

このあと、俺はこの間違いのせいで『人の話というものはだな！』という題名のお説教を一时间近く食らうハメになった。

しかも、結局ボール返してくれなかったし。

だから俺は、サンダーさんの家の隣の空き地で二時間近く待つていたガキどもにも謝るハメになって、今日は最悪な形での仕事終了ということになった。

ちなみにだが、今日は殺しの仕事はない。そんな毎度毎度殺して  
るわけじゃない。あの忌々しい手紙にもあつたが、俺は殺し屋の仕  
事を始めてから一七人しか殺してない。

いや、『しか』じゃないな。『も』だな。普通の人は一入だつて  
殺さないもんな。

で、話を戻すけど、俺は一七人も殺してるわけだ。でも、この一  
七人を一七日連続で殺すとか、そんな無茶をしてるわけじゃない。

この前がたまたま二日連続だっただけだ。俺も二日連続とか初め  
てだったし。

俺が殺しを始めたのが九ヶ月近く前。多くても月に二人程度なん  
だ。

だから今月はもう、殺しの依頼なんてないはずだ。

あの手紙が……イタズラならな。

あーあ、あの手紙のこと考えないようにって一生懸命仕事してた  
けど、結局こうやって思い出しちまう。

でも俺は、とりあえず無視するって決めた。何かしらのコンタク  
トがあつたりすれば話は変わるかもしれないが、いまはもう徹底的  
に無視だ。

そんなこと考えながら歩いてると、もう家だ。

ここから先に入るんなら、この考えは完璧に忘れないとな。リー  
ルには悟られちゃダメだ。不安を覚えさせたり、心配をかけちゃダ  
メなんだ。

昼に見た、あの悲しそうなリールの顔に、もうさせちゃダメなん

だ。

「……………よしっ」

もう忘れた。考えない。俺は玄関のドアに手をかけて、ガチャッと開けた。

するとバタバタと音を立てて、可愛い可愛いお出迎えがやってきた。

「フィー兄ちゃんおかえりっ!」

「ただいま。いい子にしてたか?」

俺はサラサラヘアーの頭をなでてやる。

「そんな子供じゃないもん!」

口ではそう言うものの、実際は猫のようにじゃれてくるリール。とてつもない癒しをくれる。そして、俺はその癒しを感じることができている。

どうやらちゃんと忘れられているようだ。昼間と違うのは確実だ。「……………よし、じゃあメシにすっか。すぐ作るからな」

なでるのを中断して、俺はリビングへ向かう。……………中断した時のリールの顔、可愛かったなあ。

さて、何を作ろうか? 確か野菜がまだ余ってたよな……………また炒め物か? いやそれはないなあ……………。

「ねえ! フィー兄ちゃん!」

献立を必死に思案していると、リールがいいことを思いついたと言わんばかりの表情を浮かべて声を張り上げた。

「なんだ? リクエストがあるんならなんでも言ってみろ」

「あのね、別に時間がかつてもいいから……………久しぶりにフィー兄ちゃんが作るシチュー、食べたいな」

「シチューか……………」

俺の作れる料理の中で、一番高い完成度を誇るのがシチューだ。リールの口ぶりから察するに、味が恋しくなってきた、といったところだろうか。

時間がかかるから敬遠しがちだけど、リールがそう言うなら否定

する道理はないってもんだ。野菜も一気になくなるしな。

「分かった。じゃあシチューにしよう」

そうして約三時間かけて作ったシチューは、普通に美味かった。リールも美味しいと言ってくれたし、作ったかいがあつたってもんだ。

さてさて、ちょっと早いけど、もう寝ようかな……。

今日はちよつと疲れた。思い出したくないからちよつとしか触れないけど、あの手紙のせいだ。どう考えてもあれしかない。

くっ、内容が頭に思い浮かんでくる。

……じゃ、そういうことで俺は夢の中に逃避させてもらう。

平和な日常を願いながらな。



### 3章 1

あの手紙が来てから今日で八日目。

手紙のことについて何かあったかと聞かれると、なかったと答えられる。

そう、俺たちは無事に一週間以上過ごすことができているんだ。今日だってもう放課後。これから何か起こるとは思えない。

やっぱりいたずらだったんだよ、あんな手紙。

そう思いながら、俺はスリイナと一緒に、いつものように校門でリールを待っている。

当たり前すぎて、言わなくても分かっていると思うけど、俺はスリイナに手紙を見せてないし、そのことを言ってもいない。

自分が狙われてるなんてことを知ったら、例え冗談でもショックを受けるだろうしな。

それに、あの手紙には一応真実も含まれてるわけだし。俺が何人殺したとかってさ。自分のことを知られないために、俺はあの手紙を誰にも見せちゃいないし、教えてもない。ギターケースと一緒に場所に隠してあるよ。

ほんとは切り刻んで捨ててしまえばいいのかもしれないけど、何となく持つてることにした。

と、戯言はここまでだ。

リールが来たからな。俺は大きく手を振る。

そんな俺に気づいたらしいリールも、大きく手を振り返してくれる。いいね、平和だ。

「フイー兄ちゃん、ただいまーっ！」

「おかえり、リール。今日はどうだった？」

『今日はどうだった？』という、話題を一番簡単に生み出すことができる言葉を使い、俺は場を盛り上げていこうと頑張ってみる。

「えっとね、今日は普通だったよーっ！」

わー、広げられない。

……しかし、そこをどうにかしてこそ、話し上手への道は拓かれるのだ。

「普通っていつても何かはあっただろ？ 例えば……ほら！ ハンプティはどうなった？ 大流行してたんだろ？」

「ハンプティ？ そんなのもう古いよ。フィー兄ちゃん遅れてるね！」

何！ ハンプティはもう古いのか！ くそお！ 俺が授業中に暇だからって練習してたあの時間はなんだったんだあ！ せつかくスピードはともかくリアルに書けるようになったっていうのに！

だが、この怒りをリールにぶつけるのは間違ってる。間違い過ぎている。

ああ……子供の流行は進むのが早いなあ……。

「じゃあ、いまは一体何が流行ってるんだ？」

「いまはね、スカートめくりが流行ってるんだよ」

「は？」

ちよっと何言ってるか分かんないですけど？

「スカートめくりはスカートめくりだよ。私もめくられっちゃった」

「……………」

「ちよっとフィー！ 黙ってリターンしないで！」

「放せスリイナ！ 男には、いや、兄にはやらなきゃいけない時があるんだ！」

妹のパンツを見られて、これが兄として黙っていられるかってんだ！ 初等部の野郎どもオ……どうしてくれようかア。そうだなあ

……まず閃光手榴弾で視界を奪ってから……。

と大量虐殺犯になろうとしている俺の気持ちを讀んだのか、リールは、

「フィー兄ちゃん。女の子同士でだよ」

そう言ってきた。……ふむ、女の子同士でか……いやしかしなあ、男の俺はそれに納得できない。俺はきびすを返して言葉を発する。

「いや、でもなリール。男というものは、そうやって女子がじゃれてるところをこう、チラッと見ているものなんだ。だからきつと、お前のパンツは誰かしらに目撃されていると俺は思うぞ」

「だよな？ 女子のじゃれあいつて目に入るよな？」

「え？ そうなの？」

「はい……残念ですが……」

俺は、病気の進行状況が末期であると通告する医者のように言った。

「……そつかあ。じゃあまた新しい流行考えなきゃ。恥ずかしいもんね」

リールはあごに手を当てて、んーんーと唸り始めた。

「なんかその言い方だと、リールが全部流行らせてるみたいに聞けるな」

「ん？ そうだよ。ハンプティもスカートめくりも、全部私が流行らせたんだよ」

「な……っ！」

こ、こっちが話題の展開にすら苦労しているというのに、リールには流行を発信させるほどの力があるだとお！

嫉妬心が湧き上がってくるな。……でも、ここは素直にリールの情報操作能力を褒めるべきか？

……うん、褒めるべきだ。

「リールは凄いなあ！ ……ところで、スカートめくりはどうやって流行らせたんだ？」

男としては興味がある。

「えっとね、遊びで友達のスカートを私がめくってたら、それが勝手に流行っていったんだよ」

なるほど。タネは分かんがそれで流行るのか。どれどれ

「白か！」

スリイナのスカートをめくってみた。いやあ、パンツ見るのって、いと思うと凄い簡単だよな。

「ちょ、ちょっとフイー！ なな、何してるの……っ！」

「いや、スカートめくりがこれで流行るら」

「ちよっと君、指導室行こうか？」

突如、俺は後ろから両肩をがっちりと掴まれた。……え？

いまどきのロボットよりもカクカクした動作で振り返ると　　そ

こには怖いと評判の生活指導の女教師がいた。

「え、あ、ちよっといまのは違うんで」

「何が違うか！ 見たぞ！ 君がスカートをめくるところを！ さあ来なさい！」

俺は両肩に激痛を覚えながら引きずられる。

「す、スリイナ！ リール！ 助けてえーっ！」

そう叫ぶが、スリイナはスカートを押さえながら涙目。俺を助ける気はなさそうだ。

リールに至っては……俺を見て笑っていた。

俺は抵抗する力すらなくなり、生活指導の女史の毒牙にかかることとなる。

### 3章 2

…… ああ、酷い目にあつた。

少しばかり、生活指導室で行われたことを暴露したいと思う。

まず、俺は着ていた制服を着替えさせられた。ズボンをスカートの、だ。

そんで、あとはただひたすらに生活指導の女史が『どうだ？ スカートをめくられるのはイヤだろう！』と言いながら俺のスカートをめくつてくるという新手のSMプレイ。

それを二時間。

これって訴えたら勝てるかな？ 勝てるよね？ 確実に勝訴だよ  
ね？

…… でもさ、ちょっと楽しかったんだ。だから訴えはしない。

街灯の灯りと月のみが照らす薄暗い道を歩きながら、俺は何かに目覚めたことを確信した。

それより、今日は仕事ができなかったな。

まあ、そんなに影響はないだろうけどさ。一応、そう思うだけの自信が俺にはある。

だって、自慢じゃないが、俺っていつもめちゃくちゃ頑張ってるんだぞ？ あっちに行つてこっちに行つて、もう色々奔走してさあ。

だから、近所での評判はかなりよくなってるんだ。 ほら、それを証拠にスリイナの親父さんが、俺にスリイナを嫁にうんぬんって言つてただろ？ 生き様が気に入ったとかなんとかってさ。

今日できなかった仕事は明日にでも回せばいい。今日どうしてもやって欲しかった用事に関しても、謝ればきっと許してくれると思う。

そのくらいの評価には、なつてると思う。

表の俺はな。

とかなんとか考えてるうちに家に到着。

さて、ボックスの中身を取り出しておかないとな。お、今日もまた結構入っ…………マジかよ…………。

俺は不安と絶望に襲われた。

なんでは察してくれていると思うが…………あれが…………あの手紙がまた来てたんだよ。

宛名のない茶封筒がな。

のどに詰まるんじゃないかと思うほどの量のつばを飲み込み、それから俺は接着部分を破った。中を覗くと、また三つ折りの便箋が入っていた。

俺は取り出して広げ、仕事場の電気もつけずに月明かりを頼って

黙読。

…………内容はこうだった。

敬愛なるフィーニット・ストルス様へ

あれからだいぶ経ちましたが、いっこうにターゲットを殺そうとしてくれない。

これはどういことでしょうか？

まさか、友達だから殺せないとか、そんな生温いことを思っているわけじゃないでしょうね？ そんなことは認めませんよ？

なぜならあなたは、人を殺した。それも大勢。

それがどういことか分かっていますか？ 分かりませんか？

いや、分かっていますよね？

人を殺すということ、それは、誰かの大切な人を奪うということです。

あなたが殺してきた人たちにだって家族はいます。友人もいたでしょう。恋人もいたかもしれせん。

それなのに、あなたは自分の大切な知人がターゲットになった途

端、人殺しをやめてしまうのですか？

それはおかしな話でしょう？

まったく筋が通っていません。自分を柵に上げ過ぎです。

残念ながら、あなたの踏み入れた世界はそんなに優しいものではありません。

仮にこの依頼を受け入れてくれないというのならば、別にそれでも構いません。

けれどその場合、私は別の殺し屋にスリイナ・フォシルニクスを仕留めさせます。

それと、ここで勘違いしないでいただきたいことがあります。もしかするとあなたは、この依頼を、自分に対する嫌がらせ、という風に捉えてはいませんか？ もしそう思っている場合、それは完全な間違い、あなたの勘違いです。スリイナ・フォシルニクスを殺すことには、きちんとした意味があります。きちんとした目的があるのでことです。

ですので、こちらとしても早く動いてもらいたい。

もしかしたら連絡が取れないことに不安を覚えていたのではないかと思いますので、今回は連絡先を載せておきました。分からないことがあればご連絡ください。

x x x   x x x x   x x x x

「ちっ……」

気付けば、俺は忌々しげに舌打ちをしていた。

### 3章 3

敬愛なるフィーニット・ストルス様へ

あれからだいぶ経ちましたが、いっこうにターゲットを殺そうとしてくれない。

どういうことでしょうか？

まさか、友達だから殺せないとか、そんな生温いことを思っているわけじゃないでしょうね？ そんなことは認めませんよ？

なぜならあなたは、人を殺した。それも大勢。

それはどういうことですか？

分かりませんか？ いえ、分かりますよね？

人を殺す。それは、誰かの大切な人を奪ったということです。

あなたが殺してきた人たちにだって家族はいます。友人もいたでしょう。恋人もいたかもしれません。

それなのに、あなたは自分の大切な知人がターゲットになった途端、人殺しをやめてしまうのですか？

それはおかしい話でしょう？

まったく筋が通っていません。自分を柵に上げ過ぎです。残念ながら、あなたの踏み入れた世界はそんなに優しいものではありません。

仮にこの依頼を受け入れてくれないというのならば、別にそれでも構いません。

けれどその場合、私は別の者にターゲットを仕留めさせます。

それと、ここで勘違いしないでいただきたいことがあります。もしかするとあなたは、この依頼を自分に対する嫌がらせと捉えてはいませんか？ もしそう思っている場合、それは完全な間違い、あなたの勘違いです。

スリイナ・フォシルニクスを殺すことには意味があります。きちんとした目的あつてのことです。



です、こちらとしても早く動いてもらいたい。  
もしかしたら連絡が取れないことに不安を覚えていたのではないか  
と思いましたので、今回は連絡先を載せておきました。  
分からないことがあればご連絡ください。

x x x   x x x x   x x x x

「ちっ……」

気付けば、俺は忌々しげに舌打ちをしていた。  
内容から察するに、この依頼は、どうやら本物らしい……。  
俺もスリイナも相当調べ上げられてるな……。友人関係とかまで  
知られてるんだからな。

くそっ……。しかも中身が正論過ぎて反吐が出るな。  
人を殺す。誰かの大切な人を奪う？  
まったくもってその通りだ。

そして俺は、前々からそれを理解していた。  
俺は理解した上で、人を殺していた。  
ターゲットだって誰かにとっては大切な人なんだと、それを承知  
した上で、俺は人を殺していたんだ。

……。そんなの知るかっ感じてな。  
でも俺は、その感情をスリイナに向けられるだろうか？  
『幼なじみ？ そんなの知るか！』って感じにスリイナを殺せるだ  
ろうか？

はっきり言っ、無理だと思う。  
だって、スリイナは俺の大切な……。何かだから。  
手紙に書いてある『自分を棚に上げ過ぎ』っていうのは、そーい  
うことだろう。

散々人を刺し殺して撃ち殺してきたくせに、俺はスリイナがター

ゲットになった途端、迷い始める。

……くそっ！　なんでスリイナを狙うんだよ……。

確かにスリイナはお嬢様だし、狙われる理由としては……まあ、それで十分？　なのかもしれない。

そっい、手紙には『きちんとした目的がある』って書いてあったけど、一体どんな目的なんだよ。

……あ、そうだ、連絡してみよう。その目的って奴がなんなのかわかるために。あと、どんな奴が依頼相手なのかも知っておきたいしな。

よし、一度連絡するぞ。

俺は『ストルス雑務店』のカウンターの引き出しからボイスチェンジャーを取り出す。携帯に取りつけ、手紙に載っている番号に電話をかける。

呼び出し音が数回鳴り、プツツと音がしたあとに、

『はい、もしもし』

ボイスチェンジャーで変えられた、不快極まりない声が俺の耳に入ってきた。

「……アンタが依頼人か？」

こちらも低く変えた声で応対する。

『おや、もしかしてフィーニット・ストルスかい？』

愉快そうな口調。依頼人特有の上から目線な感じがにじみ出ていてホントに不愉快だ。

「……そうだ」

『これはこれは。話せてとても嬉しいよ』

「そりやどうも」

『それで用件はなんだろう？　こちらは忙しいんだけど』

「じゃあさつさと言ってやるよ！　なんでスリイナを狙うんだ！」

『……そんなことか。でもおかしいな？　この番号にかけてくるってことは、君、手紙読んだんだよね？　理由ならそれに」

「あんなもんで納得できるか！　なんだ目的って！　言ってみろ！」

『目的を聞いて君はどうする?』

電話の主は即答してきて、

「そ、それは……」

俺は言葉が詰まった。……確かに、俺はそれを聞いてどうするつもりなんだ……?

『あははははっ、理由も考えてないのかい? じゃあ逆に訊ねよう! 君は納得した理由を言えば、それで迷いなく、スリイナ・フォシルニクスを殺してくれるのかい?』

「それは……」

『イヤかい? それでも構わないよ別に。でも、スリイナ・フォシルニクスは必ず死ぬよ。手紙呼んだんだよね? なら分かってるはずだ。私は新たな殺し屋を雇う。ただそれだけさ』

そうだ……俺が拒否しても意味はないんだ。スリイナは俺に代わる新たな殺し屋に、どのみち殺される。

……だったら、俺が殺すか? どうせ殺されるのなら、俺が……。  
『んー、黙ってちゃよく分からないな。それとも、もう交渉決裂つてことでいいのかな? じゃあ新しい殺し屋に依頼することにするよ。じゃ、切』

「待てっ! 一つだけ聞かせろ!」

『ん、なんだい?』

「その、スリイナを殺す計画は……もう、止められないのか? 変えられないのか?」

『残念ながら無理。私の計画は、彼女を殺すことで円滑に進んでいくように組まれている。その変更はいまさらできないよ』

……じゃ、じゃあ、どう足掻いてもスリイナは……。

「ほ、ホントに……ホントに無理なのか!」

『しつこいよ。無理ったら無理だ。もういい? 決裂つてことで切るよ?』

「ま、待て! 分かった!」

『ん?』



そういやそうだな。

ま、間違っていないことを証明するための話でも聞いてくれよ。これが例えば、まったく人なんか殺したことありませんって奴への依頼なら、警察に相談すべきだ。いや、そもそも殺し屋でもない奴にこんな依頼は来ない。つまり、この依頼は俺が殺し屋だからこそ来た。そうだろう？

ああ。

で、考えてもみる。俺はもう一七人も殺してるんだ。なら、これから何人殺そうとそんなに変わらないだろ？

ああ。

なら、どうせ殺される奴を、どうせ殺されるらしい自分の友達を　どうせ殺されるらしいスリイナを、俺の手で殺す。これは俺のみに与えられた特権だとは思わないか？　俺が殺し屋だからこそ、この依頼が舞い込んだ！　そして殺し屋だからこそ、何人も人を殺しているからこそ、いまさら何人殺したかなんて気にする必要はない！　さらにはどのみち殺されるというオプショントつき。だからためらいも、いつもよりは少なくて済むんじゃないか？

そうかもな……。

かも、じゃない。そうなんだよ。友達の最期を見とれるんだ。いい仕事だろ？　他人に殺されたのなら納得できなくても、これなら自分の望む殺し方ができる。あいつを、スリイナを楽に死なせてやろうぜ。他の殺し屋なら銃や刃物で殺すかもしれない。けど、俺たちなら友達だからギリギリまで近づけるだろ？　飲み物に睡眠薬でも大量に入れて飲ませてやれ。そして首を絞める。そうすれば痛みも何も感じないさ。ほら、間違っていない。苦しんで死ぬはずの友を楽に殺してやる。これほど立派な理由はないぜ？

……そう、だな。

なんだ？　まだ迷ってるのか？　いい加減決めろよ。どうせ殺されるんだっていつてるだろ？　いいのか？　他の奴に残忍な殺され方されても？

ダメだ……俺が楽に……。

だろ？ だったらもう迷うな。殺すんだ。スリイナを。  
ああ……。

楽な方法で。苦しみのない方法で。何より、俺の手でな。  
ああ、そうだな……。

どうだ？ だいぶ気は楽になったか？

ああ、だいぶな。

じゃ、まず家に入ろうぜ。リールを安心させてやらないとな。  
だな。外は結構暗かったんだもんな。

俺は携帯からボイスチェンジャーを外し、それから家に入る。

「ただいま」

呟いてリビングへ向かう。

すると、リールは机に突っ伏して寝ていた。

寝ているのを起こすのはかわいそうだが、腹も減ってるだろうし、

俺は起こすことに。

「リール、リール、帰ったぞ」

俺はリールの肩に手を置いて、体を揺すってやった。

「あ……フィー兄ちゃん。おかえり……」

目をごしごしとこすりながら、リールが口を開いた。

「ただいま。すぐ夕食作るからな」

「……うん」

その後、俺は夕食作りを開始した。脳のほとんどを、どうやって  
スリイナを殺そうかと考えることに使いながら。

そのため、夕食は凄く適当に作ったのだが、なぜかそれなりに美  
味しかった。

ただ、一口目以外は味を感じなかった気がしたけど。

### 3章 4

夕食後。自分の部屋に戻った俺は、夕食を作っている時に考えていた、スリイナの殺し方を反芻し始める。

睡眠薬で眠らせて、首を絞める。

電話のあとにもこのアイデアが出たけど、やっぱりこれが一番楽に死なせられる方法だと俺は思う。だから、殺し方に関してはこれでいいだろう。

問題は、いつどこで殺すか、だ。

電話の主は今日か明日に殺せと言っていた。時間に直せばあと三〇時間もない。

……殺すなら朝よりも昼よりも、やっぱり夜だ。じゃあいまから殺しに行くか？ でもどうやって？ どうやってスリイナの家に入る？ いや、入るのは簡単だ。きっと表から行けば普通に入れてくれるだろう。

けど、それじゃダメだ。そのあとにスリイナが死んでいたら、俺が真っ先に犯人候補に挙がってしまう。だから、決して誰にも気づかれずに、スリイナの部屋に侵入する必要がある。

……でもそんなこと、できるのか？ スリイナの家には警備が居るんだぞ？ 隙をつくことなんてできるのか？

……たぶん無理だろうな。俺は忍者でもなければスパイでもない。凄い身体能力なんてありやしない。こっそり侵入なんてできるはずがない。じゃあどうする……？

……いや、そこまで悩む必要もないな。だって、俺は普通の殺し屋にはできない方法を実行することができないじゃないか。

スリイナに協力してもらった。ターゲットに手伝ってもらおうなんて発想、思いついたとしても普通はできない。でも、俺にはできる。何も知らないスリイナを利用することが、俺にはできる。

スリイナに警備を薄くできないかとか、もしくは誰にも気づかれ

ないように入れてくれないかとか、そうやって頼んでみればいいんだ。

そうと決まれば電話電話つと。

俺は携帯を取り出し、スリイナの番号にかけようとして 手を止めた。

……何やってんだ、俺。……ホントにそれでいいのか？ スリイナが死んで、ホントにそれでいいのか？ いや、いいわけない、いいわけがない。……でも、足掻いても意味がない。どうせスリイナは殺されるんだ。だったら俺が殺そう。そう決めただろ。だから、これでいいんだ。もう、何も余計ことは考えるな。殺す、殺すんだ。殺し屋としての仕事を全うするために。そして、スリイナを楽に死なせてやるために。

他の奴の手にかかる前に俺が、俺が楽に殺してやるんだ……。

俺は手の動きを再開させる。耳に携帯を当てれば、呼び出し音が聞こえた。……呼び出し音って、こんなに寂しい音だったか？

そう思っていると、プツツと音がして、

『もしもし、フィー』

いつものおっとりしたスリイナの声が聞こえてきた。

それを聞いて、なぜか俺は泣きそうになった。……ダメだダメだ、平静を装うんだ。

「よ、よお、スリイナ……。いま、大丈夫か？」

『大丈夫だよ。それでフィー、どうしたの？ フィーから電話してくるっていうのも珍しいよね』

楽しげに紡がれる言葉を聞くと、やはり顔の筋肉がぴくぴくと震えてくる。きつといま声を出せば、情けなく震えると思う。

「……」

だから言葉を発することができない。それどころか涙が出る始末だ。

くそっ……俺にはやっぱ、無理か……？ 殺せないのか……？ でも俺が殺さないと、スリイナは別の誰かに、容赦なく……殺さ



れる。それは……刃で切り裂かれるのかもしれない、銃で撃ち抜かれるのかもしれない、紐でくびられるのかもしれない、拳で殴り飛ばされるのかもしれない、薬でのたうち回されるのかもしれない。とにかく、何かに苦しむことになるのは確かだろう……。

……そう、だから、だからこそ、俺が楽に殺してやるんだ。

『フイー？ どうしたの？ 黙っちゃって？』

俺は袖で涙を拭い払う。……もう泣かない、迷わない。

「ああ、悪いな。それでさ、このあと……もうちょっと夜遅くに、会えたりするか？」

『フイー、泣いてるの？』

……妙に鋭いな。やつぱりずっと一緒だからか、ちょっとした声の違いが分かるのかも……。俺としては、もう大丈夫なつもりで声を出したんだけど……。

「ああ？ 泣いてるわけないだろ。で、どうなんだ？ 会えるのか？」

悟られるわけにはいかないので、俺はやや強めな態度で接した。

『……あ、会えるけど。どうしたの急に？』

「……何、ちよつとな。それで会うに当たって、少し頼みがあるんだけど……。」

『何？』

「俺がお前の家に行くってことは……誰にも言わないでくれ。あと、俺をこつそり、誰にも気づかれないうちに中に入れて欲しい」

『え？ なんて？』

お前を殺すためだ、なんて言えるわけがなく、

「……なんでもだ。それより、ダメなのか？ 無理なのか？」

『んー、ダメでも無理でもないけど……ほんとにどうしたの？ フイー、なんか変だよ？』

「別に変じゃねえよ……。」

『変だよ。なんで急に会おうなんて言い出すの？』

……しつこいな。

「とにかく会いたいからだよ！ それ以外に理由なんかない！」

あ……怒鳴っちまったよ……。これじゃあ電話をブツと切られて話がなかったことになるかもしれないぞ……。

しかし、俺のそんな不安をよそにスリイナは、

『……分かった。いいよ。じゃあね……。――一時期にうちの裏に来てくれる？ そのタイミングじゃないと誰にも気づかれずに入るのは難しいから』

と、至って普通に言葉を返してくれた。どことなく嬉しそうに聞こえたのは気のせいだろうか？ ……いや、そんなのどうだっていい。とにかく中に入れることになったんだから、それでいいんだ。

「分かった……。ありがとな」

『ううん。じゃあ切るね』

「ああ」

そうして電話は切れた。俺は携帯の液晶をぼんやりと眺める。

これでホントによかったのか？ とまたそんな疑問を抱きながら迷い始めてしまう。

だから俺は、頸椎がずれるんじゃないかと思えるほどにおもいきり首を振った。

迷いを振り払うために。

自分の思いは正しいんだと、そう思い込むために。

### 3章 5

俺はいま、最終準備を行っている。といつてもすることは一つしかなく、俺はその作業に真剣に取り組んでいるところだ。

その作業っていうのは、睡眠薬を水に溶かして、それを買ってきたミネラルウォーターのペットボトル容器に注射器で大量に注入、というものだ。

このミネラルウォーターを飲めば、恐らく誰でも昏睡状態になると思う。

あとは……これをスリイナに飲ませて、それから首を絞めれば……楽に逝けるはずだ。

注入作業が終わり、俺は劇薬と化した水をカバンに詰め込む。

時計を見れば午後一〇時五〇分。スリイナが言ってた時間まであと少しだ。

なので、俺は出発しようと思う。

……ホントに、これでいいんだよね？

そんな自問に頷きながら、俺は部屋を出る。

リールを起こさないよう細心の注意を払い、俺は階段を下りていく。

……俺は、間違つてないよね？

その問いにも、俺は自分で頷いた。

結局、俺は迷いを捨てられないでいる。だから、殺すための準備や行動をすることによって、気持ちを無理やり割り切らせていた。

あと、さっきから自問しては頷いて自問しては頷いてを繰り返して、自分は正しいんだと思い込ませている。

……俺がやらなくても、スリイナはどのみち誰かに殺されるんだ。なら、俺の手で殺してやるんだ。せめて苦しまないように。

「その通りだ……」

呟きながら、俺は外に出る。微風が俺の髪を揺らした。

雲に隠れたり出てきたりを繰り返している月に照らされた、誰も歩いていない住宅街の歩道。そこを一〇〇メートルほど歩くと、立派なお屋敷があった。

何百回、何千回と、数え切れないほど見てきたスリイナの家だ。しかし当然表には向かわず、スリイナが電話で言っていたとおりに裏へと回る。

するとそこには、寝巻きではなく白のワンピース姿のスリイナが立っていた。

……綺麗だな。

いつもはそんな風に思わないのに、いまはなぜかそう思う。

俺が見とれて突っ立っていると、スリイナは慌てたように近づいてきて、

「早く入って。このチャンスしかないから」

少し焦ったように言った。

俺はそれに頷き、スリイナに続く形でお屋敷の中へ踏み入る。

なんでも、いまの時間は警備やらなんやらの交代時間らしく、少しのあいだだけ屋敷の周りが無防備になるらしい。住んでる人にしか分からない情報だな。

おかげで、なんなくスリイナの部屋に到着することに成功。スリイナの部屋はふわっとした甘い匂いがしていて、不思議と落ち着く感じた。……そういえば、スリイナの部屋に入ったのっていつ以来だろ？

そんなことを考えていて、ふと本来の目的を思い出す。

何考えてんだ、俺は。これからスリイナを……目の前にいるスリイナを……こ、殺すんだろ……。

俺はそう思考を働かせながら、スリイナに目を向ける。

「何？」と言わんばかりに可愛らしく小首を傾げるスリイナ。

その柔らかな表情を見た瞬間　つうと、頬に涙が走った。絶対そんな表情を見せてはいけなかったのに、勝手に涙が出てきた。

いきなり泣き始めた俺に、スリイナは困惑しているようだ。

「ど、どうしたの？ フィー？」

それでも、心配して声をかけてくれるスリイナ。

けど、その声をかけられればかけられるほど、涙があふれてくる。止められないし、止まらない。

本人を目の前にして、俺の思いは揺れに揺れていた。

一体どうすればいいんだ……殺さないといけないのか？ どうすればスリイナのためのなるんだ？ 放っておくのが一番か？ 俺が殺すのが一番か？ ……ああ、分からん……。

「フィー……どうしたの？ほんとにどうしたの？ ねえ、フィー……」

心優しいスリイナは、俺の涙を見てもらい泣きを始めた。

お、お前は泣くなよ……。俺は、お前を殺すか殺さないかで悩みに悩んでおかしくなったあげくの果てに泣いてんだぞ？ お前が同情していい話題じゃないっつーの。

ああくそっ……。俺は、ここで何をすればいいんだよ……。

「どうすりゃあ……いい、んだよ……」

答えが返ってくるわけがないことなど承知した上で、俺は震える声で唸るように言った。

それにスリイナが反応したが、嗚咽交じりの言葉だったこともあってか、よく聞き取れなかったらしい。けど、聞き取れなかったからこそか、スリイナは俺に近寄って来て、

「……フィー、何か困ったことでも、あったの？ 私にできることなら、なんでもするよ？」

だとさ。

俺の目からは、さらに涙が出てきた。……なんでこんなにいい奴を、殺さなくちゃいけないんだ？

自問するように言葉を思い浮かべると、アイツが言葉を返してくる。

それはさ、俺が殺さないと、スリイナが他の奴に殺されるからだ。

さつきも言つたろ？ 俺が楽に殺してやるんだって。他の奴に任せたら、九九パーの確率で痛みを伴うぞ。

……そうなんだよな。

そうなんだよ。だから早く飲ませろ。俺のしてることは間違っちゃいない。スリイナだって知らない奴に殺されるよりだったら、俺に殺された方がいいに決まってる。

……だよな。俺が手を下してやることこそが、スリイナへのせめてもの手向けなんだよな。

だから、さつきからそうだって言ってるだろうが。ほら、分かったら水を取り出せ。それで飲ませろ。

お、おう……。

俺は涙と鼻水を袖で拭い、クリアになった視界でカバンを捉えた。そうして、中に入っているペットボトルを取り出す。

「……あのさ、俺はなんでもないんだ。ただな、さつきまで見てた映画のラストシーンがあまりに感動的だな。それで思い出し泣きをしてただけなんだ」

とんでもない大嘘。しかし、疑うことなど知らないスリイナは、「今度、その映画のこと詳しく教えてね……」と調子の狂うことを言い出す始末。

俺はそんな雰囲気になれないようにと、手に持つペットボトルを見た。この水の意味を再確認して、俺は非情になりきる。

「あのさ、これスリイナにやるよ。泣いたし、のど渴いたろ？」

「フィーだって号泣してたよ？ それにフィーが持ってきたんだから、フィーが先に飲むべきだよ」

ええい、その心遣いがこんな場面で厄介さを発揮するとは……。

「……いや、俺はいいんだ。スリイナが先に飲んでくれ。じゃないと、俺なんかと間接キスしたことなるぞ？」

「い、いいよっ！」

なんでやねん！

「あ、えと、その、ち、違うの！ あーのど渴いたなー。フィ



……やっぱり、俺には無理だ。スリイナを殺せない。

床にミネラルウォーターがトクトクとこぼれていたの、俺はそれを急いで拾う。

「ふい、フイー……？」

スリイナはただただ呆然とした感じで、俺の挙動不審を見ていた。

「……ごめん。帰るわ」

そう告げたのち、俺は返事も待たずにスリイナの部屋を出た。

廊下に出た俺は、窓の外を見やる。眼前に広がる通りには、未だ警備がない様子。

なので、俺は窓枠に手をかけて、一気に外へと飛び出した。

こうして、誰にも気づかれることなく、俺の殺人行為は未遂に終わった。



### 3章 6

「あ……」

家に帰り、自分の部屋に閉じこもろうとした俺は見た。 リールの部屋のドアがちよつとだけ開いている光景を。

そんな不自然なモノを見て俺は、最後に人を殺した日のことを思い出していた。

あの日、俺が仕事から帰ってくると、いまと同じようにドアがちよつとだけ開いていた。不審に思つて中を覗けば、トイレに起きたら俺がいなくて……とリールが泣いていた。

もしかしたら、いまもそうなってるんじゃないか？ 俺はそう考えて、リールの部屋まで駆ける。

「リール、ごめんな。いま帰ったぞ……つて、いない……？」

部屋を覗いてもリールはいなかった。……トイレかな？

ちよつと心配なつた俺は、一階にあるトイレへ向かう。しかし、トイレの電気は点いておらず、開けてみても誰もいない。……夜食でも食つてるのかな？

電気の点いていないリビングを見て、俺は望みの薄いことを考えていた。

一応リビングを覗いてみるも、冷蔵庫を漁るリールなんて、当たり前のように存在してはいなかった。……あれ？ じゃあリールは？ あ、もしかして俺の部屋？

俺は階段をドタバタと駆け上がり、自分の部屋へ飛び込んだ。けど、やっぱりリールはいなかった。

徐々に不安が襲いかかってくる中、俺は自分の机の上に何かが置いてあることに気づいた。なんだろう？ と思いながら近づいて俺は目を見開く。

机に乗っていたのは、ただのメモ帳の切れ端。だがそこに

『妹さんは預かった』

シンプルにそんな文字が書かれていた。

俺の頭の中に、最悪のシナリオが思い浮かぶ。

くそっ！ アイツツツツ

俺は神速で携帯を取り出し、例の番号に電話をかけた。

『はい、も』

「どういうつもりだっ！　なんでリールに手を出したっ！」

『これはこれは。ボイスチェンジャーもつけずに随分とご立腹のよ

う』

「ふざけんなっ！　ちゃんと答えろっ！」

『はて？　なんのこと』

「ふざけんなって言っただろうがっ！　リールはどこだあっ！」

『……やれやれ、「ふざけんな」というその言葉、そっくりそのまま君に返させてもらうよ』

「どういうことだ！」

『だって君、なんでスリーナ・フォシルニクスを殺さなかったの？』

「っ！」

『はは、驚いたかい？　私は君を監視してるんだよ。まあ、こんな無駄話はさておいて。君はなんで彼女を殺さなかったのかな？』

「……それは……」

『それは『友達だから』かい？　はっ、笑わせないでくれ。君はそういうことを言っではいけない立場の人間なんだ。そうだろ？』

人殺し』

「う、うるさいっ！　だからってなんでリールを巻き込んだっ！　リールは何も関係ないだろっ！」

『そう、関係ない。そして、だから巻き込んだ。私は気が変わった。どうしても君に、スリーナ・フォシルニクスを殺して欲しくなった』  
「……だから、リールが人質か？」

『ご名答。返して欲しいだろ？　だったら彼女を殺してくれ。タイムリミットは、そうだねえ……明日の午後一頃なんてどうかな？　ちようど一日つてところだね。それまでにスリイナ・フォシルニクスを殺すんだ。さもないと……』

「……さ、さもないと？」

『妹さん　死ぬよ』

「や……やめろっ……やめてくれっ　やめてくれえっ！　頼む！　なんでもする！　なんでもするから、だから、それだけは絶対にやめてくれえーっ！」

『あはははははっ！　妹さんを人質に取るだけで、君、そこまでパニックになるのかい？』

「頼むよ！　リールだけは……リールだけはやめてくれ！　お願いだから……」

『まあまあ、少し冷静になりなよ。だからさ、スリイナ・フォシルニクスを殺せばいいんだって。ね？　簡単でしょ？』

「……あ、ああ、そうだったな。そ、そうすればリールは……」

『元気な姿で君のところに返そう。約束するよ』

「ぜ、絶対だぞ！　絶対にだぞっ！」

『ああ絶対だ。約束しよう。じゃ、そういうことで頼んだよ』  
そこで電話は一方的に切られた。

「……………くそ　っ！」

リールを巻き込んでしまった。

絶対やってはいけないことを。

この世界に……裏世界に入る時に決めたルールを、破ってしまった。

でも、まだ助けられる。スリイナを殺せばいいんだ。それでリールは助かるんだ。

けど、スリイナを殺す、のか……。

もついい！　スリイナはどうせ殺されてしまう運命なんだ！　その役が俺に決まったただけだ！



## 4章 1

「ぐっ……」

俺は腹部に圧迫を感じた。

……朝か？　ったく、たまには普通に起こして欲しいもんだ。もう、リールはしょうがな……。

そこで俺は現実を思い出した。

……リールはいない。さらわれたんだった。

じゃあ、この圧迫はスリイナか？

予想を立ててから、俺は目を開ける。

「フイー、おはよ」

案の定、スリイナだった。穏やかな目を細めて俺を見つめるその姿は、昨日のことなどまるで気にしていないかのようなふるまいだ。  
「……」

俺はそれを見て思う。

殺す、と。

昨日の夜に決意したあの感情は、時間が経つとなぜか静まる怒りのように消えてしまっではいなかった。

リールは……リールはスリイナを殺さないと殺されてしまう。だから早いとこ、スリイナを殺さないと……。

「フイー、そういえばリールちゃんは？」

「え？　あ、それは……」

さらわれた、なんて事実を言うわけにいかないし、えっと……

「……友達の家泊まりに行ってたんだよ。珍しいだろ？」

「あ！　だから昨日私に泣きついて来たんじゃないの？　映画とか、ほんとは嘘だったりして？」

「べ、別に嘘じゃ……」

「いいのいいの。気にしないで。そういう時に私を頼ってくれるって嬉しいから……なんてね。朝食はもうできてるから、冷めちゃわ

ないうちに下りてきてね」

そう言い残して、スリイナは部屋から出て行った。

…… ああ、調子狂うなあ。これから殺すつてのに……っ！

俺は頭を振り乱して、甘い考えを振り払う。

非情になれ、非情になりきるんだ。

電話の野郎はどうしても俺にスリイナを始末させたいらしい。だからリールを人質に取った。もうスリイナを殺すことは回避できないことになったんだ。

もし仮に、ほんとにもしもの話だけど……俺がリールを見捨ててスリイナを殺さなかったとして、あの電話野郎はどうしてくる？ スリイナを殺す計画を止めるか？

いいや、答えはどう考えても 止めないだ。

あいつは、俺への嫌がらせでこんなことをしているんじゃない。目的があつてやっていると、手紙に書いていたし、電話で本人も言っていた。

ということとはだ、リールを見捨ててスリイナの命を助けたところで、スリイナの命の危機は去っていかないということだ。それどころか、むしろ俺ごと始末されるかもしれない。

そうなったら、俺とリールは無駄死にだ。

けど、そんな悲惨な未来を、スリイナを殺すことで確実に回避できるんだ。

なら、スリイナを殺すべきだ。どのみち殺される命一つで、それだけでリールが救えるというのなら、ためらう必要がまったくない。リールのためを思えば、そんなの安い取引じゃないか。

俺はいま考えていたことを何度も何度も反芻して、自分に言い聞かせる。

自分を正当化するために。 いや、正当化じゃない。これが最

初から正しい。これが正解なんだ。

…… よし、覚悟は決めた。

あとは、どう殺すかだ。

リビングに行けば、朝食……か。なら、睡眠薬を使うが一番か。やっぱり、なるべく楽に殺してやりたい。

いや、でも待て！ いまここで殺すのはダメだ……。このあとは学校がある。スリイナを殺してしまえば、当然スリイナは学校に行けない。すると、学校からスリイナの家に連絡がいくだろう。娘さんが来てませんよ、ってな。

そして、その連絡こそが最大の問題だ。

連絡を受けたスリイナの家の者にしてみれば、スリイナが朝、俺の家へと元気に出発したことを確認しているはず。すると当然、何か知っているんじゃないかと疑われるのは、この俺だ。

だからまず、学校には行かせないといけない。スリイナの家に連絡が入るのだけは避けないといけないからな。

したがって、ひとまずは大人しく朝食……だ。

俺は複雑な思いを抱えたまま、スリイナの待つリビングへ向かう。

「あ、やつと来た。遅いよ」

「……ごめん」

俺は食卓の椅子に腰かけて、対面のスリイナを見る。

いつもと変わらないおっとりとした表情。今日自分が殺されるなんてこれっぽっちも考えてもないだろう柔和な微笑み。そんな穏やかな顔の下に、俺は視線を移す。

そこには細い首がある。おもいつきり絞めれば、それだけで殺せる急所がある。人なんて脆いモノだ。簡単に、それはもう、いとも簡単に殺せる。

殺そうと思えばいつだって殺せる……。

でもいまはダメだ……。

……じゃあ逆にいつならいいんだ？ タイムリミットは今日の午後一一時頃。もう十数時間しかない。……一体どのタイミングで殺す？

このあとは学校。けど学校なんかで殺せるわけがない。

そしたらあつという間に夕方だ。帰り道に殺すか？ いいや、無

理だ。俺たちの帰る方向には、いつもそれなりの数の生徒が歩いている。道を逸らしてもダメだろうな。こちら辺は都会じゃないにしても、そこそこ大きな街ではある。それに、この一帯は住宅街。人殺しなんてできるわけがない。もしスリイナに叫ばれでもしたら、俺はそこでおしまいだ。ということでは帰り道も無理。

じゃあどうすんだ？ あとはもう家に帰るだけだぞ？ そんなことされたら、絶対にスリイナを殺せなくなる。屋敷の周りには警備がいるし、夕方っていう時間帯だと使用人さんたちだって大勢いるはず……って、あれ？ そうだ。スリイナは家に入れさえすれば、絶対に殺せなくなる。……だからあれじゃないか？ スリイナの身は安全なんじゃないか？ 例え、俺が殺すことを放棄して新しい殺し屋がやってきたとしても、なんとかなるんじゃない？ って、ならない！ 何を考えてんだ俺は！ リールが人質に取られてるんだぞ！ スリイナを殺すことを放棄したら、リールが殺されるんだぞ！ 放棄とか、何わけの分からないことを考えてんだ俺は！ ホントにバカだな！ 殺さないで殺されるって何回言い聞かせれば分かるんだよ！ 無駄な希望は捨てる！ もうスリイナは殺すしかないんだよつ！

はあ……話を戻そう……。

帰り道で殺せなかったらスリイナにはもう手が出せない、ってところまでだったな。

それでだ、その話から俺は一つの結論に思い至った。

その結論がどんなモノかと言えば

やっぱり、いまが絶好のチャンスなんじゃないか？ ってことだ。

きつとそうだ。ここを逃したらもう殺せない。いや、正確に言えば殺せないわけではない。けど、誰かに見られる可能性がある。もしたら俺はおしまい。

だからこそ、誰の邪魔も入らない、いまがチャンスだ。……でも、





でたどり着いた。

スリイナは俺を見上げる。俺はスリイナを見下ろす。  
スリイナの顔は完全に怯えていた。幼なじみに見せる表情じゃない。化け物を見るような目だ。怯えていて恐れていて畏怖しているような、そんな目だ。

けど、それを見ても俺は止まらない。

俺はスリイナの太ももの上に馬乗りになる。

「ねえ……フイー、どうしたの？ おかしいよ……？」

そんな状態になっても、こんな俺を見ても、まだ心配してくれるのか……。

くっ……でも、殺さないと。

何も関係ないのに巻き込まれたリールのために。

俺がスリイナを……殺すっ！

俺は包丁を高く振り上げる。

さあ、あとは一思いに包丁を振り下ろせば

んあ？ なんだ？ なんて動かない？ ……動け、動け！ 動け

！ 動けえ！

そう命じるも、俺の右腕は誰かにがっちりと掴まれているかのようには動かない。

くそっ！ なんて動かない！ 肩！ 腕！ 動けよ！ なんて動かないんだよ！ 動かさないとリールが、リールが殺されるんだぞ……。

耐えられない現実を考えながら命令を下しても、俺の右腕は別の生き物になったが如く反応を示さなかった。

……なんでだ？ リールより大切なものなんて、この世に存在しないはずなのに……なのに、どうして俺は、スリイナを殺せない……？ この機を逃せば、スリイナと二人きりのチャンスなんてもうないっていうのに！ どうして腕が動かないんだっ！

その時 俺の体が突然小刻みに震えだす。

最初、一体なんだ？ と思ったが、理由はすぐに嫌でも分かった。

視界がいきなり定まらなくなり、そのあと頬を何かが伝った。

どうやら俺は泣いているらしい。小刻みに体が震え、力が抜けてくる。振りかざしていた腕も下がり、俺の手から包丁が抜け落ちる。カアンと震えるような金属音が鳴り響いた。

俺は……殺せないようだ。俺はスリイナを……リールを人質に取られてもお殺せないようだ。

なんでだ？ ……一番大切なものを奪われてるのに、なんで殺せないんだ？

涙を流しながらそう考えていると、スリイナがいきなり俺を抱き寄せた。

「ねえ……フィーどうしちゃったの？ リールちゃんが泊まりに行っただけじゃ、こうはならないよね？ ……仕事がつらいの？ ……学校に行きながら働くのがつらいの？ それとも生きる環境がつらいの？ 何が一体どうしたの？ 話せることなら話してよ！ ねえフィー！」

こいつは……スリイナはなんでこんなに優しいんだ？ 俺のいまやろうとしたこと、分かっているはずだよな？ 殺そうとしたって、分かっているはずだよな？ なのに、なんでまだ優しく……厳しく声をかけてくれるんだ？

俺はただただ泣いた……スリイナの腕の中で、声を上げて泣いた。しばし泣いていると、いつの間にか学校に行く時間が近づいてきたらしく、

「……フィーは疲れてるんだよ。だから、今日はゆっくり休んで。先生には私が言っておくから。ね？」

スリイナはいつもの調子で俺に声をかけて、何ともなかったかのように家から出て行った。

そのあとの俺は いつまでも泣いてた。

## 4章 2

泣き終わってから何も考えられず、俺はスリーナを襲おうとした位置から一步も動かずにひたすら生気を失っていた。

ピピピピピ、ピピピピピ。

「ん……？」

俺は携帯の着信音を聞いて、はつきりとした意識を取り戻した。

「な……っ！」

そして 部屋のあまりの暗さに愕然とした。

……な、何時だ！ いまは一体何時だ！ け、携帯！ 携帯のディスプレイ！

メールが来たようなので、俺はその確認の意味も込めて携帯を取り出し さらに愕然とした。

ディスプレイには午後十一時の表記。

携帯を開いて来たメールを確認すると、『タイムオーバー』という件名。

「う、嘘だろ……嘘だよなあ……」

最悪の状況を思い浮かべてしまった俺は、うろたえながらメールを開く。

すると、そこには一枚の画像が添付されていて それを見た俺は崩れ落ちる。

この世で一番見たくなかったモノを見てしまったから……。

目を閉じて倒れているリール。

何よりも見たくなかった画像を見てしまった……。

震える手で画面をスクロールさせると、下には文章が続いていた。

残念ですが、タイムオーバーです。

やはり殺せませんでしたか。

「甘ちゃんですね。そして、そのせいであなたはこの世で一番大事なものを失ってしまった。」

ちなみに私も鬼ではないので、楽に死なせてあげましたよ。感謝してください。

[illegible]

まあ、冗談はこれぐらいにしておいて、いま言ったとおり、あなたには用済みです。

ですので、これから監視を任せていた者に、あなたと、そしてスリイナ・フォシルニクスを始末させます。

どうせもう、生きていても仕方がないでしょう？

妹さんとお友達とともに、永遠に眠ってください。

では、来世で会いましょう。

会えたらですけど。

最悪の展開が羅列されたメール。

けど、いまの俺にはそんなこと、どうでもよかった。

「リールが、リールがあ……うあああああああああああ  
 ああああああああああああああああああああああ  
 ああああああああああああああああああああああ  
 ああああああああああああああああああああああ  
 ああああああああああああああああああああああ」

言葉にならない叫びとともに立ち上がったのち、俺は破壊の限りを尽くし始める。

壁を殴り、蹴飛ばし、穴を空け。

小物を窓ガラスに投げ付け、砕け散らせ。

テーブルを持ち上げ、床に叩き付け、ただの木材へと変化させ。

そしてもう一度壁を殴ろうとしたところで 俺は、はたと我に返る。

「こんなことしてなんになるんだよお……！」

吐き捨てると同時に壁を蹴飛ばしたのち、俺は膝から崩れた。

「うああああ……リールう……」

俺が泣きじゃくってたばかりに……巻き込むだけでなく、死なせてしまった……。ごめん、ごめんなリール……。謝ったって許されることじゃないけど、でもごめんな……。どう償えばいい？ どう償えば、リールは俺を許してくれる？ 死ねば、死ねば許してくれるか？ だとしたら、俺は喜んで死んでやるぞ。もうじき俺も殺されるらしいから、それを黙って受け入れれば許してくれるか？ それにさ、おまけにスリイナも消されるんだ。これで寂しくないだろ？ あの世でも三人一緒だ……。

そう、三人一緒。

俺もスリイナもこれから殺されて、あの世に行くんだ。

あーあ……やっぱりスリイナはどのみち殺される運命だったわけだ。

なら、遠慮せずに殺せばよかった。

そうすれば、俺とリールは生き残れたのに……。

大体なんで、俺はスリイナを殺せなかったんだ……？

なんでだ？

リールを人質に取られてたのに、俺はなぜ、スリイナを殺せなかった？

そんな風に考えて、俺は一つの答えを、結構簡単に、導き出した。

俺にとってスリイナは、リールと同じぐらいに大切だった、ってことなのだろう。

ただ、なんでスリイナが大切なのがよく分からない。リールは家族で妹だから守りたいと思うのは当然だ。けど、スリイナにも似たような思いを抱いている理由が、俺には分からない。

でも、その結論に至った途端、俺は『このままじゃいけない!』  
と思えるようになってきていた。

リールは守れなかったけど、スリイナだけは守らなければいけないんじゃないかと。

そんな、一種の使命感みたいなものが、俺の中に湧き上がってきた。

リールと同じく大切だと思えるスリイナを守ることで、リールを守れなかった代わりになるんじゃないかと、俺はそう思っているのかもしれない。

もちろん、そんなことしたところで、リールを死なせてしまった事実が消えるわけじゃないことぐらい、俺は理解している。

けどこのまま無駄死にしたら、なんとなく、なんとなくだけど。

リールに怒鳴られそうな気がするんだ。

スリイナを守れなかった上での無駄死に、っていうのは最低だろ？

だけどスリイナを守った上での死、だったらどうだろうか？

名誉ある死に方だし、これだったらリールも許してくれるんじゃないだろうか。

つまり　そう、つまり　俺は、スリイナを庇って死のうと思  
う。

スリイナに迫ろうとしている死を一度だけ、俺が肩代わりしよう  
と思う。

そのあとスリイナは、殺されるかもしれないけど、それでも俺は、  
スリイナを一度だけ、死から守ろうと思う。

よくよく考えてみれば、スリイナだってリールと同じぐらいにか  
わいそうなんだ。

何も知らずに命を狙われていて、おまけに幼なじみから包丁を向けられたりしてき。

ただ普通に暮らしてただけなのに巻き込まれた。

この点は、リールもスリイナも一緒なんだ。

つまり、リールが死んだのがスリイナのせいだって思うのは、間違いないんだ。

少なくとも、リールとスリイナは何も悪くない。

悪いのは、裏世界の住人であるこの俺だ。

俺が裏世界なんかに入ってさえいなければ、こんなことには巻き込まれなかったんだからな。

その罪滅ぼしっていうのかなんていうのか……とにかく、そういうのも全部ひっくるめて、俺はスリイナを守って死のうと思う。

都合がよすぎるか？

なんとでも言え！

俺はもう決めたんだ！

やられっぱなしも嫌だしな！

それじゃあ、考えごとはここまでだ。

俺を監視していた奴が俺とスリイナを殺しに来るってことは、その殺し屋はすぐ近くに居るってことだ。

だから急がないと！

スリイナのところに急がないといけない！

いまは……午後一時五分。

そうか！ タイムリミットをこの時間帯に設定したのは、俺がスリイナを殺せなかった時のことを見越していたからか！

スリイナの家警備は午後一時ごろだけ手薄になるとスリイナは言っていた。

つまり、スリイナを殺せなかった俺に代わり、スリイナを殺すこととなった殺し屋が、少しでも、スリイナを殺しやすくするために、午後一時、というタイムリミットは設定されていたのだ。

とか考えている間に無駄に一分経っちゃった！



くそつ、急がないとな！

そう考えたのち、俺は無我夢中で我が家を飛び出した。  
誰になんと言われようと スリイナを守るために。

## 4章 3

スリイナの家に着すると、やはり警備がいなかった。しかし、中から悲鳴などが聞こえてくる様子はない。

まだ襲撃されてないのかもしれないぞ！ それなら！

俺は昨日スリイナに案内されたルートを通って、スリイナの部屋へ向かう。

たどり着くと、俺はノックもせずにドアをおもいつきり開け放った。

「スリイナ！ 無事か！」

「きゃあ！」

よかった、無事みたいだ。

「いったん静かに」

俺は顔の前に人差し指を持ってきながら、小声の最大出力で言葉を発した。

「ふい、フィー？ どうしたの？」

説明してる暇はない。もしかしたら、いまの俺みたいにもう侵入しているのかもしれないからな。 いや、確実にしてるだろう。

俺でさえ簡単に入れたんだぞ？ 監視もこなせるような熟練の殺し屋が侵入できないはずがない。

だから、俺はスリイナの腕を握って、

「逃げるぞ」

何よりも優先しなければならぬ事項を告げた。

「え？ 逃げる？」

スリイナは困惑していたが、俺は構わず引つ張った。

家の中に居ちゃダメだ。殺し屋と鉢合わせでもしたらそこで終わる。それよりだったら、どう考えても外に逃げるのが一番いいはず。当たり前だけど外の方が逃げやすいし、隠れる場所もたくさんある。

俺は侵入時と同じルートを通り、なんなくスリイナを外に連れ出した。

ホントに弱点すぎるだろ、この時間帯っ！　　って、そんな突っ込みはあとと！　いまはとにかく逃げなくちゃなっ！  
とか思っていたその時

「いやあああああああああああああああああああああ  
あっ！」

スリイナの家の中から、金切り声が聞こえてきた。　　や、やっぱりいたのか殺し屋っ！

「ええっ？　な、なんで私の家から悲鳴が聞こえたの？　ねえ、フイー？」

「説明は走りながらな！　とにかく逃げるぞ！　ホントにヤバイから！」

「う、うん」

可愛らしいパジャマに身を包んだスリイナと一緒に、俺は夜の住宅街を疾走し始める。向かう先は……とりあえず学校方面だ！

「ねえ、フイー？　それでフイーは何しに来たの？　なんで逃げるの？」

「まああれだ、早い話がお前を狙ってる奴がいるんだ」

殺されるという部分はオブラートに包んだ。氣力をなくされたら困るからな。

「んー……なんでフイーがそんなこと知ってるの？」

「え？　あー、んー、その、まあ……」

……説明すると長いし、正直に言えるような理由でもないしなあ。  
うーんと……

「……勘だ」

「凄い勘だね！」

ふう、天然でよかった。

「あ、そういえばリールちゃんは帰ってきた？　今日一緒に帰ろう  
と思って校門で待ってたけど、いつになっても来なかったよ？」

……くっ、リールはもう……。 いや、ここで悲しむな。スリ

イナに悟られたらダメなんだ。

「……ああ、帰ってきてる。家で……ぐっすり寝てるよ」

「そっか、それならよかった。それでフィー、元気は出た？」

「……ん、ああ。……それでさ、朝、変なこととしてごめんな……」

「うっん、気にしてないよ。……ちよつとだけ怖かったけど、フィ

ーは人なんか殺さないって信じてたから……」

人なんか殺さない……か。ホントにそうなら、ここで胸張れるの  
にな。

でも、スリイナは俺なんかのことを、そこまで信用してくれてる  
のか……。

「……ありがとな。そうやって、その……信じてくれてさ」

「それは当然だよ。いまだってこうやって助けてくれてるし、お礼  
を言うのはこっちの方。ありがとね、フィー」

俺の方を向いて微笑んでくれたスリイナの表情は、夜の暗さなん  
かに負けないくらい明るいものだった。

……なんか照れくさい。そんな風に思ってる場合じゃないのに。

そう、ホントにそんなことを思ってる場合じゃないんだ。

「スリイナ、話はまたあとでな。いまはとにかく必死に逃げるんだ。  
そうしないと……もしかしたら……殺されるかもしれないぞ？」

言おうかどうか迷ったあげく、結局俺は言ってしまった。もしか  
したらその方がやる気もアップするんじゃないかな？ という望み  
を込めて。

俺は恐る恐るスリイナの顔を見やる。すると、残念ながら怯えた  
表情になっていた。

あー、やっぱり言わなきゃよかった。とか悲観してる場合じゃない。  
フォローしないと。

「あんなスリイナ、でも大丈夫だ。安心しろ。俺が命に代えても、  
絶対逃がしてやるから。な？」

そう声をかけたのち、俺はプライスレスなスマイルをスリイナに

見せつけた。

「うん、ありがと」

スリイナは俺に、笑みを浮かべて返してくれた。  
癒しをくれる、優しい笑みだ。……頼むから、ずっとその顔でいてくれよ。

いまはそれが原動力なんだからな。

あ、そういや……スリイナの家の方はどうなった？

考えながら、俺は振り返った。

「ん……？」

何やら黒い人影がこちらに向かってきていることに気づく。……

あいつか？ あいつが殺し屋なのか？

直後、人影は一瞬だけ街灯に照らされた。そして俺には、その姿がよく見えた。

そいつが黒い理由は、夜の闇のせいじゃなかった。着ている服が実際に真っ黒だったんだ。まさに殺し屋といった格好。

けど、いまは武器を持っていないみたいだったので、俺はほんの少しだけ息を漏らした。

だが、安心なんてまだできない。相手はそこら辺の不良とはわけが違う。

本物の殺し屋だ。俺とは違って、身体能力が高そうなタイプだった。

「スリイナ！ スピード上げてくれ！」

「う、うん」

スリイナ、そろそろバテてきたか？ ……どこまで逃げられるか。でも、逃げ切れなくなったら、俺が身代わりになってスリイナを逃がす。命に代えても逃がす。

そう、それでいい。そう決めたんだからな。

それからしばらくは走りに走った。どんなもんだ、と思ったところでふと振り返ってみると、差は確実に縮まっているようだった。目測で五〇メートルといったところだろうか。

ヤバイな……こりゃ。ホント早いとこ、入り組んでるような場所に入らないと。

で、こちら辺で入り組んでる場所はどこやねんって言ったら……やっぱり学校だ。小中高の校舎やらなんやらで、あそこは入ったことのない人間なら必ず迷うはずだからな。

学校までは……周りの景色から察するにあと少し。

「スリイナ！ とりあえず学校まで頑張れ！」

「……う、うん」

ヤバイな。スリイナ、運動は苦手だからなあ……。とりあえず学校の敷地に入れば、俺が命をかけて時間を稼いでやれるのに。そうすればきつと、逃げ切れる可能性は上がるはずだ。

俺は殺し屋との距離を確かめるためにもう一度振り向く。

ああ確実に縮まつてる。もう四〇メートルってとこだな……。

殺し屋のあまりの速さに、顔をしかめながら正面に戻すと、我らが学び舎が見えてきていた。

おお、走ると案外早く着くもんだなあ。

俺は感心しながら顔をほころばせた。これなら、なんとかスリイナを逃がすことだけはできそうだからな。

そうして一分ほど走って、俺とスリイナは校門を突破した。

次に待ち受けるのは、左側の初等部・中等部ルートと右側の高等部ルート。真ん中の巨大グラウンドルートもあるが、そこは隠れる場所も何もないからパスだ。

うーん……校舎が二棟もある左側ルートの方がいいな……よし！

「スリイナ！ 初等部の方に　　っておい！ スリイナ！ 歩くな！」

「もう無理……フィーは、先に、逃げて……」

「ったくもう！」

俺は弱気なことを言っているスリイナをお姫様抱っこした。

「……お、重いでしょ？ 降ろしていいよ。まだ走れるから」

「重くない！ いいから黙って体力を回復させてろ！ 絶対逃がし

てやるからな！」

が、人を抱えて逃げられるほど、殺し屋は甘くなかった。  
歩くように走る俺の背中に、冷たい何かが突きつけられた。

「止まれ」

腹に響いてくるかの如く重くて低い威圧ある声が、真後ろから聞こえた。

俺はスリイナを急いで降ろし、

「逃げろ！ 早く逃げろ！ ここは俺があ……っ！」

俺は背中をおもいつき蹴飛ばされた。

「フイー！」

スリイナは走り出そうとしていた足を止めて、俺に向かって声を上げた。

「止まるな！ 早く逃げろ！ 俺はいいから……お前は、スリイナは生きろっ！」

「やだっ！ フイーを置いていくなんてできない！」

「わがまま言うな！ このままじゃ……このままじゃ殺されるんだぞ！ いいから逃げろってば！ ホントに死ぬぞ！」

「いいよ！ フイーとだったらここで死んでも構わない！ だから私は逃げない！」

「そんな……そんなこと、言うなよ……」

それじゃあ……俺が必死にここまで連れてきた意味がないじゃないかないかよ……。

とそこで

パチパチと、殺し屋がどこかわざとらしい小さな拍手をした。

「美しい、実に美しい。この仕事をしていて、まさか本当にそういう現場に出会えるとは思わなかった……。だがな」

殺し屋はそこで言葉を区切ると、右手に持ったハンドガンの引き金に指をかけ、それから銃口をこちらに向けてきた。

「……続きはあの世でやれ」

俺は撃たれると思い、反射的に目をつむった。

けど、まだ撃たれなかった。

俺がおっかなびつくり目を開けると、殺し屋は思い出したように

「そうそう」と呟いた。

「主に、お前がなぜあの依頼を遂行できなかったのか。その理由を聞いてこいと言われている。さあ言え。殺すのはそれからだ」

あの依頼……っていうのは、もちろん今回のスリイナ暗殺のことだろう。

……でも、なんでこいつの主がそんなことを知りたがるんだ？

主っていうと、あの電話野郎のことなんだろうけど……それはまず、いいか。

それより理由ねえ……それはまあ、スリイナが大切だからなんだけど……実は、それよりもさらに詳細な理由っていうのが、俺の中にあつたりする。それに気づいたのは、別にいまじゃない。今日でも昨日でもない。ずっと前に気づいてたんだ。

なんでスリイナのことが大切なのか。それはずっと前から分かってたんだ。でも俺は、いままでそれを否定していた。

……だって、すげえ恥ずかしいことだからな。

でも、もういいや。

どうせ死ぬんだから、最期……スリイナに聞いてもらおう。

「……いいぜ、教えてやるよ」

俺はおもむろに立ち上がり、殺し屋の正面に立つ。

それから、大きく息を吸って吐く、吸って吐くを数回繰り返した。

「ふう……」

俺がスリイナを殺せなかった理由。

あんなに泣いて、ためらって、結局殺せなかった理由。

俺はもう一度大きく息を吸って吐き、それからスリイナを指差して大声で言っちゃった。



「俺はこいつが！ スリイナ・フォシルニクスが大好きだからだ！」

「へ？」とスリイナの声が聞こえた気がした。

ああくそっ！ 死ぬ前でも死ぬほど恥ずかしいなこれ！

ああ早く！ 殺し屋さん！ 早く一思いに撃つてくれ！

すると、そんな願いが通じたのか殺し屋さんは

「そうか。主も納得だろうな。じゃあ……」

殺し屋は銃の引き金を

「じゃあ……またな」

殺し屋は銃の引き金を 引かなかった。引かないどころか、き

びすを返して来た道に戻ろうとさえしている。

なんでやねん！

「ちよい待ちいや！ なんであんた帰んねんっ！」

俺が呼びかけると、殺し屋はさも当然とばかりに言葉を切り出す。

「なんでって、納得のいく答えをもらったから帰るんだよ。じゃあな小僧。その娘のこと大切にしろよ」

はっ？ えっ？ ちよ、ちよって何これっ？ ドツキリ？ ドツ

キリなのか？ じゃああれは？ プラカードみたいな持ってる人は？ って、ちよっと待てえい！

俺は殺し屋さんにダッシュで近づいていき、いま一番聞きたいことを訊ねる。

「あ、あの、リールは？」

「ああ、あのお嬢ちゃんな。いま頃はお前の家でぐっすり眠ってると思うぞ」

「ど、どちらの意味で？」

「普通の意味だよ」

ははははは、と笑いながら殺し屋は立ち去っていく。

俺はそれを、ただただ呆然と立ち尽くしながら見ていた。

……何これ？ はっ、マジで意味分からんしい。

「……なあ、スリイナ。お前何か知って………あっ！」

ちよい待て！ 何がなんだかホントにわけが分からないんだが……  
……一つだけ、もの凄いトンデモな事実を、俺は覚えているぞ……。  
……あ、あの、あああの恥ずかしい台詞がぁ……ぬおおおお  
おおおっ！ 死ぬる！ 恥ずかしすぎて死ぬる！ 悶絶死できる！  
「……ねえ、フィー？」

どこその民族よろしく垂直ジャンプを繰り返している俺へと、ス  
リイナがうつむき加減で近づいてきた。

「な、なんだよ！」

俺はすぐさまスリイナに背を向ける。くう……恥ずかしい。

「その……さっき言ってたのって……ほんと？」

「う、嘘に決まってるんだろ！ ああ言えばもしかしたら納得して帰  
つてくれるかなあって思ったただけだ！ お、お前のことなんか好き  
じゃねえし！」

ツンデレか！ 俺、ツンデレか！

「えへへ、そういうことでいいよ」

「そういうことでいいとかじゃねえし！ ホントに好きじゃねえも  
ん！」

「べ、別にそこまで否定しなくても……」

スリイナの元気が急激になくなった。俺は慌てて振り返る。

「その、好きではないけど、だからって別に嫌いってわけじゃない  
ぞ？ それにあれた。どっちかって聞かれれば、その……好きだし  
な」

俺は恥ずかしい告白をしてから、初めてスリイナの顔をちゃんと  
見た。けどそれは一瞬だけで、台詞の最後の辺りは殺風景なグラウ  
ンドを見ていた。

だって、目え合わせんの無理だもん。

俺が頬を掻き掻きしながら色々なところを見てみると スリイ  
ナが突然抱きついてきた。俺のちょうど胸辺りにあるスリイナの頭  
からは、とにかくいい匂いがしてくる。

リールから得られる幸せに似たものを、俺はスリイナから感じた。

……でさ、こういう時って、俺はどうすればいいの？

俺は魔方阵でも描くかのように、虚空に手をさまよわせている。

……この手でどういう行動を取ったらいいのかが、まったく分からないんだ。

頭をなでるべきか？ それとも抱きしめるべきか？ はたまた

尻でもなでるか？

あ、いや、その……三番目はもちろん冗談だけどさ。

にしたって一番目と二番目、どっちが正解だ……？

俺がホントに戸惑っていると、スリイナは俺の胸にうずめていた顔を突如上げた。

近っ！ そして可愛いつ！

俺はマツハにも劣らない速度で、中途半端に星が瞬く空を見上げた。

「す、スリイナ！ 急に上向くな！」

「あ、ごめん。ところで、その、あのね……フィーがああ言ってくれたことに対して、私、まだ返事してないから……だから、その、い、言おうと思って……」

「あの恥ずかしい発言を忘れてくださいお願いします……って言うたら忘れてくれないか？」

「……絶対に無理だと思う」

「そげですか……」

「それより、そろそろ返事してもいい？」

「ほ、ホントに返事すんのか？」

「うん……」

……だ、抱きつかれてるわけだから、その、ある程度の予想はついてるけどさ。で、でもやっぱり、本人にちゃんとと言われるまでは……なんとも言えないよな。

心臓の鼓動を普段の四倍速ぐらいでお送りしながら、俺は黙って返事が来るのを待つことに。

すると、スリイナは俺を抱きしめる力をいっそう強くした。

そして

「私も大好き……」

だとさ。

俺はそのお礼というかなんというか……さまよわせていた手に行動を促した。

魔方阵描くのはもうやめて、スリイナを抱きしめろってな。

正直な話、スリイナを抱きしめるのはこれが初めてだった。幼い頃から一緒だけどさ、やっぱ抱きしめる機会なんてないからな。

感想としては、とてもいい感触だ、とても言っておこう。

それでだ、スリイナの返事を聞いた感想としては、めっちゃくちゃ嬉しい。

けどさ、嬉しいのはいいんだけど、なんか、根本的なことを忘れていたような……。

あ！ 思い出した。

この一連の出来事って結局なんなんだ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4206z/>

---

幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち？

2011年12月31日18時49分発行